元総社明神遺跡IX

土地区画整理事業に先立つ埋蔵文化財発掘調査概報

1991

前橋市埋蔵文化財発掘調査団

元総社明神遺跡 Ⅸ

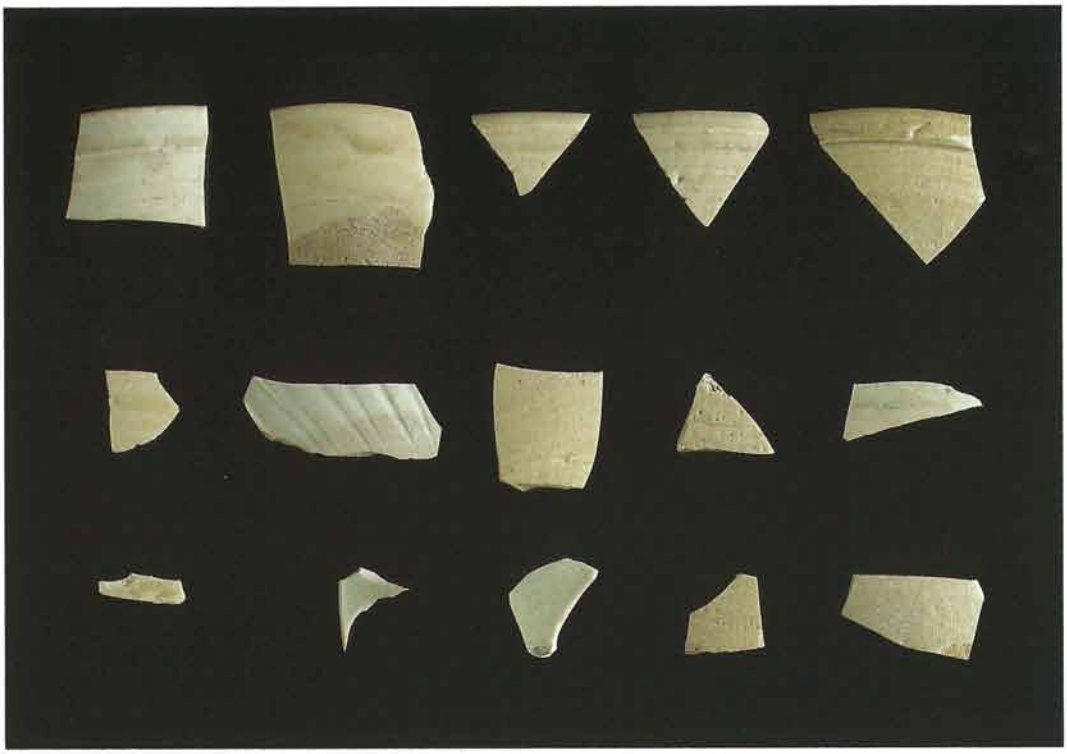
前橋市埋蔵文化財発掘調査団

巻首図版１

１．29トレンチ全景（航空写真）

２．29トレンチ全景（西より）

巻首図版２



１．29･Ｚトレンチ出土の白磁（平安時代）

２．29トレンチ出土の緑釉（平安時代）

巻首図版３

１．29トレンチ出土の土器（古墳時代）

２．29トレンチ出土の五輪塔（16世紀後半）

序

前橋市は、北に関東平野を一望できる雄大な赤城山をいだき、西に榛名山を仰ぎ、坂東太郎として名高い利根川や詩情豊かな広瀬川の清流が市街地を貫流する、水と緑にあふれた美しい県都であります。

遠く古墳文化の時代には東国の中心とも言える文化を築き、続く律令政治の時代に入ると元総社に上野国府が置かれ、山王廃寺、国分二寺が立ち並ぶ一大政治文化圏が形成されました。さらに近世には、利根川をはさんで廐橋城と総社城、そして近代に至っては生糸の主要生産地として繁栄を生み出してきたように、前橋には歴史が織り成した様々な情景が満ちています。

市の西部にあたる元総社地区は、古代上野国の中心地域であり、数々の歴史的遺産が残されています。しかし、時代の趨勢から土地区画整理事業が避けられない事となりました。そこで、その一環として、事前の発掘調査をする運びとなり、今年で9年次を迎えました。

今年度の調査では、古墳時代から中近世にわたる長い年月の文物が重なって発見されました。古墳時代と平安時代の竪穴住居跡、掘建柱建物跡、土坑等が重なりあい、切り合っていました。また、中近世の堀や土塁等も検出し、八日市場城との関連も推定できるものでした。

今後、調査に伴う幾多の遺物等や記録資料に検討を加え、社会教育・学校教育の場に充分活用していく所存であります。

最後に、区画整理第1課の担当者及び元総社第三明神地区区画整理審議委員や地権者の方々、発掘作業に従事して下さった作業員の方々、遺物の整理にあたり指導助言いただいた関係機関や各方面の方々に厚く御礼を申し上げます。

平成3年3月

前橋市埋蔵文化財発掘調査団

団長　遠藤次也

例　　言

1．本報告書は、前橋市都市計画事業元総社（西部第三明神）地区土地区画整理事業 施工者 前橋市代表者 前橋市長 藤嶋清多が実施する区画整理事業に係る元総社明神遺跡発掘調査報告書である。

尚、平成元年度に調査のＺトレンチについても、整理作業の都合により掲載する。

2．遺跡は、群馬県前橋市元総社町3,643番地ほかに所在する。

3．調査は、前橋市埋蔵文化財発掘調査団 団長 遠藤次也が施工者 前橋市 代表者 前橋市長 藤嶋清多と委託契約を締結し実施した。

調査担当および調査期間は以下の通りである。

発掘・整理担当者　　井上敏夫・鈴木雅浩（前橋市埋蔵文化財発掘調査団調査係）

試掘・発掘調査期間 平成元年10月11日～平成元年12月27日 平成２年５月７日～平成２年10月３日

整理・報告書作成期間 平成２年１月５日～平成２年３月15日 平成２年11月１日～平成３年３月15日

4．本書の原稿執筆・編集は井上・鈴木が行った。整理作業をはじめ図版作成には、岩木　操・大田一郎・岸フクエ・住谷文彦・渡木秋子・湯浅たま江・湯浅道子の協力があった。

5．下記の専門的分野については、次の機関ならびに方々のお世話になった。（敬称略）

地質・地形：パリノ・サーヴェイ株式会社

白磁・緑釉：大西雅広（財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団）

五輪塔：秋池武・磯部淳一（群馬県教育委員会文化財保護課）

6．発掘調査で出土した遺物は、当調査団より前橋市教育委員会に保管責任を依頼し、前橋市教育委員会文化財保護課収蔵庫で管理されている。

凡　　例

1．挿図中に使用した北は座標北である。

2．挿図に、建設省国土地理院発行の１/20万地形図（長野・宇都宮）と１/2.5万地形図（前橋）を使用した。

3．本遺跡の略称は２Ａ45である。（尚、平成元年度における略称は１Ａ41である。）

4．各遺構の略称は次の通りである。

Ｈ…古墳～平安時代の住居址、Ｂ…掘立柱建物址、Ｉ…井戸、Ｄ…土坑、Ｐ…ピット、Ｗ…溝、Ｓ…防空壕

5．遺構・遺物の実測図の縮尺は次の通りである。

遺構　　住居址・土坑・井戸…1/80、竈…1/40、全体図…1/200・1/250

遺物　　玉…1/2、土器・石器…1/3、瓦…1/4、石製品…1/3・1/6

6．スクリーントーンの使用は次の通りである。

遺構断面図　　火山灰…濃点、構築面…斜線

遺物実測図　　黒色処理…網、炭化物…斑、赤色塗彩…淡点、施釉範囲…霙、
朱塗彩…淡点、金箔塗彩…霙、須恵器断面…黒塗、
灰釉陶器断面…濃点、土器使用痕…細斜線

―目　　次―

序

Ⅰ　調査に至る経緯 …… 1

Ⅱ　遺跡の位置と環境

1　遺跡の立地 …… 1
2　歴史的環境 …… 3

Ⅲ　調査の経過

1　調査方針 …… 6
2　調査経過 …… 7

Ⅳ　層　　序 …… 8

Ⅴ　調査区の遺構と遺物

1　29トレンチ
住居址 …… 9
掘立柱建物址 …… 24
井戸址 …… 25
溝　　址 …… 25
その他の遺構 …… 26
土　　坑 …… 27
2　Zトレンチ
住居址 …… 30
土　　坑 …… 36

Ⅵ　まとめ …… 36

付　　編

元総社明神遺跡の地層・地形分析（株式会社パリノ・サーヴェイ） …… 39

図　　版

口 絵　1　29トレンチ全景(航空写真)・29トレンチ全景
口 絵　2　白磁・緑釉
口 絵　3　古墳時代土器・五輪塔

PL. 1　29トレンチの遺構
2　29トレンチの遺構と遺物出土状態
3　29トレンチの遺構と遺物出土状態
4　29トレンチの遺構と遺物出土状態
5　29トレンチの遺構と遺物出土状態
6　29トレンチの遺構と遺物出土状態
7　Zトレンチの遺構
8　Zトレンチの遺構と遺物出土状態
9　Zトレンチの遺構と遺物出土状態
10　Zトレンチの遺構と遺物出土状態
11　Zトレンチの遺構と遺物出土状態
PL. 14　29トレンチ出土の遺物
15　29トレンチ出土の遺物
16　29トレンチ出土の遺物
17　29トレンチ出土の遺物
18　29トレンチ出土の遺物
19　29トレンチ出土の遺物
20　Zトレンチ出土の遺物
21　Zトレンチ出土の遺物
22　Zトレンチ出土の遺物
23　Zトレンチ出土の遺物
24　Zトレンチ出土の遺物

挿　　図

頁

Fig. 1　元総社明神遺跡の位置 …… 2
2　元総社明神遺跡位置図 …… 2
3　元総社明神遺跡周辺図 …… 4
4　元総社明神遺跡グリッド設定図… 5
5　元総社明神遺跡調査経過図 …… 6
6　元総社明神遺跡標準土層 …… 8
7　29トレンチ全体図(1)…… 51
8　29トレンチ全体図(2)…… 53
9　29トレンチ遺構図(1)…… 55
10　29トレンチ遺構図(2)…… 56
11　29トレンチ遺構図(3)…… 57
12　29トレンチ遺構図(4)…… 58
Fig. 13　29トレンチ遺構図(5)…… 59
14　29トレンチ遺構図(6)…… 60
15　29トレンチ遺構図(7)…… 61
16　29トレンチ遺構図(8)…… 62
17　29トレンチ遺構図(9)…… 63
18　29トレンチ遺構図(10)…… 64
19　29トレンチ遺構図(11)…… 65
20　29トレンチ遺構図(12)…… 66
21　29トレンチ遺構図(13)…… 67
22　29トレンチ遺構図(14)…… 68
23　29トレンチ遺構図(15)…… 69
24　29トレンチ遺構図(16)…… 70

Fig. 25 29トレンチ遺構図(17) …… 71
26 29トレンチ遺構図(18) …… 72
27 Zトレンチ全体図(1) …… 73
28 Zトレンチ遺構図(1) …… 75
29 Zトレンチ遺構図(2) …… 76
30 Zトレンチ遺構図(3) …… 77
31 Zトレンチ遺構図(4) …… 78
32 29トレンチ出土遺物(1) …… 79
33 29トレンチ出土遺物(2) …… 80
34 29トレンチ出土遺物(3) …… 81
35 29トレンチ出土遺物(4) …… 82
36 29トレンチ出土遺物(5) …… 83
37 29トレンチ出土遺物(6) …… 84
38 29トレンチ出土遺物(7) …… 85
39 29トレンチ出土遺物(8) …… 86
Fig. 40 29トレンチ出土遺物(9) …… 87
41 29トレンチ出土遺物(10) …… 88
42 29トレンチ出土遺物(11) …… 89
43 Zトレンチ出土遺物(1) …… 90
44 Zトレンチ出土遺物(2) …… 91
45 Zトレンチ出土遺物(3) …… 92
46 Zトレンチ出土遺物(4) …… 93
47 Zトレンチ出土遺物(5) …… 94
48 Zトレンチ出土遺物(6) …… 95
49 Zトレンチ出土遺物(7) …… 96
50 Zトレンチ出土遺物(8) …… 97
51 Zトレンチ出土遺物(9) …… 98
52 29・Zトレンチ出土遺物 …… 99
53 元総社地区遺跡地周辺旧状想定図… 100

表

頁
Tab. 1 29トレンチ土坑表(1) …… 27
2 29トレンチ土坑表(2) …… 28
3 29トレンチ土坑表(3) …… 29
4 Zトレンチ土坑表 …… 36
5 29トレンチ遺物観察表(1) …… 43
6 29トレンチ遺物観察表(2) …… 44
7 29トレンチ遺物観察表(3) …… 45
頁
Tab. 8 29トレンチ遺物観察表(4) …… 46
9 Zトレンチ遺物観察表(1) …… 47
10 Zトレンチ遺物観察表(2) …… 48
11 Zトレンチ遺物観察表(3) …… 49
12 白磁観察表 …… 50
13 緑釉観察表 …… 50

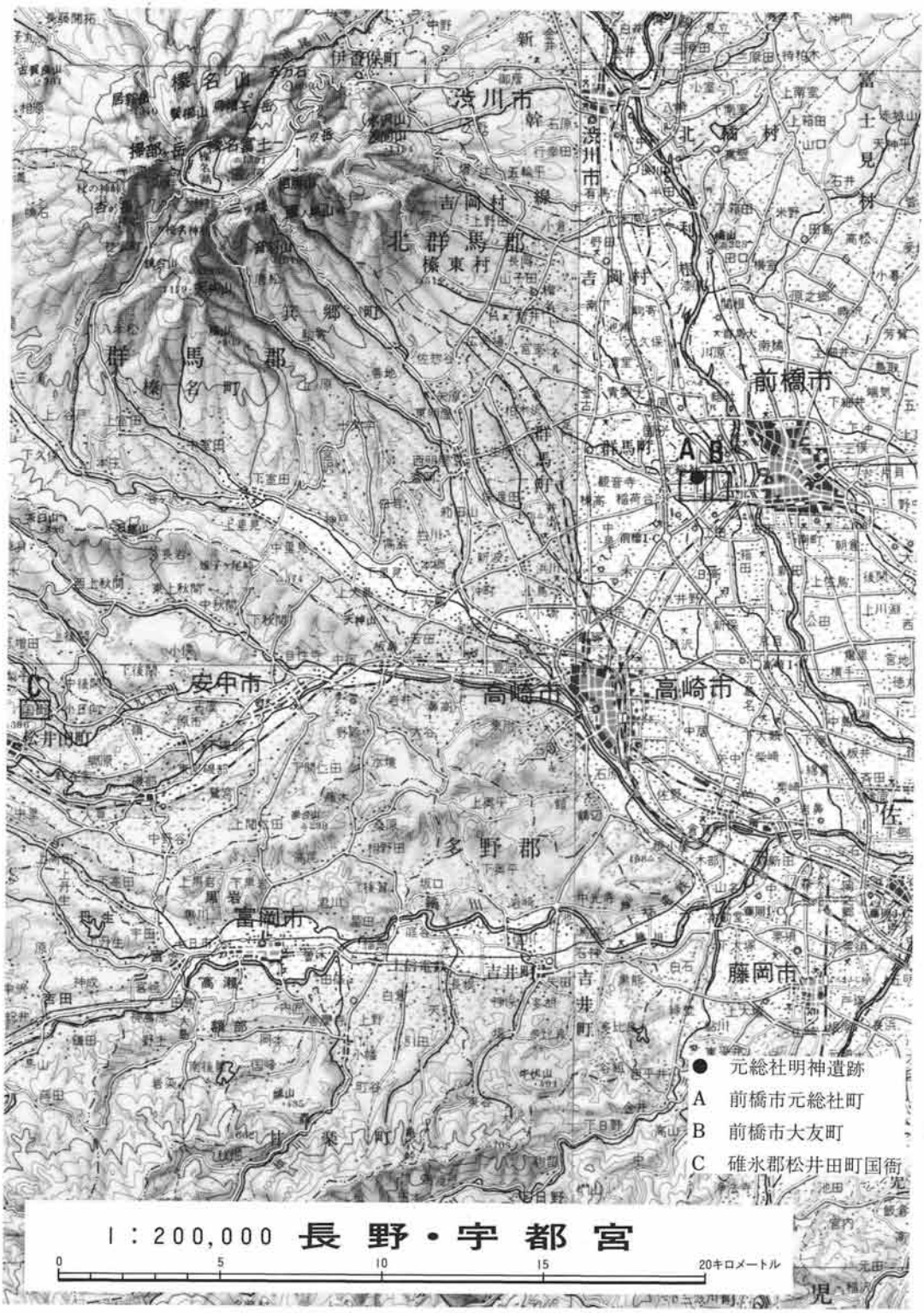


Fig. 1　元総社明神遺跡の位置と上野国府

Ⅰ　調査に至る経緯

昭和48年に計画策定された前橋市都市計画事業元総社地区土地区画整理事業について、事業担当課である区画整理１課と当局の協議が重ねられ、道水路部分を中心に埋蔵文化財の調査を実施することが決定した。

まず、初年度である昭和57年度と58年度の２ヶ年で、前橋市教育委員会が国庫補助金を受けて遺跡範囲確認調査を実施した。その結果、濃密な遺構の分布が認められたことと遺跡地が推定上野国府域に所在することの重要性も鑑みて、再度協議を重ね、昭和59年10月15日付で『元総社（西部第三明神）地区土地区画整理事業に伴う元総社明神遺跡の発掘調査に関する覚書』が代表者前橋市長と前橋市教育委員会教育長との間で締結された。調査は区画整理事業の進捗状況に則して、前橋市教育委員会の組織する前橋市埋蔵文化財発掘調査団で実施することになった。

なお、『元総社（西部第三明神）地区土地区画整理事業に伴う元総社明神遺跡の発掘調査に関する覚書』は、昭和63年４月18日付および平成３年１月８日付でその内容を一部変更した。

平成２年度の調査は、委託者から平成２年４月12日付で調査依頼書が提出され、４月26日付で委託契約が締結され事業実施の運びとなった。現地での発掘調査を平成２年５月７日から10月31日まで行い、整理作業を平成２年11月１日から平成３年３月30日まで実施した。

Ⅱ　遺跡の位置と環境

１　遺跡の立地

前橋市は、利根川が赤城・榛名の両火山の裾合谷を経て関東平野を望むところに位置し、地形・地質の特徴から、大きく北東部の赤城火山斜面、南西部の洪積台地（前橋台地）と両者の地溝状をなす沖積低地（広瀬川低地帯）、及び現利根川氾濫源の４地域に分けられる。

元総社明神遺跡の立地する前橋台地は、約24,000年前に浅間火山爆発によって引き起こされた火山泥流堆積物とそれを被覆するローム層（水成）から成り立っている。西は、前橋市の北西端にあたる清里地域で榛名山麗に広がる相馬ヶ原扇状地と移行部を形成し本遺跡まで及んでいる。東は、広瀬川低地帯と直線的な崖で画されている。そして、微地形的には多少の起伏をもってはいるがほとんど平坦台地面といえる。前橋台地面の水系をみると、榛名山水系の諸河川が裾野を東南方向に開析し、台地面を刻んで細長い微高地を作り上げている。総社・元総社付近の染谷川や牛池川は、微高地との比高３ｍ～５ｍを測り、段丘崖上は高燥な台地で、桑園を主とした畑地として利用されてきた。また、この台地上は恰好の居住地であったらしく、古墳時代から奈良・平安時代にかけての多くの遺跡が残されている。

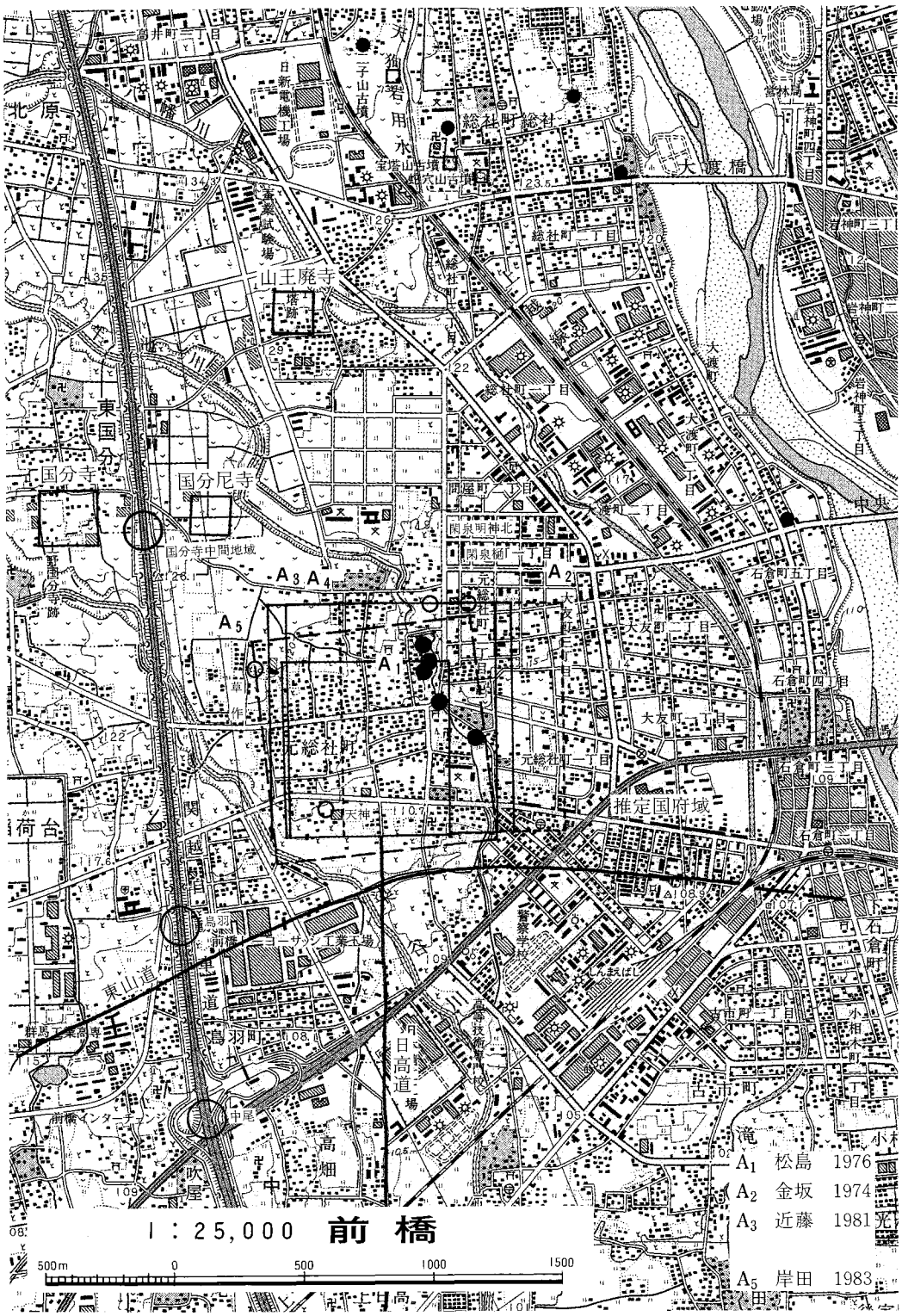


Fig. 2　元総社明神遺跡の調査地点と上野国府学説

元総社明神遺跡は、前橋市元総社町に所在し、群馬県庁より西へ約２㎞、ＪＲ上越線新前橋駅北方約２㎞の地点である。遺跡地は、群馬郡群馬町東牛池沼に発し、元総社町南部字落合で染谷川に合流する牛池川の台地上に占地している。この台地の西側は牛池川に向かってゆるやかに傾斜し、その比高は３ｍ～４ｍを測り、右岸の段丘上には総社神社が鎮座し、地域の産土神にもなっている。一方、本遺跡地は、市街地化が進み、幹線道路を中心にオフィスビルや商店が立ち並び、原状を明らかにすることはできないが、標高112ｍ～115ｍの北西から南東へ向かってわずかずつ傾斜している地形が窺える。

2　歴史的環境

今回の調査の結果、遺跡地は古墳時代から中近世にわたって連綿と生活の舞台となっていたことが判明した。検出された遺構・遺物は、八日市場城に関係する土塁および溝、平安時代の集落、古墳時代の集落を挙げることができる。本遺跡地周辺は推定上野国府域として古代史の注目を浴び、さらに中世には蒼海城が築かれた。それらを含めた状況把握をするためにも、縄文時代から遡って周辺の歴史的環境をみていきたい。

縄文時代では、国分寺中間地域遺跡や産業道路東・西遺跡で検出された前期・中期の集落が筆頭に挙げられ、当地域の縄文文化を考える上で重要な資料といえる。その他に下東西遺跡、清里南部遺跡群、清里・陣場遺跡、中島遺跡、長久保遺跡などが挙げられ、時期的には前期から後期初頭といった範囲でおさえられる。

弥生時代の調査例は少なく、中期後半の環濠集落址である清里・庚申塚遺跡と後期の住居が検出された国分寺中間地域遺跡、桜ヶ丘遺跡、下東西遺跡等に散見するだけである。井野川、染谷川流域に比べ格段の差を生ずるのは、本地域が高燥化した土地であることの地形的要因に帰するのであろう。

古墳時代を彩る一大モニュメントとしての古墳が本遺跡地周辺に姿を現すのは、６世紀前半代である。利根川右岸段丘上に、川原石を用いた積石塚である王山古墳が造られる。その後、本遺跡の北約２㎞には、総社古墳群を構成する古墳が連綿と築かれる。まず、国指定史跡で前方部と後円部に石室を有する総社二子山古墳、巨石使用の横穴式石室をもつ愛宕山古墳、主軸70ｍを測る遠見山古墳、また県内最終末期と考えられ仏教文化の影響を強く受けた宝塔山古墳と蛇穴山古墳などが挙げられる。宝塔山古墳の南西約500ｍに所在する山王廃寺にみる石造物群は、宝塔山古墳石棺や蛇穴山古墳石室と同系統の石造技術を駆使して加工されたと考えられている。共通する技法から時代決定の根拠とされ、白鳳期の建立と考えられる山王廃寺を中心にして、総社・元総社周辺では、仏教文化が古墳文化と併存しながら花開いた様子が窺える。しかし、古墳が数多く存在するにもかかわらず、大きな集落は検出されていない。

奈良・平安時代に至ると、国府、国分二寺等の建設とあいまって、当地域はいよいよ古代上野

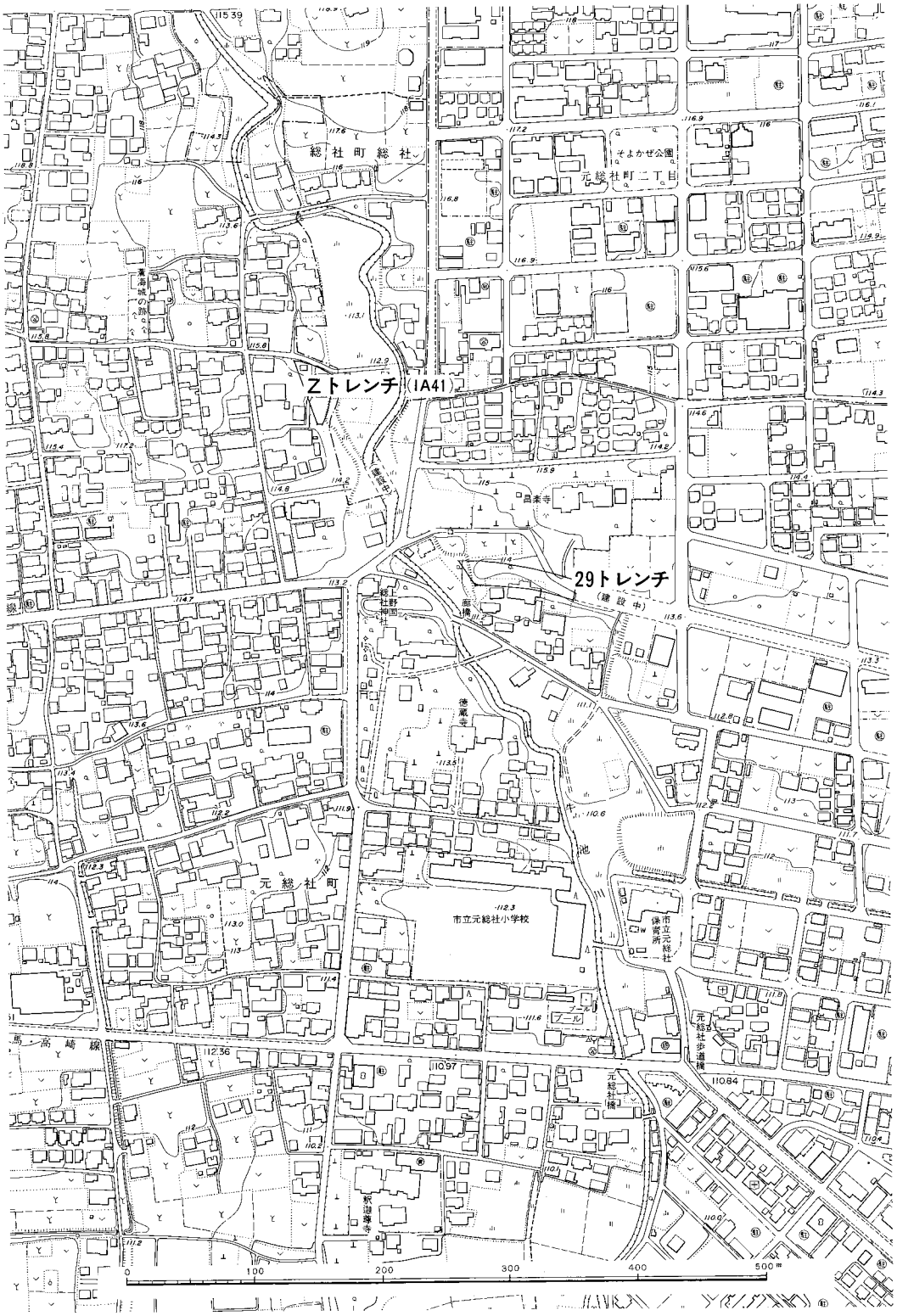


Fig. 3　元総社明神遺跡調査区周辺図

の政治的・文化的中心地としての様相を帯びてくる。国府については9年次にわたる発掘調査と戦前からの研究史がある。また国府周辺遺跡では、閑泉樋遺跡、閑泉樋南遺跡、小見遺跡、草作遺跡、大友屋敷遺跡、寺田遺跡、元総社小学校校庭遺跡、天神遺跡、染谷川遺跡、弥勒山遺跡等がある。

国府の成立年代は定かではないが、大化2年（646）の改新の詔の二に「初脩二京師一、置二畿内国司郡司……」（日本書紀巻25）とあり、新国司制度とともに国府の大部分が新設されたものと考えられていることから、奈良時代以前には国府ができていたものと推定される。また、「倭名類聚鈔」によれば「上野国、国府在群馬郡……」とあり、位置として「群馬久留米国分為東西二群府中間国分」の記述がある。これの文献及び総社神社の「上野国神名帳」研究等により、当地域に国府があると想定され、地名や地割りから想定案が提出されている（Fig. 1・2参照）。

国分寺は、大正15年に国指定史跡となり、昭和40年代になると道路の拡幅や設置のために、部分的ながら発掘調査が進められるようになった。そして、昭和48年度からは史跡地の公有化が始まり、整備計画が策定された。国分僧寺の発掘調査は昭和55年12月から始まり、それ以降毎年発掘調査が進められ、各種遺構の礎石、築地、堀などが確認されている。国分寺周辺では、この数年関越自動車道建設に伴う発掘調査が進められて、道筋にあたる中尾遺跡、鳥羽遺跡、国分寺中間地域遺跡等がある。これらの遺跡からは、奈良・平安時代の住居址が大量に発掘されている。このことからも、奈良時代から平安時代にかけて当地では爆発的に集落の拡大した様子が窺われる。また、多くの遺跡から緑釉陶器、灰釉陶器、白磁、硯、墨書土器等の出土が見られ、鳥場遺跡では神社跡と推定される特殊遺構も検出されている。

中世には蒼海城が築かれ（1429）、秋元氏の城下となったようである。現在の街路の祖形は、蒼海城の堀割りが道路と変化したものである。そして蒼海城の縄張り自体も国府跡を利用しているため、国府解明が一層複雑なものとなっている。

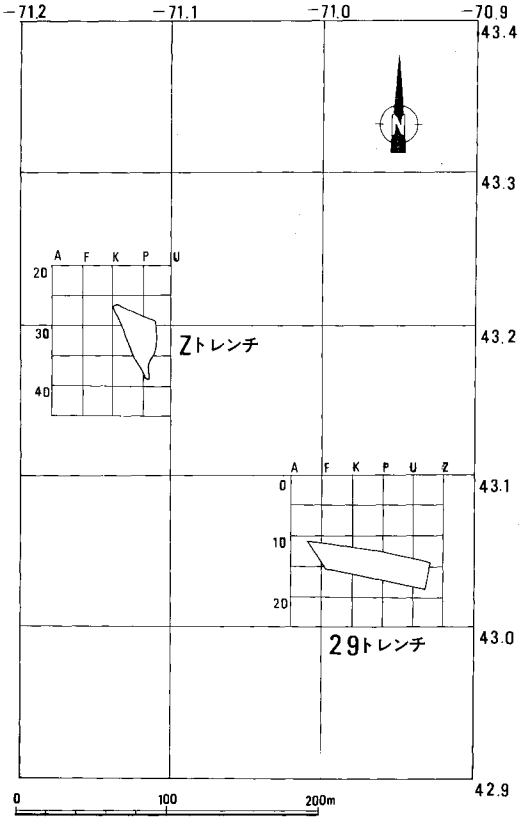


Fig. 4　元総社明神遺跡グリット設定図

Ⅲ　調 査 の 経 過

1　調 査 方 針

昭和57年度から始まった元総社明神遺跡の発掘調査は、今回で９年次を迎えた。調査対象地が道水路部分であるため狭長な調査区が多い。昭和57・58年度に実施したトレンチの呼称に追従して、その後も共通な呼称法が採られ、東西調査区を１・２・３トレンチ…、南北調査区をＡ・Ｂ・Ｃトレンチ…と呼んできている。従って、『トレンチ』とは「調査区」の慣用的な呼び方である。　調査方法は、調査対象地に試掘調査を実施し、その結果から発掘調査に移行する方法をとった。なお、調査には平成２年11月から工事着工という期間的制約があったため、表土剥ぎや多くの面で土木用機械を使用した。グリッドはすべて公共座標にもとづき、座標北を基準に４ｍ単位で設定した。グリットは西から東へＡ・Ｂ・Ｃ…、北から南へ１・２・３…と番付し、グリッドの呼称は北西杭の名称とし、Ａ－１グリッド（例）と呼んだ。平面座標・水準の移動は区画整理に伴う近接した基点を利用し、委託測量によった。

グリット設定後、プラン確認を行い調査工程を検討し調査を進める。発掘調査にあたっては、遺構は基本的に「使用面」と「掘り方面」に分けた工程で実施した。図面作成は平板・簡易遣り方測量を用い、原則的に１/40の縮尺で、必要に応じて１/10・１/20の縮尺で作成した。遺構の遺物については平面分布図を作成し、台帳に各種記録を採りながら収納した。包含層の遺物は、グリッド単位で層位毎に収納した。ただし、重要と判断した遺物は、分布図・遺物台帳の記載を行い収納した。

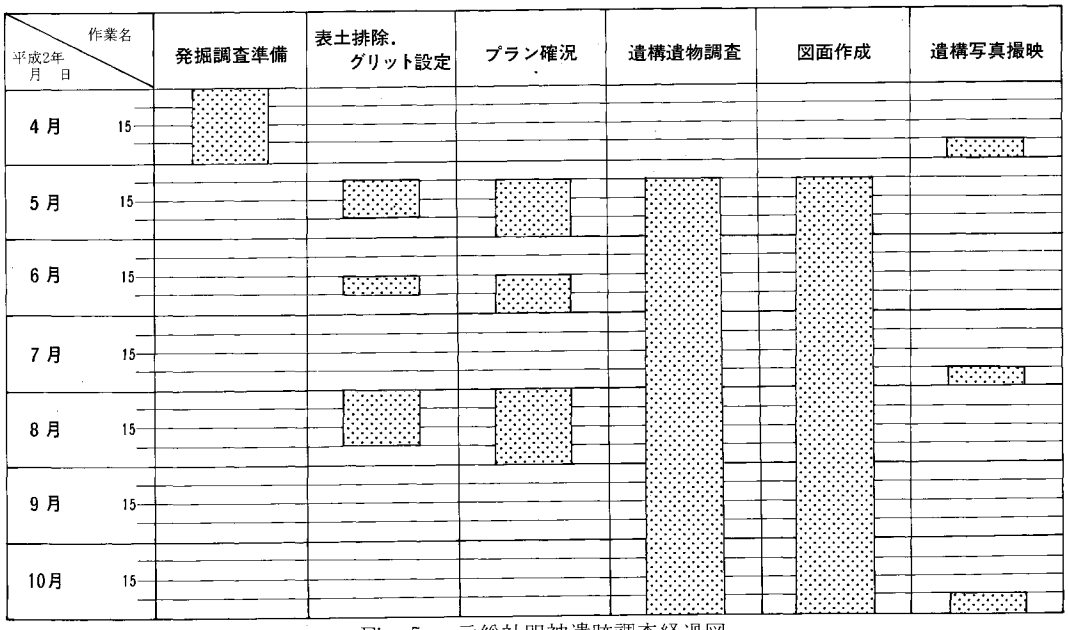


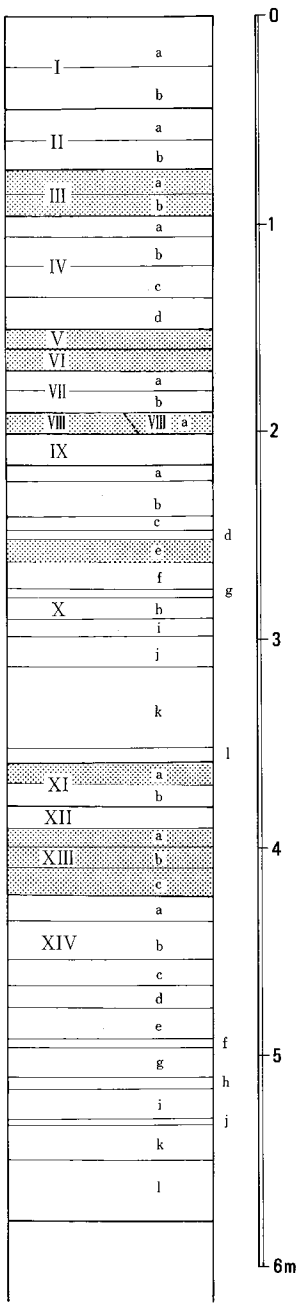
Fig. 5　元総社明神遺跡調査経過図

2 調 査 経 過

第９年次に当たる今年度の発掘調査は、平成２年５月７日から10月31日までの約６ヶ月にわたり実施された。当初調査区２ヶ所、調査面積1,393㎡であったが、区画整理の進捗により最終的には調査区１ヶ所、調査面積1,220㎡となった。ただ、住居移転等の関係から一度に調査することができず、用地が空いた場所から逐次実施していった。そこで、29トレンチ西側農地部分を１区、中央竹林および家屋部分を２区、東側谷地部分を３区と呼ぶことにした。また、事務所は例年通り総社神社東にある調査事務所を使用した。

まず、４月中旬に打ち合わせを済ませ、各種事務手続きを終了し、５月２日より事務所に器材を搬入し、点検を行った。委託契約締結日である５月８日より29トレンチ１区の試掘調査および表土掘削を開始した。直ちに、平面座標と水準の移動を行い、グリット設定をした。５月14日より重機により１区と３区の表土掘削と部分的な深掘りを始めた。深掘りにより、平安～古墳時代の遺構面の存在が確定的となった。また、その後平安～古墳時代の住居址がレベル差をあまりもたず混在していることも確認された。そこで、発掘調査方法を検討した。頻繁な住居変遷による住居の重複、耕作による攪乱も相俟って地山と覆土との差が明確でない点等を念頭におくことにした。また、指標テフラも部分的にしか残っていなかった。そのため、地質学の面からも指導して戴くことにした。そして、６月から７月にかけて２面～４面までの調査を行う。総社砂層を切り込んだ住居址、掘立遺構、溝、土坑等を調査し、１・３区の全体図作成作業をし完了する。

７月中旬より２区の竹林伐採、住宅解体が始まる。８月２日より現況を測量し、全体写真を撮影した。８月７日から重機掘削に入る。しかし、２区の南側はすでに削平されており、遺構の検出は北側のみであった。29トレンチ北側の昌楽寺は八日市場城跡とされており、その堀および土塁と推定される遺構、そして平安～古墳時代の遺構面を確認した。１・３区と同様に住居址の重複、竹根による攪乱も相俟って、地山と覆土との差が明確でなかった。竹林および樹木の根によって遺構を壊さないため、根部分の掘り上げ作業は調査団で行った。さらに、７～８月の猛暑により、土は乾き固く締まり移植ゴテをうけつけないため、牛池川よりポンプで水を汲み上げてはかけ、作業終了後にはシートをかけた。そのため、作業の進捗はかなり遅れた。しかし、総社砂層を切り込んだ遺構、戦時中の防空壕を仕上げ、写真撮影後10月31日に全体図作成作業を最後に終了した。11月初旬に調査地の引き渡しを行った。なお、整理作業は11月１日より調査事務所で始め、器材の撤収および遺物の運搬を並行して済ませた。12月より文化財保護課の整理棟に移り、３月末日には作業を完成させる運びとなった。



Ⅰ 層：a…最近の表・耕作土　b…古い表・耕作土

Ⅱ 層：a…黒褐色粗砂層　b…黒褐色細砂層

Ⅲ 層：Ａｓ－Ｂ　１１０８年

a…火山灰純層　b…軽石純層。

Ⅳ 層：平安時代遺構構築面・遺物包含層　a…褐色微砂層

b…褐色細砂層　c…鈍い黄褐色微砂層　d…黒褐色細砂層

Ⅴ 層：Ｈｒ－ＦＰＦ１　鈍い黄褐色粗砂層

Ⅵ 層：Ｈｒ－ＦＡ純層　６世紀初頭　暗灰黄色シルト・砂層

Ⅶ 層：古墳時代遺構構築面・遺物包含層

a…黒褐色細砂層　b…褐色細砂層

Ⅷ 層：Ａｓ－Ｃ純層　４世紀中葉

a層…Ａｓ－Ｃ混土層　黒色微砂層

Ⅸ 層：弥生～縄文時代包含層　黒褐色微砂層

Ⅹ 層：総社砂層　縄文時代に形成　a…鈍い黄橙色シルト層

b…鈍い黄橙色シルト層　c…鈍い黄色粗砂層　d…暗褐色粘土層

e…黒褐色シルト層　セカンダリーのＡｓ－ＹＰを含む

f…鈍い黄色細砂層　g…灰黄色細砂層　h…鈍い黄色粗砂層

i…灰黄色シルト層　j…鈍い黄橙色シルト層　k…暗灰黄色砂層

l…灰黄褐色シルト層

Ⅺ 層：Ａｓ－ｓｊ層　約１１，０００年前

a…暗灰色軽石層　b…黒色粘土層

Ⅻ 層：水性堆積上部ローム層　浅黄色軽石層

ⅩⅢ 層：Ａｓ－ＹＰ純層　約１３，０００～１４，０００年前

a…鈍い黄橙色軽石層　b…浅黄色粘土層　c…淡黄色軽石層

ⅩⅣ 層：水性堆積上部ローム層　a…鈍い黄橙色シルト層

b…灰黄色砂・シルト層　c…浅黄色シルト層　d…黄灰色シルト層　e…黄褐色砂層　f…黄灰色シルト層　g…黄褐色細砂層

h…黄灰色シルト層　i…黄褐色細砂層　j…黄灰色シルト層

k…黄褐色粗砂層　l…鈍い黄色粗砂層

Fig. 6　元総社明神遺跡標準土層図

V　調査区の遺構と遺物

1　29トレンチ

（1）概　　観

本トレンチの規模は、南北幅約8～25m、東西の長さが約90mで、調査面積は約1,220㎡である。牛池川を挟んで上野国総社神社の東側に位置する。現況において、調査区の南半分が耕作や住宅建造等による削平を受けており、北側に八日市場城（17世紀初頭）の溝と推定される地形が確認された。調査にあたっては4mのグリッドを設定して進めた。北西隅を基点（国家座標Ⅸ系X＝＋43,136、Y＝－71,008）に南北方向を算用数字で、東西方向をアルファベットで設定し、「M－12グリッド」と言うように位置は北西隅の座標で呼称した。調査区の標高は、112.40～113.60mである。本調査で確認された遺構は、住居址45軒、掘立柱建物址3棟、土坑125基、溝址4条、井戸址3基、防空壕1基であった。住居址は、いずれも狭い場所の中に複雑に重なり合っており全体像をつかむのは困難であったが、出土した遺物と住居形態から判断して、古墳時代後期のものが9軒で、あとはすべて奈良・平安時代のものである。特に奈良・平安時代の住居址は短期間に作りかえが行われたと思われる。遺物総数は完形品、破片とりまぜて7,430点である。

（2）各遺構と遺物

住　居　址

H－1号住居址

位　置　E－11、E－12、E－13、F－11、F－12　　標　高　113.76m

挿　図　Fig. 9、32　　写　真　PL. 2、12　　面　積　19.2㎡　　方　位　W－32°－E

形　状　長辺4.60m、短辺4.20mのほぼ正方形を呈する。確認面からの深さは19cmを測る。

床　面　床面は平坦で、部分的に堅い面が確認された。

竈　址　西壁中央よりやや南に偏った位置で壁面より外側にある。幅98cm、奥行き86cmである。

柱　穴　住居址のほぼ対角線上に規則的に並ぶ4個の柱穴が検出された。P_1径48×深さ71cm、$P_2$38×72cm、$P_3$48×68cm、$P_4$41×67cm。

重　複　H－4と重複するが、本住居址の方が先行する。

遺　物　総数248点で全域から散在して出土した。図示したものは、土師器坏（H-1・1）と、竈内より出土した土師器甕（H-1・2）の2点である。また、覆土中より樽式土器の小破片3点が出土している。

H－2号住居址

位　置　F－12、F－13、G－12、G－13　　標　高　113.82m

挿　図　Fig. 9　　写　真　PL. 2　　面　積　14.7㎡　　方　位　N－75°－E

形　状　長辺4.50m、短辺3.35mの長方形を呈する。確認面からの深さは21cmを測る。

床　面　竈周辺に2～3cmの貼り床が施され床面はほぼ平坦であった。

竈　址　東壁のほぼ中央に位置し、壁面より外側にある。幅67cm・奥行き60cmである。構築材には砂質凝灰岩数点が用いられていた。

備　考　柱穴、周溝等は検出されなかった。また、攪乱により遺構中央部を切られている。

重　複　H－5・6・10と重複するが、本住居址が最も新しい。

遺　物　総数はわずか18点で、復元・実測には至らなかった。また、炭化果核1点が出土している。

H－3号住居址

位　置　G－11、G－12、H－11、H－12　　標　高　113.91m

挿　図　Fig. 10、40　　写　真　PL. 2　　面　積　11.4㎡　　方　位　N－89°－E

形　状　長辺3.95m、短辺3.30mの長方形を呈する。確認面からの深さはわずか8cmである。

床　面　全体的に貼り床が施され良く踏み固められており、特に竈周辺には4～5cmの締まった貼り床が検出された。

竈　址　東壁の北寄りに位置し、壁面より外側にある。幅68cm・奥行き102cmである。

備　考　柱穴、周溝等は検出されなかった。

重　複　H－7と重複するが、本住居址の方が新しい。

遺　物　総数は77点で、土師器の小破片がほとんどであった。床直から出土した砥石(H-3・1)を図示した。

H－4号住居址

位　置　F－11、F－12、G－12　　標　高　113.81m

挿　図　Fig. 10　　写　真　PL. 2　　面　積　10.1㎡　　方　位　N－88°－E

形　状　長辺3.50m、短辺2.80mの横長方形を呈する。確認面からの深さは21cmを測る。

床　面　ほぼ全面に貼り床が施され、特に竈周辺は良く踏み固められている。

竈　址　東壁の南隅に位置し、壁面より外側にある。両袖石と支柱には砂質凝灰岩の切石が用いられていた。幅68cm・奥行き102cmである。

備　考　柱穴、周溝等は検出されなかった。

重　複　H－1・7と重複しており、H－1より新しく、H－7より古い。

遺　物　総数は98点を数えるが、殆どが小破片で図上復元できるものはなかった。

H－5号住居址

位　置　F－12、F－13、G－13　　標　高　113.78m

挿　図　Fig.11　　写　真　PL.2　　面　積　6.5㎡　　方　位　W－11°－S

形　状　長辺2.65m、短辺2.50mのほぼ正方形を呈する。確認面からの深さは6㎝を測る。

床　面　特に堅い面が検出されず、不明瞭である。

竈　址　西壁の北寄りに位置し、壁面より外側にある。右の袖石は残存しており拳大の砂質凝灰岩の切石が用いられていた。幅62㎝・奥行き74㎝である。

備　考　柱穴、周溝等は検出されなかった。また、H－2と同様に遺構中央部が攪乱を受けている。

重　複　H－2・6・10と重複しており、H－6・10より新しく、本住居址を吸収する形でH－2が構築されている。

遺　物　殆どが土師器の小破片で接合・復元には至らなかった。

H－6号住居址

位　置　E－13、F－13　　標　高　113.76m

挿　図　Fig.11、40　　写　真　PL.2　　面　積　13.3㎡　　方　位　N－77°－E

形　状　長辺3.70m、短辺3.50mの長方形を呈する。確認面からの深さは21㎝を測る。また、遺構東側をH－2により切られている。

床　面　部分的に堅い面はみられるが不明瞭である。

備　考　竈は東壁に位置すると推定されるが、H－2号住居址の構築により破壊され検出できなかった。また、柱穴、周溝等も検出されなかった。

重　複　H－2・5・10と重複しており、H－2・5より古く、H－10より新しい。

遺　物　総数で61点出土している。図示したものに覆土中より出土した滑石製臼玉（H-6･1）、土製臼玉（H-6･2）がある。

H－7号住居址

位　置　F－11、G－11、12　　標　高　113.90m

挿　図　Fig.12　　面　積　不明　　方　位　E－35°－S

形　状　住居の東壁部分をH－3、北壁隅をW－4に切られ全体の形状は確認できなかった。

床　面　部分的に堅い貼り面がみられる。

備　考　竈址、柱穴、周溝等も検出されなかった。

重　複　H－3・4、W－4と重複しており、H－4より新しく、H－3、W－4より古いと思われる。

遺　物　出土した遺物はわずかで接合・復元には至らなかった。

H－8号住居址

位　置　E－11、F－11　　標　高　113.66m

挿　図　Fig.12、32　　写　真　PL.2、13　　調査面積（2.4）㎡　　方　位　E－25°－S

形　状　住居の北半分が、W－4に切られているため全体の形状は確認できなかったが、調査により検出された状態から横長方形と推定できる。確認面からの深さは18cmを測る。

床　面　全体的に平坦で特に竈周辺は3～4cmの堅い貼り面がみられ良く踏み固められている。

竈　址　東壁の南隅に位置し、主体部を壁外に持つものである。幅84cm・奥行き110cmを測る。砂質凝灰岩の両袖石と支柱石が検出された。

備　考　柱穴、周溝等は検出されなかった。

遺　物　総数は31点で図示できたものは、竈の炊口部から出土した羽釜（H-8・1）と、灰釉高台椀の2点がある。

H－9号住居址

位　置　G－12、G－13、H－12　　標　高　113.79m

挿　図　Fig.12、32　　写　真　PL.12　　調査面積（11.6）㎡　　方　位　E－77°－S

形　状　住居の南隅はW－2で切られ、北隅がH－3に切られているため全体の形状は確認できなかったが、西壁は3.80mを測り、ほぼ横長方形と思われる。確認面からの深さは14cmを測る。

床　面　堅い面もみられるが比較的柔らかく、不明瞭であった。

重　複　H－3、W－2と重複しているが、本住居址の方が先行する。

備　考　柱穴、周溝等は検出されなかった。東部分は削平を受けている。

遺　物　総数292点でほぼ全域から散在して出土した。図示できたものは、土師甕（H-9・1、2）がある。

H－10号住居址

位　置　F－13、F－14、E－14　　標　高　113.70m

挿　図　Fig.12　　調査面積（9.5）㎡　　方　位　W－19°－S

形　状　中央より北半分がH－6によって切られているため全体の形状は確認できなかったが、南壁は3.02mを測り、横長方形と推定される。

床　面　全体的にやわらかく、一部削平を受けており不明瞭であった。

竈　址　西壁のほぼ中央に位置し、壁面より外側にある。幅62cm・奥行き48cmである。左袖石に砂質凝灰岩の切石が用いられていた。

備　考　柱穴、周溝等は検出できなかった。また、耕作による削平や攪乱が著しく、本遺構より南側には、B－2を除き主だった遺構は検出できなかった。

重　複　H－2・5・6と重複するが、本住居址が最も古い。

遺　物　小破片のため図示できるものはなかった。

H－11号住居址

位　置　H－11、H－12　　標　高　113.95m

挿　図　Fig.13　　調査面積　(6.6)㎡　　方　位　N－68°－E

形　状　西壁の大部分は削平されており、また東壁に位置したと思われる竈もW－1により破壊されているが、長辺3.95m、短辺2.15mの横長方形である。

床　面　平坦であるが、やわらかく不明瞭である。

竈　址　焼土と灰が集中して検出されたことから、東壁の北に偏在していたと思われるが、規模は不明である。

備　考　柱穴、周溝等は検出できなかった。

重　複　本住居址を吸収するかたちでH－12が重複している。またW－1により切られている。

遺　物　数点の検出で、小破片のため復元・実測には至らなかった。

H－12号住居址

位　置　H－11、H－12　　標　高　113.67m

挿　図　Fig.13、32　　写　真　PL.3、12　　調査面積　(9.6)㎡　　方　位　N－15°－W

形　状　H－11と同様に、西壁、南壁の大部分が削平されており、東壁もW－1によって切られているため全体の形状は確認できなかったが、南北は4.50mを測る。確認面からの深さは31cmである。

床　面　平坦で、部分的に堅い面がみられる。

備　考　竈、柱穴、周溝等は検出できなかった。

重　複　H－11、W－1と重複しており、本住居址が先行する。

遺　物　総数は53点で、図示した土師器坏（H-12、1・2・3）は床直において3枚が重なり合った状態で出土した。

H－13号住居址

位　置　L－10、L－11、M－10、M－11　　標　高　113.84m

挿　図　Fig.13　　面　積　9.1㎡　　方　位　E－38°－S

形　状　長辺3.50m、短辺2.81mの長方形を呈する。確認面からの深さは26cmである。

床　面　ほぼ全面に貼り床が施され、全体的に良く踏み固められている。

竈　址　東壁のほぼ中央に位置し、壁面より外側にある。幅76cm・奥行き78cmである。左袖石が残存しており、構築材には砂質凝灰岩の切石が用いられていた。

備　考　柱穴、周溝等は検出されなかった。

重　複　H－20・21・24・30と重複するが、住居址の中では本遺構が最も新しく、その後W－4により北西隅が切られている。

遺　物　総数は24点で、緑釉陶器の破片が出土している。

H－14号住居址

位　置　L－11、L－12、M－11　　標　高　114.20m

挿　図　Fig.14　　写　真　PL.3　　面　積　10.1㎡　　方　位　E－17°－S

形　状　長辺3.45m、短辺2.90mの横長方形を呈する。確認面からの深さは31cmを測る。

床　面　床面はほぼ平坦で住居中央部には2～3cmの貼り床が施されてあった。

備　考　竈址、柱穴は検出されなかった。また西壁、南壁は削平されており確認できなかった。

重　複　H－21・30と重複するが、本住居址が最も新しい。

遺　物　総数95点の遺物が出土しているが、小破片が殆どで接合・実測には至らなかった。

H－15号住居址

位　置　O－11、O－12、P－11、P－12　　標　高　113.52m

挿　図　Fig.14、33　　写　真　PL.3、12　　面　積　25.2㎡　　方　位　E－22°－S

形　状　長辺5.50m、短辺4.50mの長方形を呈する。確認面からの深さは18cmを測る。

床　面　全体的に貼り床が施され良く踏み固められており床面はほぼ平坦であった。

竈　址　東壁のほぼ中央に位置し、壁面より外側にある。幅118cm・奥行き108cmである。壁は削平を受けており確認できなかったが、焼土が多量に検出した。

柱　穴　4個の柱穴が検出された。P_1径32×深さ48cm、$P_2$38×49cm、$P_3$32×51cm、$P_4$22×53cmである。

重　複　H－31、W－2・4、S－1と重複するが、本住居址の方が先行する。

遺　物　出土遺物はわずかであったが、土師器坏（H-15・1）1点を図示した。

H－16号住居址

位　置　K－11、L－11　　標　高　113.90m

挿　図　Fig.14、33　　写　真　PL.3　　面　積　8.2㎡　　方　位　W－13°－S

形　状　長辺2.85m、短辺2.80mの長方形を呈する。確認面からの深さは12cmを測る。

床　面　平坦であるが、やわらかく不明瞭である。

竈　址　西壁の北寄りに位置し、壁面より外側にある。幅106cm・奥行き121cmである。

備　考　柱穴、周溝等は検出されなかった。また遺構中央部を木の根による攪乱を受けている。

重　複　H－14・27と重複しており、本住居址の構築はその中間に位置する。

遺　物　出土遺物は少数であるが床直より出土した完形品のカワラケ（H-16・1）１点を図示した。

Ｈ－17号住居址

位　置　Ｊ－13、Ｋ－13　　標　高　113.67ｍ

挿　図　Ｆｉｇ.15、33　　面　積　10.4㎡　　方　位　Ｎ－76°－Ｅ

形　状　長辺3.40ｍ、短辺（2.55ｍ）の長方形を呈する。確認面からの深さは削平を受けており６㎝しか検出されなかった。

床　面　全体的に平坦で部分的に堅い面ががみられる。

備　考　柱穴、周溝等は検出されなかった。また、竈は東壁に位置したと推定されるがＷ－２によって破壊されているため確認できなかった。

重　複　北壁の大部分をＷ－２により破壊されている。

遺　物　小破片の出土はみられたが、図示できたものは、土師甕（H-17・1）の１点だけである。

Ｈ－18号住居址

位　置　Ｍ－11、Ｎ－11、Ｎ－12　　標　高　114.20ｍ

挿　図　Ｆｉｇ.15　　面　積　8.3㎡　　方　位　Ｅ－11°－Ｓ

形　状　長辺3.04ｍ、短辺2.95ｍのほぼ正方形を呈する。確認面からの深さは９～31㎝を測る。

床　面　全体的にほぼ平坦で、良く踏み固められている。

備　考　遺構中央部に炉址のような火を使用したと思われる円形の痕跡（焼土範囲）64㎝×62㎝が認められた。柱穴、周溝等は検出されなかった。また、壁は大部分が削平を受けていた。

重　複　Ｈ－24・30と重複するが、本住居址が最も新しい。

遺　物　出土遺物はわずかで、接合・実測には至らなかった。

Ｈ－19号住居址

位　置　Ｉ－11、Ｊ－11　　標　高　113.80ｍ

挿　図　Ｆｉｇ.15、33　　写　真　ＰＬ.３　　調査面積　(6.9)㎡　　方　位　Ｅ－５°－Ｓ

形　状　重複により一部分を検出しただけで、全体の形状は確認できなかった。

床　面　住居中央部の貼り床は、ほぼ平坦で良く踏み固められている。

備　考　本住居址のほとんどが他遺構の構築の際に破壊されているため、残存していた床の範囲を検出するにとどまった。

重　複　Ｈ－22・23・25・26と複雑に重複しており本住居址はＨ－23・25より先行し、Ｈ－22・26より新しいと思われる。

遺　物　出土遺物はわずかであったが、土師質高台椀１点（H-19・1）を図示した。

H－20号住居址

位　置　L－11　　標　高　113.75m

挿　図　Fig.16　　写　真　PL.3　　面　積　不明　　方　位　E－55°－S

形　状　W－4により住居址の大部分が破壊されており全体の形状は確認できず、竈址のみの検出のとどまった。

竈　址　竈址は東壁の南に偏在したものと推定される。幅52㎝・奥行き132㎝である。竈壁には砂質凝灰岩の切石が用いられ、焼けた粘土が充填されていた。

備　考　住居址本体は竈址の北西側に広がり、W－4の中に存在したものと推定される。

重　複　H－13・21と重複するが、本住居址が先行すると思われる。

遺　物　小破片のため、図上復元できるものはなかった。

H－21号住居址

位　置　L－11、L－12、M－11、M－12　　標　高　113.80m

挿　図　Fig.16、40　　写　真　PL.4　　面　積　11.4㎡　　方　位　E－19°－S

形　状　長辺3.45m、短辺3.35mのほぼ正方形を呈する。確認面からの深さは28㎝を測る。

床　面　全面にわたって、非常に堅く良く締まった貼り床が施され、床面はほぼ平坦であった。

竈　址　東壁の南に偏在し、壁面より外側にある。両側に「地山掘り残しの棚」をもっている。幅64㎝・奥行き86㎝である。構築材には粗粒安山岩の河原石を1点用いている。

備　考　柱穴、周溝は検出されなかった。

重　複　H－13・14・20・30と重複するが、H－13・14より先行し、H－20・30より新しい。

遺　物　総数31点で、覆土中より出土した土錘（H-21･1）と滑石製臼玉（H-21･2）を図示した。

H－22号住居址

位　置　I－11、J－11　　標　高　113.69m　　挿　図　Fig.16、33

写　真　PL.4、12、14　　調査面積　(9.7)㎡　　方　位　E－3°－S

形　状　重複が激しく、また北壁をW－4に破壊されているため全体の形状は確認できなかった。

床　面　床面はほぼ平坦で部分的に堅い面がみられた。

備　考　竈址、柱穴、周溝等は検出されなかった。

重　複　H－19・23・25・26、W－1と重複するが、本住居址が最も古い。

遺　物　総数は17点と少数であるが、床直より出土した完形品の土師坏（H-22･1、2、3）3点と土師坏（H-22･4）、土師甑（H-22･5）を図示した。

H－23号住居址

位　置　I－11、I－12、J－11、J－12　　標　高　113.9.4m

挿　図　Fig.16　　調査面積　(8.1)㎡　　方　位　N－86°－E

形　状　長辺3.58m、短辺3.53mの正方形を呈する。確認面からの深さは14cmを測る。

床　面　ほぼ平坦であるが、やわらかく不明瞭であった。

備　考　竈、柱穴、周溝等は検出されなかった。また、北壁、西壁の一部は削平により検出できなかった。

重　複　H－19・22・25・26と多くの住居と重複するが、本住居址が最も新しい。

遺　物　出土遺物は小破片が殆どで、接合・実測には至らなかった。

H－24号住居址

位　置　M－11、N－11　　標　高　113.58m

挿　図　Fig.17、33　　写　真　PL.13　　面　積　12.9㎡　　方　位　E－43°－S

形　状　長辺3.98m、短辺3.50mのほぼ正方形を呈する。西壁の大部分をH－13により切られている。確認面からの深さは16cmを測る。

床　面　竈周辺を中心に良く踏み固められており、床面はほぼ平坦であった。

竈　址　東壁のほぼ中央に位置し、壁面より外側にある。幅106cm・奥行き104cmである。なお、H－18によって切られているため、残りはわずかである。

備　考　柱穴、周溝等は検出されなかった。

重　複　H－13・18・30と重複するが、H－13・18より先行し、H－30より新しい。

遺　物　総数24点で、図示できたのは土師質高台椀（H-24･1）の1点である。

H－25号住居址

位　置　I－11、I－12、J－11、J－12　　標　高　113.84m

挿　図　Fig.17　　面　積　10.1㎡　　方　位　N－88°－E

形　状　重複により、西壁を除きほとんどの壁が破壊されているが、床の残存状態から長辺3.42m、短辺3.03mのほぼ正方形を呈する。確認面からの深さは12cmを測る。

床　面　床面はほぼ平坦で、堅い面が広がっている。

備　考　竈址、柱穴等は検出されなかった。

重　複　H－19・22・23・26と多数の住居址と重複するが、H－23より先行し、H－19・22・26より新しい。

遺　物　わずかな小破片のみで、接合・実測には至らなかった。

H－26号住居址

位　置　I－11、I－12、J－11、J－12　　標　高　113.73m

挿　図　Fig.17、33　　写　真　PL.4、13　　面　積　15.1㎡　　方　位　E－9°－S

形　状　長辺4.10m、短辺3.80mのほぼ正方形を呈する。確認面からの深さは6㎝を測る。北壁は攪乱と重複により検出できなかった。

床　面　床面はほぼ平坦で、全体的にやわらかく不明瞭である。

竈　址　東壁の南隅に偏在する。幅54㎝・奥行き98㎝である。

備　考　柱穴、周溝等は検出されなかった。

重　複　H－19・22・23・25・29と複雑に住居が重なり合っている。本住居址は、H－19・23・25より先行し、H－22・29より新しい。

遺　物　総数25点で、図示したものは床直から出土した土師質坏（H-26・1）と、土師質坏（H-26・23）の3点である。

H－27号住居址

位　置　J－11、J－12、K－11、K－12　　標　高　113.63m　　挿　図　Fig.18、33、40

写　真　PL.4、14、16　　面　積　15.6㎡　　方　位　N－70°－E

形　状　長辺4.40m、短辺3.65mの横長方形を呈する。確認面からの深さは28㎝を測る。

床　面　床面はほぼ平坦で、2～3㎝の厚さで非常に堅くよく締まった貼り床が施されていた。

竈　址　東壁のほぼ中央に位置する。幅78㎝・奥行き112㎝である。支柱は砂質凝灰岩で作られており、両袖石にも砂質凝灰石の切石が用いられていた。

柱　穴　住居の対角線上に規則的に配された4個の柱穴と、東壁の南隅に貯蔵穴と思われる穴を1個検出した。P_1幅26×深さ24㎝、$P_2$26×23㎝、$P_3$27×25㎝、$P_4$30×25㎝、$P_5$44×21㎝である。

備　考　周溝は検出されなかった。

重　複　H－16・29と重複している。本住居址は、H－16より先行し、H－29より新しい。

遺　物　総数は149点を数える。図示したものは土師壺（H-27・1）、高坏（H-27・2）、滑石製臼玉（H-27・3）の3点である。

H－28号住居址

位　置　K－13、L－13　　標　高　113.48m　　挿　図　Fig.18、34

写　真　PL.5、13、14　　調査面積　(5.2)㎡　　方　位　N－84°－E

形　状　北壁はW－2により破壊されているため全体の形状は確認できなかったが、東西方向は2.66mを測る。確認面からの深さは11㎝である。

床　面　竈周辺は良く踏み固められており床面はほぼ平坦であった。

竈　址　東壁の中央より南に偏在すると思われる。幅49㎝・奥行き62㎝である。構築材には砂質凝灰岩の切石が用いられていた。

備　考　柱穴、周溝等は検出されなかった。

遺　物　図示したものは土師坏（H-28・1）、須恵蓋（H-28・2）、須恵坏の身（H-28・3）、土師坏（H-28・4、6）、土師椀（H-28・5）の６点である。

Ｈ－29号住居址

位　置　Ｊ－12、Ｋ－11、Ｋ－12　　標　高　113.37ｍ

挿　図　Fig.18　　写　真　ＰＬ.５　　調査面積　(5.9)㎡　　方　位　Ｗ－50°－Ｓ

形　状　南側半分をＷ－２によって切られているため、本住居は北壁の西隅から東壁の南隅を結んだ三角形の状態で検出された。確認面からの深さは31㎝である。

床　面　地山を掘り込みそのまま地床面にしている。床面は平坦である。

備　考　竈址、柱穴、周溝等は検出されなかった。

重　複　Ｈ－26・27と重複しているが、本住居址が最も古い。

遺　物　総数で50点出土しているが、小破片で図示できるものはなかった。

Ｈ－30号住居址

位　置　Ｌ－11、Ｌ－12、Ｍ－11、Ｍ－12、Ｎ－11、Ｎ－12　　標　高　113.62ｍ

挿　図　Fig.19、34　　写　真　ＰＬ.５、15　　面　積　24.1㎡　　方　位　Ｗ－24°－Ｓ

形　状　長辺5.00ｍ、短辺4.72ｍのほぼ正方形を呈する。確認面からの深さは14㎝を測る。

床　面　全体的に良く踏み固められており、床面はほぼ平坦であった。

竈　址　西壁のほぼ中央に位置し、壁面より外側にある。幅92㎝・奥行き158㎝である。削平を受けているが、焼土が多量に検出された。構築材には砂質凝灰岩が用いられている。

貯蔵穴　３個の貯蔵穴が検出された。P_1は住居西壁に位置し楕円形を呈しており、径44×深さ39㎝、南東隅には円形のP_2径52×深さ41㎝、P_3は北壁に位置し円形で径56×深さ42㎝、である。

備　考　柱穴、周溝等は検出されなかった。

重　複　Ｈ－13・14・21、Ｗ－４と重複するが、本住居址が最も古い。

遺　物　総数は25点である。図示できたものは土師甕（H-30・1）がある。

Ｈ－31号住居址

位　置　Ｏ－11、Ｏ－12、Ｐ－11、Ｐ－12　　標　高　113.84ｍ

挿　図　Fig.19、34　　写　真　ＰＬ.５、12　　面　積　19.2㎡　　方　位　Ｗ－９°－Ｓ

形　状　南壁がＷ－２により切られているが東西は4.20ｍを測り、南北は推定で（4.55ｍ）のほぼ正方形を呈すると思われる。確認面からの深さは15㎝を測る。

床　面　竈周辺に２～３㎝の貼り床が施され、床面はほぼ平坦であった。

竈　址　西壁のほぼ中央に位置し、壁面より外側にある。幅38㎝・奥行き108㎝である。両袖と

支柱には砂質凝灰岩の切石が構築材として使用されていた。

貯蔵穴　住居西壁、竈右側に長径51cm×短径48cmのほぼ円形を呈し、深さ18cmであった。

備　考　柱穴、周溝等は検出されなかった。

重　複　H－15、W－2と重複するが、本住居址の方が先行する。

遺　物　総数は59点で、カワラケ（H-31・1）1点を図示した。

H－32号住居址

位　置　Q－13、Q－14　　標　高　113.45m　　挿　図　Fig.20、34

写　真　PL.5、15　　調査面積　(5.1)㎡　　方　位　E－4°－S

形　状　住居の大半を占める西側が削平されているため、竈址周辺しか検出できず全体の形状は確認できなかった。

床　面　検出できた面は貼り床が施され、ほぼ平坦であった。

竈　址　東壁のほぼ中央に位置し、壁面より外側にある。幅96cm・奥行き88cmである。

備　考　柱穴、周溝等は検出されなかった。

遺　物　竈周辺の床直においてまとまって出土した、土師坏（H-32・1、2、3、4、5、6、7）7点を図示した。

H－33号住居址

位　置　M－14、M－15　　標　高　112.37m

挿　図　Fig.20、34　　写　真　PL.5、14　　面　積　9.2㎡　　方　位　E－5°－S

形　状　長辺2.75m、短辺2.10mの長方形を呈する。確認面からの深さは38cmを測る。

床　面　地山（総社砂層）を掘り込んで地床面にしている。平坦で堅く締まっている。

柱　穴　9個の柱穴が検出された。西壁に4個、東壁に3個（I－2に切られていなければ西壁の柱穴と対称に4個と推定される）、北壁1個、南壁1個が規則的に配されている。P_1径10×深さ14cm、$P_2$11×14cm、$P_3$18×16cm、$P_4$14×14cm、$P_5$40×22cm、$P_6$14×18cm、$P_7$14×14cm、$P_8$14×18cm、$P_9$26×20cm。

備　考　竈や炉址、周溝等は検出されなかった。

重　複　I－2と重複するが、本住居址が先行する。

遺　物　総数はわずかで、図示できたのは土師質高台椀（H-33・1）1点だけである。

H－34号住居址

位　置　T－16、T－17　　標　高　113.37m

挿　図　Fig.20、35、39　　写　真　PL.6、14　　面　積　12.1㎡　　方　位　E－6°－S

形　状　長辺3.20m、短辺2.27mの長方形を呈する。確認面からの深さは24cmを測る。

床　面　竈周辺に貼り床が施され、床面はほぼ平坦であった。

竈　址　東壁の南に偏在し、壁面より外側にある。幅58cm・奥行き68cmである。

備　考　柱穴、周溝等は検出されなかった。

重　複　H－39・43と重複するが、本住居址が最も新しい。

遺　物　総数は126点で住居内から散在して出土した。土師質高台皿（H-34・1、2）、また土器の底部を利用した土製紡錘車（H-34・3）の３点を図示した。

H－35号住居址

位　置　V－17　　標　高　113.33m

挿　図　Fig.21、35　　写　真　PL.5、12　　面　積　9.7㎡　　方　位　W－94°－E

形　状　長辺2.92m、短辺2.02mの長方形を呈する。確認面からの深さは14cmを測る。

床　面　床面はほぼ平坦で、部分的に堅い面がみられた。

竈　址　南壁のほぼ中央部に位置し、壁面より外側にある。幅48cm・奥行き62cmである。両袖には砂質凝灰岩の切石を使用している。

備　考　柱穴、周溝等は検出されなかった。

重　複　H－36・40と重複しており、本住居址はH－36より先行し、H－40より新しい。

遺　物　総数は267点で、ほぼ全域から散在して出土した。図示したのはカワラケ（H-35・1）１点である。

H－36号住居址

位　置　V－16、V－17、W－17　　標　高　113.38m

挿　図　Fig.21、35　　写　真　PL.14、15　　面　積　10.4㎡　　方　位　E－21°－S

形　状　長辺2.62m、短辺2.48mのほぼ正方形を呈する。確認面からの深さは12cmを測る。

床　面　床面はほぼ平坦で、全体的に良く踏み固められていた。

竈　址　東壁の南に偏在し、壁面より外側にある。幅38cm・奥行き76cmである。

貯蔵穴　住居南隅、竈右側に検出された。直径32cmのほぼ円形を呈す。深さは37cmであった。

備　考　柱穴、周溝等は検出されなかった。

重　複　H－35・40・44と重複しており、本住居址が最も新しい。

遺　物　総数68点で、図示したのは土師質坏（H-36・1、2、3）、土師質高台椀（H-36・4、5、6）の６点である。

H－37号住居址

位　置　W－17、W－18、X－17、X－18　　標　高　113.15m

挿　図　Fig.22　　調査面積　(10.8)㎡　　方　位　E－17°－S

形　状　西壁をW－3により破壊されているため全体の形状は確認できなかったが、東壁は4.70mである。確認面からの深さは8㎝を測る。

床　面　堅く良く締まった床で、ほぼ平坦であった。

備　考　竈址、柱穴、周溝等は検出されなかった。

重　複　H－38・44、W－3と重複しており、本住居址はH－38より新しく、H－44、W－3に先行する。

遺　物　土師器の小破片がほとんどで、復元・実測には至らなかった。

H－38号住居址

位　置　W－17　　標　高　113.10m

挿　図　Fig.22、39　　面　積　不明　　方　位　E－17°－S

形　状　調査区域外のため竈址のみの検出にとどまり、全体の形状は確認できなかった。

竈　址　本竈址は南壁に存在していたものと推定される。幅63㎝・奥行き78㎝。構築材として両袖石に砂質凝灰岩の切石を用いていた。

重　複　H－37と重複しており、本住居址が先行する。

遺　物　出土遺物は土師器の小破片がほとんどで、土製紡錘車（H-38・1）1点を図示した。

H－39号住居址

位　置　T－16、T－17、U－16、U－17　　標　高　113.22m

挿　図　Fig.22、35　　写　真　PL.15　　面　積　11.3㎡　　方　位　E－10°－S

形　状　西半分が住居址の切り合いにより破壊されているため、全体の形状は確認できなかったが、東壁の南北は2.95mを測る。確認面からの深さはわずか9㎝である。

床　面　残存する床面はほぼ平坦で堅く、良く踏み固められている。

備　考　竈址、周溝等は検出されなかった。

重　複　H－34・43と重複しており、本住居址が最も古い。

遺　物　総数71点の遺物が出土している。図示できたものは、土師質坏（H-39・1、3）と土師質高台椀（H-39・2）がある。

H－40号住居址

位　置　U－17、U－18、V－17、V－18　　標　高　113.30m

挿　図　Fig.22　　面　積　5.8㎡　　方　位　E－6°－S

形　状　長辺2.65m、短辺2.20mの長方形を呈す。確認面からの深さは14㎝を測る。

床　面　ほぼ平坦で良く踏み固められている。

竈　址　東壁の北寄りに位置する。幅44㎝・奥行き68㎝。焼土と灰が多量に検出されたが、主体

部は破壊されており範囲を確認するにとどまった。

備　考　柱穴、周溝等は検出されなかった。

重　複　H－35・36と重複しており、本住居址が最も古い。

遺　物　出土遺物は小破片がほとんどで、復元・接合には至らなかった。

H－41号住居址

位　置　U－16、U－17　　標　高　113.34m

挿　図　Fig.23、35　　写　真　PL.15　　面　積　8.5㎡　　方　位　N－83°－W

形　状　南壁が削平を受けているが、長辺3.20m、短辺2.70mの長方形を呈す。確認面からの深さは8㎝を測る。

床　面　平坦で、全面にわたって良く踏み固められた堅緻な床である。

竈　址　西壁のほぼ中央に位置する。幅62㎝・奥行き64㎝。構築材には砂質凝灰岩の切石が数点使用されていた。

備　考　柱穴、周溝等は検出されなかった。

重　複　H－42と重複しており、本住居址が先行する。

遺　物　出土遺物は82点で、図示したのは土師質高台椀（H-41・1）1点である。

H－42号住居址

位　置　U－16、U－17、V－17　　標　高　113.30m

挿　図　Fig.23　　面　積　7.5㎡　　方　位　N－87°－E

形　状　北壁部分は調査区外のため全体の形状は確認できなかった。南壁は（2.48m）である。確認面からの深さは14㎝を測る。

床　面　検出できた床面は平坦で、良く締まっている。

竈　址　東壁の中央より北に位置すると思われる。幅56㎝・奥行き72㎝。

備　考　柱穴、周溝等は検出されなかった。

重　複　H－41と重複しており、本住居址が先行する。

遺　物　出土遺物は小破片がほとんどで図示できるものはなかった。

H－43号住居址

位　置　T－16、T－17、U－17　　標　高　113.32m

挿　図　Fig.24　　面　積　不明　　方　位　N－76°－W

形　状　北壁と西壁の大部分が重複により破壊されており、全体の形状は確認できなかった。南壁は3.36mを測る。

床　面　平坦であるが、やわらかく不明瞭である。

備　考　竈址、柱穴、周溝等は検出されなかった。

重　複　H－34・39と重複しており、本住居址はH－34より先行し、H－39より新しい。

遺　物　総数178点出土しているが、小破片がほとんどで図示できるものはなかった。

H－44号住居址

位　置　V－17、V－18、W－17、W－18　　標　高　113.18m

挿　図　Fig.24　　写　真　PL.6　　面　積　10.2㎡　　方　位　E－4°－S

形　状　長辺3.26m、短辺3.08mの長方形を呈する。確認面からの深さは14cmを測る。

床　面　平坦で、全体的に貼り床が施され非常に堅く締まっている。

竈　址　東壁の中央より北に位置し、壁面より外側にある。幅54cm・奥行き76cmである。

備　考　柱穴、周溝等は検出されなかった。なお、遺構中央部をW－3により切られている。

重　複　H－36・37と重複しており、本住居址はH－36より先行し、H－37より新しい。

遺　物　総数は81点あるが、土師器の小破片がほとんどで図示できるものはなかった。

H－45号住居址

位　置　H－11、H－12　　標　高　114.50m

挿　図　Fig.24　　写　真　PL.7　　面　積　不明　　方　位　E－22°－S

形　状　竈址のみの検出にとどまった。住居本体は竈の西側に存在したと推定されるが、著しく削平されており全体の形状は確認できなかった。

竈　址　東壁に位置したと推定される。幅20cm・奥行き38cmである。支柱は粗粒安山岩で作られており、左袖石には砂質凝灰岩の切石を2点使用していた。

遺　物　出土遺物は、土師器の小破片がほとんどで図示できるものはなかった。

掘立柱建物址

B－1号建物址

位　置　F－11、G－11、G－12　　挿　図　Fig.24　　写　真　PL.6

形　状　約9.2㎡の床面積をもつ。柱穴の平面形態は円、または楕円形である。柱穴の深さは確認面より60～65cmで、各柱穴底の比高もほぼ一定である。

B－2号建物址

位　置　H－14、H－15、I－14、I－15　　挿　図　Fig.24　　写　真　PL.6

形　状　約6.3㎡の床面積をもつ、1間×1間の建物である。柱穴の形態は円形もしくは、やや歪んだ楕円形を呈する。柱穴の深さは確認面より32～48cmで、各柱穴底の比高もほぼ一定

である。

B－3号建物址

位　置　H－14、H－15、I－14、I－15　　挿　図　Fig.25　　写　真　PL.6

形　状　約13.1㎡の床面積をもつ、2間×2間の建物である。柱穴の平面形態は円形あるいは、楕円形である。各柱穴底の比高もほぼ一定しており、規模は径42～51㎝の値を測り、また柱穴の深さは確認面より32～48㎝である。

井　戸　址

I－1号井戸址

位　置　P－11　　挿　図　Fig.25

形　状　規模は確認面で上幅0.9m、下幅0.8m、深さは3mを測る。

重　複　H－15・31、D－50と重複関係をもっているが、本井戸址の方が新しい。

I－2号井戸址

位　置　M－15、N－15　　挿　図　Fig.25　　写　真　PL.1

形　状　規模は確認面で上幅1.91m、下幅0.84m、深さは2.98mを測る。

重　複　H－33と重複関係をもっているが、本井戸址の方が新しい。

I－3号井戸址

位　置　T－17　　挿　図　Fig.25　　写　真　PL.3

形　状　規模は確認面で上幅0.82m、下幅0.81m、深さは4.08mを測る。

遺　物　底部に近い覆土中より散在して出土した五輪塔、石臼等を図示した。特にI－3・3は刻まれた梵字に金箔が施されていた。

溝　　址

W－1号溝

位　置　東西方向H～J、南北方向10～15ライン　挿　図　Fig.26　　写　真　PL.1

形　状　北西から南東に向かい比高28㎝を有する。全体的に幅5.5m×深さ0.9m前後である。断面形はほぼ逆台形を呈する。I－12グリッド付近でW－2号溝と直行する形で切られている。

遺　物　覆土より出土した古銭（W-1・1、2）2点、円盤（W-1・3）1点、くぼみ石（W-1・4）1

点を図示したが、いずれも本溝址との直接的な関連性は薄い。

W－2号溝

位　置　東西方向F～Q、南北方向12～14ライン　挿　図　Fig.26　写　真　PL.1

形　状　西から東に向かい比高23cmを有する。全体的に幅3.5m×深さ0.6m前後である。断面形は逆台形を呈する。

遺　物　覆土より出土した皿、(W-2・1)、高台椀（W-2・2)、古銭（W-2・3、4、5）3点、円盤（W-2・6、7、8、9）4点、砥石（W-2・10）1点を図示した。

W－3号溝

位　置　東西方向V～W、南北方向17～18ライン　挿　図　Fig.26

形　状　北から南に向かい比高8cmを有する。全体的に幅1.2×深さ0.4m前後である。断面形は薬研状を呈する。

遺　物　比較的、底に近い覆土中より出土した坏（W-3・1)、高台椀（W-3・2)、石製模造品（W-3・3)の3点を図示した。

W－4号溝

位　置　東西方向D～M、南北方向9～11ライン　挿　図　Fig.26　写　真　PL.1

形　状　本トレンチの北端を西から東に向かい走行する大規模な溝である。比高38cmを有する。全体的に幅4.8～5.2m×深さ1.8m前後である。断面形は薬研状を呈する。

備　考　底面はしっかりしていて、水流の痕跡はみられない。上部は水道管埋設による攪乱を受けている。なお、本溝址は、山崎 一氏の説によると推定八市場城址内に位置し、北側に存在していたとされる濠の可能性もあると考えられる。

その他の遺構

S－1号防空壕

位　置　N－10、N－11、N－12、N－13、O－11、O－12、O－13

挿　図　Fig.26　写　真　PL.1　面　積　17.3㎡

形　状　南北幅約10m、東西幅約1.70～4.90m、深さ約1.80～2.30mの南北に長い不定形である。南にはやや螺旋状に4段、北には3段の出入り口用の階段を有し南北に抜け出ることが可能である。また、南側西隅に幅1.50m・奥行き1.30m、北側西隅に幅1.10m・奥行き1.00m程の補助的な掘り込み穴が2箇所検出された。さらに東側には棚状の掘り残しが確認された。

備　考　発掘前の現況調査では、埋もれた状態の南側入り口部分が確認できた。当初、この調査区は全体が竹林に覆われており、太平洋戦争の際、ここに住む人が避難するために構築したものと思われる。なお、非常に堅い地山（総社砂層）を掘り込んで構築されており、大きな落盤もみられず中の状態は良好であった。また、遺物は検出されなかった。

柵列状遺構？

位　置　V－18、W－18、X－17、Y－16

挿　図　Fig.26　　写　真　PL.1　　方　位　N－54°－E

形　状　調査区の東端に位置し、南側からD－118、D－114、D－111、D－110、D－119の順で各土坑を結び付けてみると、N－54°－Eの方向性を持って、調査区を縦断する形でほぼ一列に走り、柵列状の遺構とも考えられる。各土坑の間隔は1.35～2.40mで、比高もほぼ一定している。D－120も間隔が3.8mと他と比べて長いが一連の続きの土坑群の可能性もあると思われる。

備　考　W－4号溝址と同様に、八日市場城址との関連性も考えられる。

土　　坑

Tab.1　29トレンチ土抗表（1）

土坑名	所在グリッド	規模(長軸×短軸×深さ)m	平面形	遺物総数
D－1	G-16	2.03×1.20×0.73	楕円形	
D－2	F-14	0.46×0.40×0.15	円形	3点
D－3	G-12、G-13	2.34×0.85×0.14	隅丸長方形	20点
D－4	G-16、H-16	1.03×0.91×0.25	長方形	
D－5	F-14	0.50×0.48×0.08	円形	
D－6	E-12	1.70×1.06×0.34	楕円形	
D－7	F-13、F-14	0.34×0.28×0.33	楕円形	
D－8	F-14	0.38×0.26×0.34	楕円形	
D－9	G-15	0.34×0.20×0.28	楕円形	
D－10	G-15	0.26×0.25×0.44	円形	
D－11	G-15	0.22×0.20×0.44	円形	
D－12	G-12	0.64×0.58×0.10	楕円形	3点
D－13	F-13	0.55×0.46×0.42	楕円形	
D－14	H-13、H-14、I-13	2.18×0.86×0.58	長方形	
D－15	H-14	0.46×0.44×0.49	円形	
D－16	H-15	0.37×0.35×0.28	円形	
D－17	H-15、I-15	1.23×0.70×0.11	長方形	
D－18	H-15	0.21×0.20×0.30	円形	
D－19	K-12、K-13	0.51×0.41×0.42	長方形	
D－20	M-13、N-13	1.42×1.06×0.38	長方形	2点
D－21	P-13	1.35×0.42×0.25	長方形	
D－22	Q-14	1.22×0.32×0.40	長方形	
D－23	P-13、P-14、Q-13、Q-14	1.35×0.81×0.54	長方形	

Tab. 2　２９トレンチ土抗（２）

土坑名	所在グリッド	規模(長軸×短軸×深さ)m	平面形	遺物総数
D－２４	Q-14	0.24×0.20×0.32	正方形	
D－２５	Q-13	0.29×0.24×0.49	円形	
D－２６	Q-13	0.46×0.43×0.15	円形	
D－２７	Q-14	0.38×0.37×0.10	円形	
D－２８	L-11	0.63×0.53×0.45	円形	
D－２９	M-11	0.29×0.25×0.37	円形	
D－３０	M-11	0.34×0.31×0.51	円形	２点
D－３１	M-11	0.55×0.45×0.12	楕円形	
D－３２	L-12	0.53×0.52×0.40	円形	
D－３３	N-11	0.31×0.30×0.23	円形	
D－３４	N-11	0.58×0.51×0.44	円形	
D－３５	M-12	0.65×0.53×0.54	円形	
D－３６	M-12	0.60×0.57×0.50	円形	
D－３７	M-12	0.24×0.23×0.37	円形	
D－３８	M-11、M-12	0.47×0.44×0.24	円形	
D－３９	L-11、M-11	0.60×0.52×0.27	円形	
D－４０	M-12	0.24×0.21×0.33	円形	
D－４１	M-12	0.26×0.25×0.36	円形	
D－４２	N-11	0.29×0.22×0.42	円形	
D－４３	N-11	0.30×0.25×0.13	円形	
D－４４	I-1、J-11	0.62×0.50×0.22	円形	
D－４５	N-11	0.29×0.26×0.22	円形	
D－４６	N-11	0.26×0.24×0.49	円形	
D－４７	J-12	0.64×0.62×0.14	円形	１点
D－４８	J-11	0.48×0.37×0.32	楕円形	
D－４９	I-11、J-11	0.49×0.43×0.13	円形	
D－５０	P-11	0.65×0.47×0.52	円形	
D－５１	K-11、K-12、L-11、L-12	0.78×0.59×0.58	楕円形	１点
D－５２	P-11、P-12	0.70×0.33×0.59	正方形	２点
D－５３	P-11	0.31×0.27×0.40	円形	
D－５４	P-12	0.28×0.23×0.30	円形	
D－５５	O-12	0.33×0.32×0.30	円形	
D－５６	O-11、P-11	1.07×0.99×0.23	円形	
D－５７	L-12、M-12	1.36×0.86×0.14	長方形	
D－５８	M-12	0.71×0.45×0.22	楕円形	
D－５９	L-11、L-12	0.93×0.75×0.23	楕円形	
D－６０	K-11、L-11	0.46×0.42×0.24	楕円形	
D－６１	K-11	0.25×0.24×0.36	円形	
D－６２	K-12、L-12	1.42×1.08×0.21	楕円形	
D－６３	K-13	0.47×0.44×0.38	円形	
D－６４	K-13	0.30×0.26×0.23	円形	
D－６５	K-13	0.58×0.48×0.26	楕円形	
D－６６	K-13	0.43×0.38×0.17	円形	
D－６７	L-13	0.71×0.42×0.12	長方形	
D－６８	L-13	0.49×0.40×0.12	楕円形	
D－６９	L-13	0.56×0.34×0.12	楕円形	
D－７０	M-14	0.36×0.34×0.17	円形	
D－７１	L-14	0.93×0.81×0.32	円形	
D－７２	L-14、M-12	0.47×0.29×0.59	楕円形	
D－７３	M-13	0.35×0.34×0.22	円形	
D－７４	M-13、M-14	0.88×0.80×0.28	楕円形	１点

Tab. 3　２９トレンチ土抗表（３）

土坑名	所在グリッド	規模(長軸×短軸×深さ)m	平面形	遺物総数
D－７５	M-14	0.40×0.34×0.55	円形	
D－７６	N-13	0.30×0.29×0.48	円形	
D－７７	M-14	0.35×0.30×0.29	円形	
D－７８	K-12	0.66×0.56×0.33	楕円形	
D－７９	K-11、K-12	0.53×0.40×0.72	円形	
D－８０	K-13	0.30×0.28×0.23	円形	
D－８１	K-13	0.40×0.37×0.40	円形	
D－８２	S-14、S-15	2.39×1.50×0.34	長方形	
D－８３	T-15	0.76×0.72×0.18	円形	
D－８４	S-15、S-16、T-15、T-16	2.27×1.00×0.31	長方形	
D－８５	T-15	0.65×0.64×0.26	円形	
D－８６	T-15、T-16	0.65×0.63×0.36	円形	
D－８７	S-16、T-16	1.07×0.78×0.37	楕円形	
D－８８	S-16	0.66×0.66×0.48	円形	
D－８９	S-16	0.31×0.29×0.23	円形	
D－９０	T-16	0.74×0.72×0.13	円形	
D－９１	N-12、N-13、O-12、O-13	0.98×0.94×0.11	正方形	
D－９２	V-17、V-18	0.91×0.70×0.26	楕円形	１３点
D－９３	V-17、V-18	0.58×0.47×0.12	楕円形	３点
D－９４	Y-17	0.58×0.42×0.67	楕円形	
D－９５	Y-17	0.68×0.50×0.35	楕円形	
D－９６	Z-17	0.48×0.47×0.52	円形	４点
D－９７	U-17	1.21×0.81×0.28	長方形	１３点
D－９８	Y-16、Y-17	0.83×0.67×0.57	長方形	
D－９９	V-17	0.66×0.51×0.26	円形	
D－１００	V-18	0.98×0.76×0.44	長方形	３点
D－１０１	U-16	0.53×0.50×0.22	楕円形	１点
D－１０２	V-18	1.23×0.93×0.20	楕円形	７点
D－１０３	Y-17、Y-18	0.70×0.47×0.20	楕円形	
D－１０４	U-17	1.00×0.71×0.47	楕円形	１４点
D－１０５	T-16	0.82×0.71×0.11	円形	６点
D－１０６	V-17	0.52×0.45×0.22	円形	
D－１０７	V-18	0.80×0.51×0.13	楕円形	
D－１０８	W-17	0.76×0.70×0.18	円形	１１点
D－１０９	W-17	0.33×0.28×0.26	円形	１点
D－１１０	X-12	0.31×0.30×0.26	円形	
D－１１１	W-17、W-18	0.31×0.24×0.53	円形	２点
D－１１２	X-18	0.32×0.31×0.58	円形	
D－１１３	W-18	0.29×0.26×0.11	円形	
D－１１４	W-18	0.22×0.17×0.44	円形	
D－１１５	V-17	0.26×0.22×0.17	円形	
D－１１６	V-18	0.19×0.17×0.16	円形	
D－１１７	V-18、W-18	0.29×0.29×0.34	円形	４点
D－１１８	V-18	0.29×0.19×0.36	円形	
D－１１９	X-18	0.31×0.29×0.37	円形	
D－１２０	Y-16	0.40×0.29×0.45	円形	
D－１２１	Y-17	0.50×0.39×0.57	円形	
D－１２２	V-17	0.27×0.22×0.10	円形	
D－１２３	V-17	0.28×0.19×0.32	円形	
D－１２４	V-17	0.20×0.17×0.28	円形	
D－１２５	U-17、V-17	3.44×0.85×0.27	長方形	

2　Ｚトレンチ

（1）概　　観

調査にあたっては、４ｍのグリッドを設定して進めたことは前述のとおりである。北西隅を基点（国家座標Ⅸ系Ｘ＝＋43,22, Ｙ＝－71,14）に「Ｍ－30グリッド」というように呼称した。本トレンチの規模は、南北の長さが約50ｍ、東西幅ほぼ2～28ｍで、面積は793㎡である。また、調査区の標高は、111.0～115.6ｍである。現況では、西約100ｍのところに宮鍋神社（蒼海城の跡）があり、東には五千石用水が流れ、牛池川によって開析された西から東にかけて傾斜した崖面となっていた。

調査の結果、中世以降の遺構として溝４条が検出でき、Ｗ－１は長尾氏所有の絵図と照合の結果から『蒼海城』の堀と考えられる。詳細は『元総社明神遺跡Ⅷ（1990）』に掲載してある。また、平安時代の遺構は、住居址18軒・土坑18基等が崖線部分の斜面から重複して検出された。そのため、住居東側は削平されており、全体像をつかむのは困難であった。遺物総数は完形品、破片をとりまぜて20,660点にのぼった。

（2）各遺構と遺物

住　居　址

Ｈ－１号住居址

位　置　Ｐ－33　　標　高　112.73ｍ

挿　図　Fig.27　　写　真　ＰＬ．８、19　　調査面積　(5.56)㎡　　方　位　Ｎ－87°－Ｗ

形　状　西壁をＨ－10・16に、南壁をＨ－17に切られているため、全体の形状は確認できなかったが、南北方向は3.70ｍの方形、確認面からの深さは15㎝を測る。

床　面　部分的にしか検出できなかったが、平坦な床であった。

竈　址　西壁の南寄りに位置し、壁面より外側にある。幅70㎝・奥行64㎝で、両袖には砂質凝灰岩が用いられていた。

重　複　Ｈ－2ｂ・10・16・17と重複する。本住居はＨ－10より先行し、Ｈ－2ｂより新しい。Ｈ－10に切られるＨ－16、Ｈ－17との前後関係は不明である。

遺　物　総数445点である。図示したものは、土師坏１点(H-1・フク土)、羽釜１点(H-1・18)である。

Ｈ－2ａ号住居址

位　置　Ｐ－31、Ｐ－32、Ｑ－31、Ｑ－32　　標　高　113.07ｍ

挿　図　Fig.27　　写　真　PL.8、19　　調査面積　(10.04)㎡　　方　位　N－20°－E

形　状　東壁と北壁を削平されているため、全体の形状は確認できなかったが、長径3.60m、短径（3.10）mの長方形と推定される。確認面からの深さは31.7㎝を測る。

床　面　総社砂層を掘り込んで作出されており、わずかに貼り床が検出できた。西から東にやや傾斜を有する。

重　複　H－2b・11と重複するが、本住居の方が新しい。

遺　物　総数187点である。図示したものは、土師坏3点（H-2・8、9、89）、カワラケ2点（H-2・48、49）、砥石1点（H-2・11）である。

H－2b号住居址

位　置　P－32、P－33　　標　高　112.98m

挿　図　Fig.27　　写　真　PL.8　　調査面積　(12.90)㎡　　方　位　N－74°－W

形　状　北壁をH－2aに、南壁をH－1に、西側竈部分をW－1に切られているため、全体の形状は確認できなかった。南北方向のは3.47mの方形、確認面からの深さは17.0㎝を測る。

床　面　総社砂層を掘り込んで造られておりわずかに貼り床を検出できた。西から東に傾斜を有する。

竈　址　西壁のほぼ中央に位置するが、ほとんどをW－1によって削られており、焚口部と焼土を検出したにとどまる。

重　複　H－1・2a・5・11と重複するが、H－1より先行し、H－2a・5・11より新しい。

遺　物　出土遺物は小破片がほとんどで接合・復元にはいたらなかった。

H－3号住居址

位　置　O－34、O－35、P－35　　標　高　112.82m

挿　図　Fig.27　　調査面積　(9.05)㎡　　方　位　N－90°－W

形　状　北壁をH－10に切られまた東は削平されているため、全体の形状は確認できなかった。形状は方形で確認面からの深さは21.0㎝であった。

床　面　H－10との識別に苦慮したが、本住居址のほうがやや床面が高かったため、独立させた。凹凸が多く、貼り床等も不明であった。

重　複　H－10・13・14と重複するが、本住居はH－10・13に先行する。

遺　物　総数76点で、小破片が多く接合・復元には至らなかった。

H－4号住居址

位　置　O－36　　標　高　113.32m　　調査面積　(3.25)㎡

形　状　H－8の西側にわずかに確認できたが、ほとんどが調査区域外になるため住居址と断定できる要素にも欠ける。しかし、底面が総社砂層を掘り込んだ平坦面であったことから、床面と判断した。出土遺物も極めてすくなかった。

H－5号住居址

位　置　P－32、P－33　　標　高　112.92m

挿　図　Fig.27　　写　真　PL.8、19　　調査面積　(0.62)㎡　　方　位　N－61°－E

形　状　遺構確認面の最上部で焼土と粘土を確認したため竈と判定した。周囲を丹念に精査したがプランの検出は不能であった。

竈　址　幅72cm・奥行88cmである。支柱には砂質凝灰岩が用いられていた。

重　複　H－1・2bと重複するが、本住居の方が先行する。

遺　物　総数49点で、図示したものは土師坏2点（H-5・1、フク土）であった。

H－6号住居址

位　置　P－32、Q－31、Q－32　　標　高　112.58m

挿　図　Fig.27・28　　写　真　PL.8、19　　調査面積　(10.47)㎡　方　位　W－14°－S

形　状　斜面地であったため、東側がかなり削平されており、残存状況がよくなかったため全体の形状は確認できなかった。長辺(3.4)m、短辺(3.0)mの長方形を呈する。確認面からの深さは西壁で13cmを測る。

床　面　総社砂層を掘り込んだ床面で、遺存していた西側でわずかに堅緻な面を検出できた。

竈　址　西壁の北寄りに位置し、壁外に作出されている。幅65cm・奥行80cmで、両袖と支柱は粗粒安山岩の円礫が用いられていた。

重　複　H－11と重複するが、本住居の方が新しい。

遺　物　総数600点である。図示したものは、土師甕1点（H-6・146）、カワラケ1点（H-6・253）、砥石1点（H-6・220）の3点である。

H－7号住居址

位　置　P－29、P－30　　標　高　113.14m

挿　図　Fig.28　　写　真　PL.19　　調査面積　(15.23)㎡　　方　位　N－7°－E

形　状　東側をかなり削平され、W－3にも切られている。長辺(4.7)m、短辺3.5mの長方形を呈する。確認面からの深さは21cmを測る。

床　面　総社砂層を掘り込み、ほぼ水平に造られていた。部分的に貼り床が認められた。

竈　址　南壁の西寄りに位置し、壁外に作出されている。幅55cm・奥行(70)cmを測り、袖石には砂質凝灰岩が1石用いられていた。

重　複　W－3と重複するが、本住居の方が先行する。

遺　物　総数43点である。図示したものは、土師甕1点（H-7・3）、土師坏1点（H-7・21）である。

H－8号住居址

位　置　O－35、O－36、O－37　　標　高　112.72m

挿　図　Fig.28　　写　真　PL.19、21　　調査面積　(17.40) ㎡　　方　位　N－22°－E

形　状　北壁をD－2に、東壁をH－15に切られている。南北方向の辺は4.6mの方形、確認面からの深さは32.5cmを測る。

床　面　総社砂層を掘り込んでおり、西から東に傾斜をもつが凹凸は少なかった。

重　複　H－4・14・15と関係を有する。H－15より先行し、H－4より新しい。

遺　物　総数315点である。図示したものは、土師壷1点（H-8・19）、土製円盤1点（H-8・フク土）、石製模造品1点（H-8・フク土）、カワラケ1点（H-8・54）である。石製模造品は混入品であろう。

H－9号住居址

位　置　P－35、P－36　　標　高　111.90m

挿　図　Fig.28　　調査面積　(10.94) ㎡　　方　位　N－7°－W

形　状　東側はかなり削平されている。南北方向の辺が3.68mの方形、確認面からの深さは30.5cmを測る。

床　面　傾斜地の黒土層で確認したため判別が困難であった。ほぼ平坦で貼り床は認められなかった。

遺　物　総数372点で、小破片が多く接合・復元には至らなかった。

H－10号住居址

位　置　P－34、P-35、Q－34　　標　高　112.65m　　挿　図　Fig.28

写　真　PL.8、10、19、21　　調査面積　(17.15) ㎡　　方　位　W－9°－S

形　状　東側は削平され、南壁はH－3に切られているため、全体の形状は確認出来なかった。形状は方形、確認面からの深さは20.0cmを測る。

床　面　総社砂層を掘り込んで作出され、竈の前面には堅緻面が広がっていた。他の住居址と同様に西から東に傾斜を有する。

竈　址　西壁の南寄りに位置し、壁外に作出されている。幅50cm・奥行90cmで、両袖石と支柱には砂質凝灰岩が用いられていた。

重　複　H－1・3・13・16と切り合い関係があり、H－1より先行する以外は新しい。

遺　物　総数808点である。図示したものは、カワラケ2点（H-10・133、172）、土師坏2点（H-10・71、72）、羽釜1点（H-10・52）、平瓦1点（H-10・55）ある。

H－11号住居址

位　置　P－31、P－32　　標　高　112.85m

挿　図　Fig.29　　写　真　PL.8　　調査面積　(7.24)㎡　　方　位　N－85°－W

形　状　著しい重複のため形状は不明。確認面からの深さは10.0cmを測る。

床　面　総社砂層を掘り込んでいた。確認できた竈の前面には貼り床が施工され堅緻面が存在していた。

竈　址　2基検出された。北竈は幅50cm・奥行80cmを測る。断ち割り調査では多量の焼土が確認できた。南竈は幅70cm・奥行100cmを測る。補強材として円礫が使用されていた。2基併存した事例は少ないことと天井石の存在により北竈から南竈の変遷が考えられる。

重　複　H－2a・2b・6と重複する。本住居はH－2a・6より古く、H－2bより新しい。

遺　物　総数108点である。図示したものは、土師坏1点（H-11・27）である。

H－12号住居址

位　置　P－34、P－35、Q－34　　標　高　112.18m　　挿　図　Fig.29

写　真　PL.9、19、20、21　　調査面積　(12.04)㎡　　方　位　N－10°－E

形　状　検出された壁から長方形のプランと考えられる。

床　面　数面の良好な貼り床を確認できた。貼り床は南北方向で切開を行った結果、中央と端では30cm以上の高低差が認められた。中央部の陥没と思われるが、断定できない。

遺　物　総数1.428点である。図示したものは、カワラケ13点（H-12・30、43、44、46、48、65、205、206、229、230、235、305、306）、土師坏18点（H-12・42、60、61、84、96、97、98、100、106、115、138、139、143、184、192、204、220、265）、土師高台椀1点（H-12・45）、土師鉢1点（H-12・144）、平瓦1点（H-12・39）、石製模造品1点（H-12・フク土）である。石製模造品は混入物であろう。

H－13号住居址

位　置　P－34　　標　高　112.88m

挿　図　Fig.29　　写　真　PL.9　　調査面積　(0.30)㎡　　方　位　W－14°－S

形　状　確認面の最上部で石がまとまって検出されたため、精査を行った結果、竈と推定した。周囲のプラン確認を執拗に行ったが住居址は検出できなかった。

竈　址　円礫と切石を用いた構造である。詳細は不明であるが、幅40cm・奥行65cmの規模を有する。

重　複　H－3・10と重複する。本住居の方がH－3に先行し、H－10との関係は不明である。

遺　物　総数160点で、小破片で接合・復元には至らなかった。

H－14号住居址

位　置　N－35、O－35　　標　高　113.02m

挿　図　Fig.29　　写　真　PL.9、10　　調査面積　(8.08)㎡　　方　位　N－23°－E

形　状　確認された壁から推定し、南北方向の辺が3.34mの方形である。竈は東壁に設置されたものと考えられる。

床　面　総社砂層を掘り込んだ平坦な床面で、貼り床は施工されていない。

重　複　H－3・8と重複する。本住居が両住居に先行する。

遺　物　総数39点で、小破片で接合・復元には至らなかった。

H－15号住居址

位　置　O－35、O－36、O－37、P－35、P－36、P－37　　標　高　112.46m

挿　図　Fig.29　　写　真　PL.10　　面　積　25.2㎡　　方　位　N－17°－W

形　状　重複が著しいため困難であるが、長方形であろう。

床　面　ほぼ平坦に作出され、貼り床は認められない。

重　複　H－8・9と重複する。本住居は、H－8より新しく、H－9より古い。

遺　物　総数10点で、小破片で接合・復元には至らなかった。

H－16号住居址

位　置　O－33、O－34、P－33　　標　高　113.07m

挿　図　Fig.29　　写　真　PL.10、21　　調査面積　(6.43)㎡　　方　位　N－37°－E

形　状　重複によってわずかな面積しか残存していなかった。対向する壁の存在から長方形のプランであろう。

床　面　総社砂層を掘り込んで、平坦に造られていた。貼り床は認められない。

重　複　H－1・10、W－1と重複する。本住居が一番古い。

遺　物　総数58点で、小破片で接合・復元には至らなかった。

H－17号住居址

位　置　P－33、P－34、Q－33、Q－34　　標　高　112.25m

挿　図　Fig.29・30　　写　真　PL.10、22　　面　積　(7.08)㎡　　方　位　W－24°－S

形　状　傾斜面であるため住居址の半分はすでに消出していた。確認された壁から類推して長方形のプランを有するものと推定される。調査した範囲での南北方向の辺は3.08mである。

床　面　総社砂層を掘り込んでおり、全体に凹凸がみられた。

竈　址　南西隅に設置される。幅47㎝・奥行58㎝の規模を有する。切開調査で多量の焼土が検出された。

遺　物　総数38点で、小破片で接合・復元には至らなかった。

Tab. 4　Ｚトレンチ土抗表

土坑名	所在グリッド	規模(長軸×短軸×深さ)m	平面形	遺物総数
D－1	O－36、P－36	0.63×0.51×0.29	円形	
D－2	O－35	2.09×2.00×1.50	円形	174点
D－3	Q－30	0.62×0.56×0.45	円形	14点
D－4	Q－30	0.65×0.61×0.32	円形	9点
D－5	P－30	0.57×0.48×0.51	円形	
D－6	P－36	0.88×0.78×0.31	円形	15点
D－7	Q－32	1.04×0.86×0.37	円形	2点
D－8	Q－30	0.61×0.50×0.36	円形	10点
D－9a	Q－30	0.55×0.50×0.34	円形	
D－9b	Q－30	0.95×0.68×0.34	楕円形	
D－10	Q－34	1.08×0.78×0.26	長方形	27点
D－11	P－30	0.37×0.30×0.22	円形	
D－12	Q－30	0.62×0.50×0.42	円形	
D－13	P－32	1.13×0.94×0.44	円形	61点
D－14	Q－32	1.10×0.38×0.28	楕円形	6点
D－15	Q－32	1.02×0.38×0.28	楕円形	50点
D－16	Q－32	0.66×0.58×0.38	円形	19点
D－17	P－34	0.56×0.54×0.30	円形	44点
D－18	P－34	0.56×0.52×0.36	円形	55点

(3) ま と め

元総社明神遺跡第９年次の調査は、古墳時代から中近世まで多岐にわたる遺構・遺物が検出された。遺構として、古墳時代の住居址、平安時代の住居址、中世城館址等が挙げられ、遺物として、土師器・須恵器・土師質土器・灰釉陶器・緑釉陶器・白磁・瓦・土製品・石器・石製品・鉄製品・古銭・果核等と様々な検出物があった。

1. 住 居 址

本遺跡で検出した住居址は29トレンチで48軒、Ｚトレンチで18軒であった。29トレンチは溝で切られ、住宅建築のため削られ、また調査地が竹林・雑木林であったため、抜根しなければならず、遺構はその一部分を確認したに過ぎず、Ｚトレンチも崖線部分の斜面であるため、住居東側は削平され、遺構全体を確認することはできなかった。住居址の時代的内訳は、29トレンチでは古墳時代９軒、平安時代39軒であった。Ｚトレンチの18軒はすべて平安時代であった。

古墳時代の住居址はいずれも鬼高期に比定され、過去の発掘調査からも言えることであるが、比較的深い位置に、しかも総社砂層の堅い面の直上、またはそれを掘り下げて床面を構築している。そのため、著しい重複等があるにもかかわらず遺存状況の良い遺構も見られる。また遺物の

量も多く、質的にも優れている物が多い。平安時代の住居址は59軒で、29・Ｚトレンチとも重複が著しく、壁高もわずかな遺構が多かった。平面形は正方形もしくは長方形を呈し、規模も小形であった。両トレンチとも出土した土器の型式差に現れない住居址切り合いが数軒にもおよび、同時存在が考えられないことからも極めて短い期間において住居変遷が行われたと推定される。

竈の位置については、各時代とも規則性は認められなかった。しかし、袖の構築材としては、①黒色土と総社砂層の混土②白色粘土③染谷川の段丘崖を供給先とする砂質凝灰岩の切石④河原石が用いられていた。なお、29トレンチＨ－12号住居址出土の竈袖石は接合すると一個の河原石となり、袖に利用するために割ったことが窺える。

また、29トレンチから白磁１点、緑釉陶器21点、Ｚトレンチから白磁19点出土している。これら白磁は、群馬県埋蔵文化財調査事業団の大西雅広氏の鑑定によれば、11世紀から12世紀前半のものである。これらはいずれも小片で器形の復元できるものではなかった。しかし、小片で保持していた事例もある。このような貿易磁器の出土点数の多さは、都をはじめとして地方の官衙等にも貿易磁器が供給されたという点から国府との関連を考えられる。しかし、時期的には国府衰退期であるため、直接関連するというには検討を要する。

２．溝　　址

29トレンチでは溝４条と土塁状の遺構が確認された。山崎一氏の「古城塁址の研究」によれば、昌楽寺近辺の微高地は八日市場城址と推定されている。29トレンチは昌楽寺の南に位置し、他の遺構との重複関係から中世以降に機能したものと考えられる。覆土の状態や遺物からもさほど古い時期のものとは考えられず、４条の溝および土塁状遺構は八日市場城につくものとするのが妥当であろう。

３．　瓦

29トレンチで出土した２つの複弁蓮華文軒丸瓦の瓦当面と山王廃寺で出土した瓦が同笵関係であることが判明した。まず、２個体とも花弁と周縁の一部がみられる。そして、Ｖ－18Ｇ・１の瓦について、周縁は縁高1.0㎝、縁幅1.8㎝、直立・高縁である。周縁上には径1.0㎝の円形の竹管の刺突がみられる。花弁は、弁長（3.6）㎝、弁幅3.2㎝、子葉長（1.8）㎝である。弁央は稜をなし、ゆるやかな曲線を描きながら弁端で反転する。花弁は弁央の稜の左右両側のところで幾分くぼんでいる。裏面はていねいにナデ整形されているが、上部に丸瓦の剥離痕が認められる。それによると、瓦当裏面に丸瓦の端面をあて、補強粘土をつけたして整形する接着法を行ったことがわかる。なお、瓦当裏面の接合部にはヘラ書きの沈線によるカキヤブリがみられることから、接合を強化する工夫を行っていることがわかる。胎土は良好で、焼成堅牢、灰白色を呈している。これらことは山王廃寺の瓦の諸条件と一致する。

さて、現在山王廃寺跡の所在する地は、総社町総社昌楽寺廻りと呼ばれ、この地に古く昌楽寺

が存在していたと推測されている。しかし、29トレンチの北に位置する現在の昌楽寺（天台宗）は元総社町に所在する。ところが、江戸時代の初めに描かれたとされる元総社村の絵図には記されていない。また、山王廃寺塔跡の所在する日枝神社は、天台宗系の守護神を祀ったものとみられ、近くにその寺院の存在が予測される。このことと昌楽寺廻りという地名と併せて、山王の地に昌楽寺と呼ばれる寺院が存在したと考えられている。山王廃寺の瓦出土により、このようなことも想起させられた。

4．五　輪　塔

29トレンチの井戸址から五輪塔が6点出土した。空風輪部2点、火輪部3点、水輪部1点であった。その中のⅠ－3・3は空風輪部（宝珠）を安山岩一石で作ったものであるが、掘りこまれた梵字2字ともに金箔が塗られていた。また、朱を使い、梵字の周りに円を描き、空輪上部を丸く塗り、空輪部と風輪部の間の掘り込みを塗っていた。この宝珠は、群馬県教育委員会文化財保護課の秋池武、磯部淳一両氏の鑑定により、宝珠の頚部のつくり出しかたで16世紀後半に比定され、梵字の金箔および朱の塗彩については、本遺物のように残りのいいものは群馬県内でもまれであるとのコメントを戴いた。また、群馬県北群馬郡子持村にある長尾氏の五輪塔に形態が類似しており、総社の長尾氏に関連するものと推定できるというコメントも戴いた。

◎参考文献

『群馬県地名大辞典』（1988）角川書店
『群馬の考古学』（1988）（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団
友廣哲也『有馬遺跡・大久保Ｂ遺跡』（1989）（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団
飯塚卓二・井川達雄『下佐野遺跡』（1989）（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団
綿貫邦男『鳥羽遺跡』（1990）（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団
今井幹夫・井上太・佐々木恵子・長谷部すみ『本宿・郷土遺跡』（1981）富岡市教育委員会
鬼形芳夫・依田治男『北原遺跡』（1986）群馬町教育委員会
山崎一『群馬県古城塁址の研究』（1978）群馬県文化事業振興会
前原豊『閑泉樋遺跡』前橋市文化財報告書第13集（1982）前橋市教育委員会
高橋正男・前原豊『神明東遺跡』（1987）前橋市教育委員会
高橋正男・前原豊『屋敷遺跡』（1987）前橋市教育委員会
『山王廃寺跡発掘調査概報　第2次～第7次』（1976～1982）前橋市教育委員会
『元総社明神遺跡Ⅰ～Ⅷ』（1983～1990）前橋市教育委員会

元総社明神遺跡　1991年３月
前橋市埋蔵文化財発掘調査団

元総社明神遺跡地層・地形分析

パリノ・サーヴェイ株式会社

Ⅰ．はじめに
Ⅱ．示標テフラの特徴
Ⅲ．地形と地質
Ⅳ．考察
Ⅴ．まとめ

Ⅰ．はじめに

前橋市元総社町明神遺跡の発掘調査では、良好な地質断面が多く作成された。これらの断面を対象として地質学的調査を行うことにより、元総社明神遺跡とその周辺における地形発達史に関する貴重な資料を得ることができた。ここでは、これまで明らかにされた地形発達の歴史について、野外調査の結果をもとに述べる。なお、野外調査は平成２年10月17日当社技師１名が実施した。

Ⅱ．示標テフラの特徴

前橋市とその周辺には、多くのテフラ層（火山砕屑物）が認められる。これらの多くについては、放射性年代測定法や層位学的方法、さらに考古学的方法などにより、噴出年代が明らかにされている。これらのテフラ層を鍵層として用いることにより、過去の地質現象の発生年代を知ることができる。最初に鍵層となるテフラ層、すなわち示標テフラ層から紹介する。

１．姶良Tn火山灰（町田・新井, 1976）

前橋台地は、おもに非常に厚い扇状地性堆積物とそれを覆う火山泥流堆積物から構成されている。前者は前橋砂礫層、後者は前橋泥流堆積物と呼ばれている（新井, 1962, 1971）。両者の間には、粘土層が認められる。ボーリング調査によって得られた試料の分析により、この粘土層の中に約2.1-2.2万年前に南九州の姶良カルデラから噴出した姶良Tn火山灰（AT, 1976）が存在することが確かめられている（新井, 1986）。なお赤城火山や榛名火山山麓の褐色火山灰土では、約1.6～2.1万年前に浅間火山から噴出した浅間－板鼻褐色軽石群（As-BP Group, 新井, 1962, 町田ほか, 1984）の下位の暗色帯の最上部に、ATに対比される白色ガラス質細粒火山灰の層位がある。

２．前橋泥流堆積物（新井, 1967）

浅間火山で発生した山体崩壊に伴う、岩屑なだれに由来する泥流堆積物である。岩屑なだれ堆積物は、浅

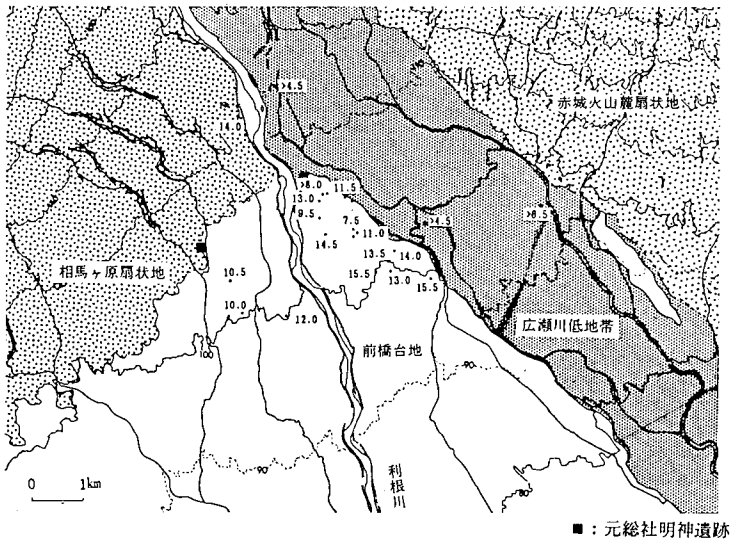


図１　前橋市周辺における前橋泥流堆積物の層厚（単位は，ｍ）.

間火山北麓において応桑泥流堆積物（荒牧, 1968）と呼ばれている。岩屑なだれは吾妻川に流れ込むとともに、河川の水を取り込み泥流と化して下流へ流れ下った。これが前橋泥流堆積物である。中之条盆地の中之条泥流堆積物（守屋, 1966）、さらに高崎や岩鼻周辺に認められる岩鼻Mud flow deposit（新井, 1962）などは、いずれも前橋泥流堆積物と同一の堆積物である。前橋泥流堆積物の層厚は、前橋市周辺において15m弱と非常に厚い（図1）。

前橋台地では、扇状地を形成していたと考えられる前橋砂礫層の上位の粘土層を覆って堆積している。粘土層中には、ATが認められる（前述）。最近、前橋泥流堆積物の下位にAs-BP Groupの一つが認められており、前橋泥流堆積物の層位がAs-BP Groupの間の層準にあることが指摘されている（早田, 1990）。前橋市総社の利根川左岸の前橋泥流堆積物から採取された木片では、24,000±650y.B.P.(GaK-725）の^{14}C年代が得られている。(新井, 1967)。前述のテフラの層位を加味すれば、前橋泥流の堆積年代は^{14}C年代より若干新しく、約2万年前と推定される（早田, 1990)。

3．浅間－白糸軽石層（As-SP, 町田ほか, 1984）

利根川左岸の前橋市総社では、前橋泥流の上位で陣場岩屑なだれの直下の層準に厚さ5㎝程度の黄色降下軽石層が認められる。軽石は、よく発泡している。この軽石は、その特徴から、約1.5万年前に浅間火山から噴出した浅間－白糸軽石（As-SP, 町田ほか, 1984）に対比される。

4．榛名－陣場岩屑なだれ堆積物（早田, 1990）

榛名山南東麓に広く分布する岩屑なだれ（高速の地すべり）である。前橋市総社では、厚さ約6mの堆積物をみることができる。As-SPの上位、約1.3-1.4万年前に噴出した浅間－板鼻黄色軽石（As-YP, 後述）の下位にあることから、本堆積物の堆積年代は約1.4万年前と考えられている（早田, 1990）。

5．浅間－板鼻黄色軽石（As-YP, 新井, 1962）

利根川河岸に連なる崖では、前橋泥流堆積物の上位に泥炭層が認められる。あまり分解の進んでいない泥炭層下部には、先に述べたAs-SPとその上位に浅間－板鼻黄色軽石層（As-YP, 新井, 1962）が認められる。As-YPは層厚20㎝程度で、下部の発泡の良い白色の降下軽石層と、上部の成層した降下火山灰層から構成されている。前橋市総社のAs-YPの直下の泥炭層では、13,130±230y.B.P.(GaK-159)の^{14}C年代が得られている（新井, 1964)。このような年代資料から、As-YPの噴出年代は約1.3-1.4万年前と推定されている。

6．浅間－総社軽石（As-Sj, 早田, 1990）

前橋泥炭層の上部は、かなり分解が進んでいる。この部分には、層厚5㎝程度の灰色の降下軽石層が認められる。軽石は、あまりよく発泡していない。また赤褐色の岩片も含まれる。この軽石層は、浅間－総社軽石層（As-Sj)と呼ばれている。群馬町保渡田古墳群の発掘調査の際に、「保渡田軽石（HtP）」と呼ばれた軽石も本テフラに対比されるものである（パリノ・サーヴェイ, 1990）。先の元総社明神遺跡における発掘調査では、本テフラ直下の泥炭層では、11,170±190y.B.P.（GaK-14760）の^{14}C年代が得られた。したがって、本テフラの噴出年代は約1.1万年前と考えておきたい。

7．浅間C軽石（As-C, 荒牧, 1968, 新井, 1979）

牛池川の谷底低地では、低地を構成する地層の基底部に白色軽石層が認められる。軽石の層厚は5㎝程度で、よく発泡している。このテフラは、浅間C軽石（As-C, 荒牧, 1968, 新井, 1979）に対比される。浅間C軽石の噴出年代は、土器との関係から4世紀中葉（石川ほか, 1979）と推定されている。

8．榛名－渋川テフラ層（Hr-S, 早田, 1989）

As-Cとともに、牛池川の谷底低地において認められる顕著な示標テフラ層である。多くのユニットから構成されるテフラで、おもに細粒の褐色火山灰からなる。本テフラの噴出年代は土器との関係から6世紀初頭と考えられている（坂口, 1986）。なお榛名－渋川テフラ層（Hr-S）は、榛名二ツ岳降下火山灰（FA, 新井, 1979）と呼ばれた降下テフラと、二ツ岳第1軽石流（FPF-1, 新井, 1979）と呼ばれた火砕流堆積物を併せた総称である。

9．榛名－伊香保テフラ層（Hr-I, 早田, 1989）

群馬町西国分Ⅰ遺跡では、Hr-Sの上位に厚さ数㎝の黄色細粒火山灰が認められる。この火山灰は、6世紀中葉に榛名火山二ツ岳火口から噴出した榛名－伊香保テフラ層（Hr-Ⅰ, 早田, 1989）の最上位のメンバーに対比される（パリノ・サーヴェイ株式会社, 1989）。

なお、榛名－伊香保テフラ層（Hr-Ⅰ）は、榛名二ツ岳降下軽石（FP, 新井, 1962）と呼ばれた降下テフラと、二ツ岳第2軽石流（FPF-2, 新井, 1979）と呼ばれた火砕流堆積物を併せた総称である。いままでのところ、元総社明神遺跡においてHr-Ⅰは認められていないものの、今後の調査で検出される可能性がある。

10. 浅間Bテフラ層（As-B, 荒牧, 1968, 新井, 1979）

元総社明神遺跡では、表層部に層厚10数cmの、多くのユニットから構成される降下テフラ層を認めることができる。このテフラ層は、下部の黄灰色の降下軽石層と上部の桃色がかった紫色の降下火山灰層に大きく区分することができる。軽石の発泡は、あまり良くない。このテフラは、層相から天仁元（1108）年に浅間火山から噴出した浅間Bテフラ（As-B, 荒牧, 1968, 新井, 1979）に対比される。

11. 浅間A軽石層（As-A, 荒牧, 1968, 新井, 1979）

利根川河床の大渡橋付近では、天明3（1783）年の浅間火山の噴火に伴う天明泥流堆積物を認めることができる。この泥流堆積物の直下には、厚さ約5cmの白色軽石層が認められる。含まれる軽石は、比較的良く発泡している。この軽石は、その層位から天明泥流堆積物に先立つ浅間A軽石(As-A, 荒牧, 1968, 新井, 1979)に対比される。当然、元総社明神遺跡付近にも降灰していると考えられるが、表層に近いことから攪乱を受けており、通常肉眼で認めることはできない。

Ⅲ. 地 形 と 地 質

元総社明神遺跡周辺の地形分類図を、図2に示す。元総社明神遺跡は、台地と低地にまたがって位置している。台地は相馬ケ原扇状地、低地は牛池川によって形成された谷底平野に各々比定されるものである。相馬ケ原扇状地は、約1.4万年に堆積した陣場岩屑なだれの堆積後、荒廃した斜面から運ばれた土砂によって急速に形成された火山麓扇状地である。この扇状地を斬って、河川沿いに谷底平野が発達している。

元総社明神遺跡の模式的な地質断面を、図3に示す。台地は相馬ケ原扇状地堆積物から構成されており、その上位に下位より前橋泥炭層上部、総社砂層が認められる。相馬ケ原扇状地堆積物は、淘汰の良い砂層から構成されている。堆積物の最上部にはAs-YPが認められる。また前橋泥炭層上部には、As-Sjが挟まれている。前橋泥炭層の上位に、厚さ数mの総社砂層の堆

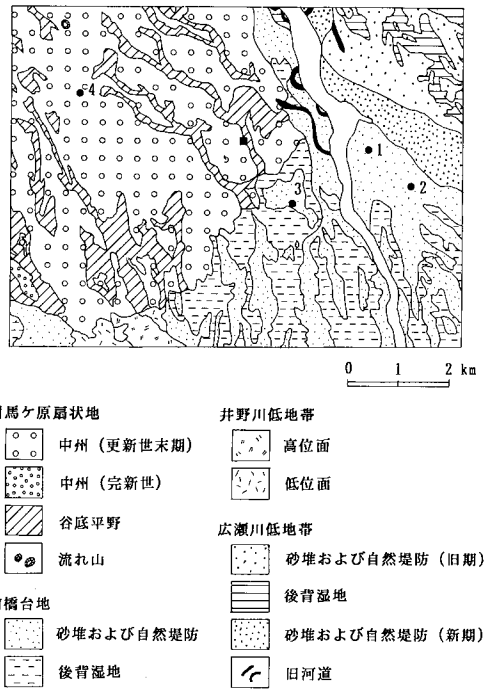


図2　元総社明神遺跡周辺の地形分類図.
1：前橋市役所,　2：前橋駅,　3：新前橋駅,
4：群馬町役場.　■：元総社明神遺跡

積が認められる。砂とシルトの互層である。

谷底平野は、総社砂層が斬られて形成されている。谷底平野の堆積物は、下位の砂礫層と上位の泥炭層に大きく区分することができる。泥炭層の基底部には、As-Cが認められる。その上位にはHr-Sが認められ、それを砂礫層が整合に覆っている。これはHr-Sの堆積に引き続いて発生した火山性の洪水堆積物と考えられる。

Ⅳ. 考　　察

－元総社明神遺跡とその周辺の地形発達史－

元総社明神遺跡における地形発達過程は、次のように考えることができる。約1.4万年前に発生した山体崩壊に伴う岩屑なだれの堆積後、相馬ケ原扇状地が形成された。扇状地の形成は、As-YP降灰時(約1.3万年前ころ)にはほぼ終了し、その後湿地が広がった。湿地は、約1.1万年前前後である。その後再び河川による砂層の堆積が起こり、総社砂層が厚く本地域に堆積した。その後、牛池川の侵食によって谷が形成された。牛池

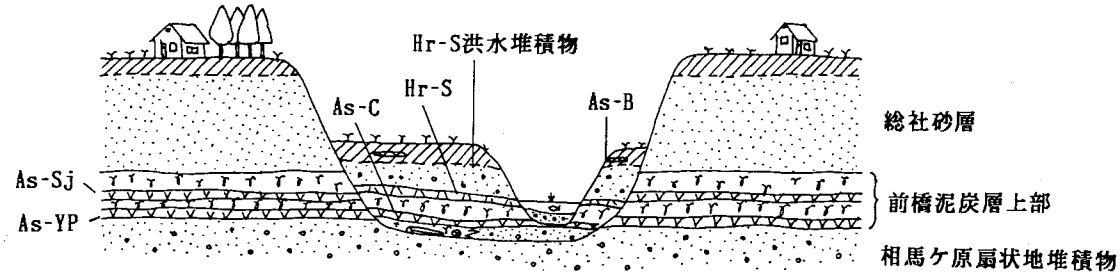


図３　元総社明神遺跡の模式的地質断面図.

川の側方侵食が続き、谷底に谷底平野が形成された。その後４世紀以前より湿地が形成され、泥炭層が堆積した。６世紀初頭になってHr-Sが堆積した後に、火山性の洪水による谷の埋積が発生した。

Ⅴ. ま　と　め

調査の成果は、次のようにまとめることができる。

・元総社明神遺跡では、下位よりAs-YP、As-Sj、As-C、Hr-S、As-Bなどの示標テフラが検出される。

・元総社明神遺跡における地形発達過程は、相馬ケ原扇状地の形成（約1.4～1.3万年前）、湿地の形成（約1.1万年前前後）、扇状地の拡大、牛池川による谷の形成、谷底平野の形成（４世紀頃）、湿地の形成、Hr-S洪水による谷の埋積（６世紀初頭以降）と続いた。

今後、総社砂層の堆積開始時期を知るため、直下の泥炭層の^{14}C年代測定や約6,300年前に南九州の鬼界カルデラから噴出した鬼界アカホヤ火山灰との層位関係を求める必要がある。

◎文　　献

新井房夫（1962）関東盆地北西部地域の第四紀編年. 群馬大学紀要自然科学編, 10, p.1-79.

新井房夫（1964）前橋泥炭層の絶対年代と旧石器包含層の年代. 地球科学, 70, p.37-38.

新井房夫（1967）前橋泥流の噴出年代と岩宿Ⅰ文化期. 地球科学, 21, p.46.

新井房夫（1971）前橋市の地形・地質.「前橋市史１」p.8-66.

新井房夫(1979) 関東地方北西部の縄文時代以降の示標テフラ層. 考古学ジャーナル, no.157, p.41-52

新井房夫（1986）前橋台地. 日本の地質「関東地方」編集委員会編「関東地方」, P.180.

荒牧重雄（1968）浅間火山の地質. 地団研専報, no.14,45p.

石川正之助・井上唯雄・梅沢重昭・松本浩一（1979）火山堆積物と遺跡Ⅰ. 考古学ジャーナル. no.157, p.3-40.

町田　洋・新井房夫（1976）広域に分布する火山灰－姶良Tn火山灰の発見とその意義－. 科学, 46, p.339-347.

町田　洋・新井房夫・小田静夫・遠藤邦彦・杉原重夫（1984）テフラと日本考古学－考古学研究と関係するテフラのカタログ－. 古文化財編集委員会編「古文化財に関する保存科学と人文・自然科学」, p.865-928.守屋以智雄（1966）吾妻川流域の地形発達. 地理学評論, 39, p.51-62.

パリノ・サーヴェイ株式会社（1989）西国分Ⅰ遺跡火山灰野外調査及び花粉分析報告. 群馬町教育委員会編「西国分Ⅰ遺跡」, p.24-27.

パリノ・サーヴェイ株式会社（1990）保渡田Ⅶ遺跡における土壌および火山灰の分析. 群馬町教育委員会編「保渡田Ⅶ遺跡－保渡田古墳群に関連する遺構群」, p.113-115.

坂口　一（1986）榛名二ツ岳起源FA・FP層下の土師器と須恵器. 群馬県教育委員会編「荒砥北原遺跡・今井神社古墳群・荒砥青柳遺跡」, P103-119.

早田　勉（1989）６世紀における榛名火山の２回の噴火とその災害. 第四紀研究, 27, p.297-312.

早田　勉（1990）群馬県の自然と風土. 群馬県史通史編１, p37-129.

註）1．土師質土器については轆轤成形、酸化焔焼成のもの。

2．円盤・紡錘車・臼玉・砥石・石製模造品・削器については、①最大長②最大幅③最大厚④重さ⑤色調⑥材質の順で記載した。

3．古銭については、①銭名②材質③時代④初鋳年代⑤読み方⑥字体⑦外輪⑧内輪⑨重さの順で記載した。

4．瓦については、①胎土②焼成③色調④残存⑤模様⑥類例の順で記載した。

5．五輪塔については、①部位②上幅③下幅④高さ⑤重さ⑥色調⑦材質の順で記載した。

6．①胎土は細粒（0.9㎜以下）、中粒（1.0㎜～1.9㎜）、粗粒（2.0㎜以上）とした。

②焼成は、極良、良好、不良の3段階評価。

③色調は土器外面を観察し、色名は新版標準土色（小山・竹原1976）によった。

④大きさの単位は㎝、gであり、残存値を（　）で示した。

Tab. 5　29トレンチ遺物観察表（1）

番号	器形	大きさ 口径	大きさ 器高	①胎土 ②焼成 ③色調 ④残存	成・整形方法 口縁・同部	成・整形方法 底部	備考	挿図 (Fig)
H－1・1	土師坏	(12.0)	(3.5)	①細粒 ②良好 ③にぶい橙 ④1/4	外反。稜有す。篦削り。	丸底。篦削り。		32
H－1・2	土師甕	20.0	(19.0)	①中粒 ②良好 ③橙 ④1/4	大きく外反。篦削り。	欠損。		32
H－3・1	砥石	≪ ① 長22.4 ② 幅7.7 ③ 厚6.8 ④ 重2080 ⑤ オリーブ灰 ⑥ 流紋岩 ≫						40
H－6・1	臼玉	≪ ① 長0.7 ② 幅0.7 ③ 厚0.4 ④ 重0.4 ⑤ 灰白 ⑥ 滑石 ≫					完形	40
H－6・2	臼玉	≪ ① 長0.8 ② 幅0.8 ③ 厚0.4 ④ 重0.3 ⑤ 黒褐 ⑥ 土製 ≫					一部欠損。	40
H－8・1	羽釜	(23.0)	(25.0)	①細粒 ②良好 ③赤褐 ④1/3	轆轤成型後、篦削り。	底部欠損。		32
H－8・2	灰釉高台椀	(15.2)	6.4	①細粒 ②極良 ③灰白 ④1/4	やや外反。轆轤。	右回転糸切痕。		32
H－9・1	土師甕	22.0	(15.0)	①粗粒 ②良好 ③にぶい黄橙 ④1/4	大きく外反。篦削り。	底部欠損。		32
H－9・2	土師甕	(17.4)	(10.1)	①細粒 ②良好 ③にぶい褐色 ④1/8	弱い『コ』の字状口縁。	底部欠損。	胴部篦削り。	32
H－12・1	土師坏	13.6	5.3	①細粒 ②良好 ③橙 ④完形	短く外反。暗文状磨き。	丸底。篦削り。		32
H－12・2	土師坏	11.8	6.3	①細粒 ②良好 ③黄橙 ④完形	直立。同部に明瞭な稜。	丸底。篦削り。		32
H－12・3	土師坏	13.2	4.6	①細粒 ②良好 ③橙 ④完形	短く外反。暗文状磨き。	丸底。篦削り。		32
H－15・1	土師坏	12.2	5.7	①中粒 ②良好 ③橙 ④完形	内湾。暗文状磨き。	丸底。篦削り。		33
H－16・1	カワラケ	9.3	2.9	①細粒 ②良好 ③橙 ④完形	やや外反。轆轤。	平底。左回転糸切痕。		33
H－17・1	甕	(7.0)	5.6	①粗粒 ②不良 ③にぶい橙 ④1/8	口縁部欠損。篦削り。	平底。	部分のみ残存。	33
H－19・1	土師質高台椀	(13.6)	5.2	①中粒 ②良好 ③灰白 ④2/3	口唇部強く外反。轆轤。	回転糸切痕。		33
H－21・1	土錘	≪ ① 長4.1 ② 幅1.8 ③ 厚1.6 ④ 重13.8 ⑤ 灰黄褐 ⑥ 土製 ≫					完形	40
H－21・2	臼玉	≪ ① 長0.5 ② 幅0.5 ③ 厚0.4 ④ 重0.2 ⑤ 灰 ⑥ 滑石 ≫					完形	40
H－22・1	土師坏	12.3	6.2	①細粒 ②良好 ③橙～暗色 ④完形	緩やかに内湾。篦削り。	丸底。篦削り。	内面にベンガラ付着。	33
H－22・2	土師坏	13.2	5.2	①中粒 ②良好 ③橙 ④完形	やや外反。暗文状磨き。	丸底。篦削り。		33
H－22・3	土師坏	14.0	5.2	①粗粒 ②不良 ③赤褐 ④ほぼ完形	短く外反。暗文状磨き。	丸底。篦削り。		33
H－22・4	土師坏	(12.4)	4.3	①細粒 ②良好 ③橙 ④1/2	やや内湾。暗文状磨き。	丸底。篦削り。		33
H－22・5	土師甑	(22.0)	(16.0)	①中粒 ②良好 ③にぶい橙 ④1/2	やや外反。篦削り。	底部欠損。		33
H－24・1	土師質高台椀	14.6	5.5	①中粒 ②良好③にぶい橙 ④3/4	やや外反。轆轤。	右回転糸切痕。		33
H－26・1	土師質坏	11.9	4.2	①細粒 ②良好 ③灰白 ④3/4	やや外反。轆轤。	右回転糸切痕。	灯明具に転用。	33
H－26・2	土師質坏	12.3	3.7	①細粒 ②良好 ③黒褐 ④4/5	端部外反。轆轤。	平底。右回転糸切痕。		33
H－26・3	土師質坏	(12.6)	3.9	①細粒 ②良好 ③灰 ④1/2	やや外反。轆轤。	回転糸切痕。		33
H－27・1	土師壺	12.6	(11.9)	①細粒 ②良好 ③明黄褐 ④1/2	緩やかに外反。篦磨き。	欠損。		33
H－27・2	高坏	(16.0)	(9.5)	①中粒 ②良好 ③明赤褐 ④1/6	端部やや外反。篦削り。	脚部の大部分が欠損。		34
H－27・3	臼玉	≪ ① 長0.5 ② 幅0.5 ③ 厚0.4 ④ 重0.2 ⑤ 灰オリーブ ⑥ 滑石≫					完形	40

Tab.6　29トレンチ遺物観察表（2）

番号	器形	大きさ 口径	器高	①胎土 ②焼成 ③色調 ④残存	成・整形方法 口縁・同部	底部	備考	挿図 (Fig)
H−28・1	土師坏	10.4	3.6	①細粒 ②良好 ③橙 ④2/3	緩やかに外反。篦削り。	丸底。		34
H−28・2	須恵蓋	11.4	2.7	①細粒 ②良好 ③灰白 ④2/5	やや外反。轆轤。	平底。回転糸切痕。		34
H−28・3	須恵坏	(11.2)	(3.7)	①細粒 ②良好 ③緑灰 ④1/5	短く内湾。稜有す。轆轤。	底部欠損。		34
H−28・4	土師坏	(11.6)	3.5	①細粒 ②良好 ③橙 ④1/2	端部外反。稜有す。	丸底。篦削り。		34
H−28・5	土師椀	11.4	9.2	①細粒 ②良好 ③橙 ④2/3	直立。篦削り。	丸底。篦削り。		34
H−28・6	土師坏	16.3	5.4	①細粒 ②良好 ③橙 ④3/4	端部外反。篦削り。	丸底。篦削り。		34
H−30・1	土師甕	(24.4)	36.0	①中粒 ②良好 ③にぶい橙 ④1/2	大きく外反。篦削り。	平底。篦削り。		34
H−31・1	カワラケ	9.8	2.1	①粗粒 ②不良 ③黄橙 ④ほぼ完形	短く外反。轆轤。	右回転糸切痕。		34
H−32・1	土師坏	11.3	3.9	①細粒 ②極良 ③橙 ④完形	短く直立。篦削り。	丸底。篦削り。		34
H−32・2	土師坏	10.8	3.9	①細粒 ②極良 ③橙 ④完形	直立ぎみに外反。篦削り。	丸底。篦削り。	全体的に歪んでいる。	34
H−32・3	土師坏	(10.8)	3.6	①細粒 ②良好 ③橙 ④2/3	直立ぎみに外反。篦削り。	丸底。篦削り。		34
H−32・4	土師坏	(15.4)	4.1	①細粒 ②良好 ③橙 ④1/2	直立ぎみに外反。篦削り。	丸底。篦削り。		34
H−32・5	土師坏	(11.0)	3.4	①細粒 ②良好 ③明赤褐 ④2/3	端部外反。篦削り。	丸底。篦削り。		34
H−32・6	土師坏	(16.4)	6.2	①細粒 ②良好 ③橙 ④ほぼ1/2	短く直立。篦削り。	丸底。篦削り。		34
H−32・7	土師坏	(11.2)	3.2	①細粒 ②極良 ③橙 ④1/4	直立ぎみに外反。篦削り。	丸底。篦削り。		34
H−33・1	土師質高台椀	(12.4)	(4.2)	①中粒 ②良好 ③浅黄 ④1/2	やや外反。轆轤。	回転糸切後調整	高台部欠損。	34
H−34・1	土師質高台皿	(15.6)	(5.2)	①細粒 ②良好 ③橙 ④1/6	大きく外反。轆轤。	回転調整。		35
H−34・2	土師質高台皿	(13.5)	3.1	①細粒 ②良好 ③灰褐 ④1/2	端部外反。轆轤。	右回転糸切。		35
H−34・3	土製紡錘車	≪ ①長6.6 ② 幅6.4 ③ 厚0.7 ④ 重2.7 ⑤ にぶい橙 ⑥ 土製≫					土器の底部利用。完形	39
H−34・1	カワラケ	(8.0)	1.6	①細粒 ②良好 ③にぶい橙 ④3/4	直線的に外反。轆轤。	平底。右回転糸切痕。		35
H−36・1	土師質坏	13.2	4.2	①細粒 ②良好 ③にぶい黄橙 ④完形	直線的に外反。轆轤。	右回転糸切痕。		35
H−36・2	土師質坏	(11.8)	3.3	①細粒 ②良好 ③にぶい橙 ④2/3	直線的に外反。篦削り。	平底。篦削り。		35
H−36・3	土師質坏	12.0	3.2	①細粒 ②良好 ③橙 ④2/3	直線的に外反。篦削り。	平底。篦削り。		35
H−36・4	土師質高台椀	14.3	5.9	①細粒 ②良好 ③にぶい黄橙 ④4/5	肥厚し短く外反。轆轤。	平底。篦削り。	口縁部炭化物付着。	35
H−36・5	土師質高台椀	14.3	5.3	①細粒 ②良好 ③にぶい橙 ④完形	直線的に外反。轆轤。	右回転糸切り。		35
H−36・6	土師質高台椀	(15.4)	5.4	①細粒 ②良好 ③灰白 ④1/2	端部外反。轆轤。	回転糸切痕。		35
H−38・1	紡錘車	≪ ① 長4.9 ② 幅5.1 ③ 厚1.3 ④ 重31.8 ⑤ にぶい橙 ⑥ 土製≫					完形。	39
H−39・1	土師質坏	(13.2)	3.9	①細粒 ②良好 ③明緑灰 ④1/2	やや外反。轆轤。	平底。回転糸切痕。		35
H−39・2	土師質高台椀	(15.7)	5.5	①細粒 ②良好 ③灰黄 ④2/3	直線的に外反。轆轤。	右回転糸切痕。	口縁部歪み。刻書？。	35
H−39・3	土師質坏	(14.0)	4.1	①細粒 ②良好 ③にぶい橙 ④1/3	外反。5段に稜を有す。	平底。右回転糸切痕。		35
H−41・1	土師質高台椀	(13.6)	5.4	①細粒 ②良好 ③灰 ④1/2	端部外反。轆轤。	右回転糸切痕。	高台後付け。	35
G-12G・1	土師坏	11.6	4.4	①細粒 ②良好 ③にぶい橙 ④3/4	端部外反。稜有す。	丸底。篦削り。		35
G-13G・1	古銭	≪ ① 元豊通寶 ② 銅北③ 宗 ④ 1078 ⑤ 廻 ⑥ 行 ⑦ 2.41 ⑧ 1.85 ⑨ 2.6≫					背文不明、一部欠損。	42
H-14G・1	古銭	≪ ① 不明 ② 銅 ③ 不明 ④ 不明 ⑤ 不明 ⑥ 不明 ⑦ 2.38 ⑧ 不明 ⑨ 2.2≫					腐食が著しい。	42
I-11G・1	土師坏	12.4	6.1	①細粒 ②良好 ③橙 ④ほぼ完形	緩やかに内湾。篦削り。	丸底。篦削り。	内面暗文状磨き。	35
I-11G・2	土師坏	13.2	6.2	①中粒 ②良好 ③黄橙 ④完形	直立気味。篦削り。	丸底。篦削り。		35
I-11G・3	土師坏	14.6	5.7	①細粒 ②良好 ③赤 ④ほぼ完形	端部外反。暗文状磨き。	丸底。篦削り。		35
I-12G・1	土師質高台椀	(13.0)	4.6	①中粒 ②良好 ③灰褐 ④1/3	直線的に外反。轆轤。	回転糸切痕。		36
I-12G・2	土師質高台椀	(14.0)	5.7	①細粒 ②良好 ③灰 ④1/2	端部外反。轆轤。	回転糸切痕。	高台部後付け。	36
I-12G・3	土師質高台？	(12.7)	(15.2)	①細粒 ②良好 ③緑灰④1/4	口縁部欠損。轆轤。	回転糸切痕。		36
J-12G・1	土師高台椀	(12.8)	(4.9)	①細粒 ②良好 ③橙 ④1/4	やや外反。篦削り。	摩滅が激しい。	高台部欠損。	36
J-12G・2	土師質坏	(12.0)	3.7	①細粒 ②良好 ③浅黄 ④2/5	やや外反。轆轤。	平底。右回転糸切痕。		36
K-11G・1	カワラケ	(9.8)	2.8	①細粒 ②良好 ③橙 ④1/2	直線的に外傾。轆轤。	平底。右回転糸切痕。		36
K-11G・2	円盤	≪ ① 長1.8 ② 幅2.0 ③ 厚0.5 ④ 重2.0 ⑤ にぶい橙 ⑥ 土製≫						40
K-13G・1	土師甕	(22.6)	(8.3)	①中粒 ②良好 ③にぶい橙 ④1/8	大きく外反。篦削り。	底部欠損。		36
K-14G・1	古銭	≪ ① 寛永通寶 ② 銅 ③ 江戸 ④ 不明 ⑤ 対 ⑥ 楷 ⑦ 2.31 ⑧ 2.22 ⑨ 4.6≫					背文無し。	42
K-15G・1	古銭	≪ ① 寛永通寶 ② 銅 ③ 江戸 ④ 不明 ⑤ 対 ⑥ 楷 ⑦ 2.31 ⑧ 2.18 ⑨ 5.1≫					背文無し。	42
K-15G・2	古銭	≪ ① 不明 ② 銅 ③ 不明 ④ 不明 ⑤ 不明 ⑥ 不明 ⑦ 2.22 ⑧ 不明 ⑨ 2.3≫					背文不明。	42
L-11G・1	カワラケ	(10.0)	3.5	①細粒 ②良好 ③にぶい橙 ④1/2	緩やかに内湾。轆轤。	平底。右回転糸切痕。	灯明具に転用。	36
L-11G・2	カワラケ	(11.2)	2.0	①中粒 ②良好③浅黄橙 ④1/2	直線的に外反。轆轤。	平底。右回転糸切痕。		36

Tab. 7　29トレンチ遺物観察表（3）

番号	器形	大きさ 口径	器高	①胎土 ②焼成 ③色調 ④残存	成・整形方法 口縁・同部	成・整形方法 底部	備考	挿図 (Fig)
L-12G・1	古銭	≪① 寛永通寶 ② 銅 ③ 江戸 ④ 不明 ⑤ 対 ⑥ 楷 ⑦ 2.28 ⑧ 1.92 ⑨ 1.4≫					背文不明。1/3欠損。	42
L-13G・1	土師坏	11.2	3.6	①中粒 ②良好 ③橙 ④ほぼ完形	端部外反。稜有す。	丸底。篦削り。		36
L-13G・2	円盤	≪① 長4.3 ② 幅4.2 ③ 厚1.1 ④ 重24.0 ⑤ にぶい橙 ⑥ 土製≫						36
M-11G・1	土師質坏	12.4	3.9	①細粒 ②良好 ③灰 ④3/4	短く外反。轆轤。	平底。右回転糸切り。	黒色処理。	36
M-11G・2	土師質坏	10.9	3.4	①細粒 ②良好 ③灰白 ④ほぼ完形	端部外反。轆轤。	平底。右回転糸切り。		36
M-12G・1	土師質鉢	(20.0)	14.7	①細粒 ②良好 ③明黄褐 ④1/2	ほぼ直立。轆轤。	平底。篦削り。		36
N-11G・1	土師質高台椀	(14.4)	5.1	①細粒 ②良好 ③浅黄 ④1/3	端部外反。轆轤。	回転糸切痕。	高台部後付け。	37
N-11G・2	土師質坏	(14.6)	5.1	①細粒 ②良好③灰白 ④1/2	直線的に外傾。轆轤。	平底。右回転糸切痕。		37
N-11G・3	土師甕	(17.0)	(10.5)	①細粒 ②良好③明黄褐 ④1/3	直線的に外反。篦削り。	底部欠損。		37
N-11G・4	羽釜	(12.0)	13.8	①中粒 ②良好 ③にぶい黄橙 ④1/3	口縁部欠損。	平底。篦削り。		37
N-12G・1	カワラケ	(9.0)	1.7	①細粒 ②良好 ③橙 ④1/2	直線的に外傾。轆轤。	平底。回転糸切痕。		37
N-12G・2	円盤	≪① 長3.7 ② 幅4.6 ③ 厚1.0 ④ 重19.5 ⑤ にぶい黄橙 ⑥ 土製≫						40
N-13G・1	砥石	≪① 長(6.1) ② 幅2.9 ③ 厚2.2 ④ 重65.0 ⑤ オリーブ褐 ⑥ 流紋岩≫						40
O-11G・1	土師質坏	(10.8)	4.0	①粗粒 ②良好 ③灰白 ④1/2	緩やかに外反。轆轤。	平底。右回転糸切り。	口縁部炭化物付着	37
O-11G・2	土師質坏	(13.6)	5.0	①細粒 ②良好 ③にぶい黄橙 ④1/2	やや外反。轆轤。	平底。右回転糸切痕。		37
O-12G・1	紡錘車	≪① 長(2.0) ② 幅3.5 ③ 厚0.7 ④ 重6.5 ⑤ 灰オリーブ ⑥ 石製≫						40
P-11G・1	埴輪	≪① 細粒 ② 良好 ③ 明赤褐 ④ 円筒埴輪の一部分≫						39
P-12G・1	紡錘車	≪① 長6.1 ② 幅6.1 ③ 厚0.9 ④ 重44.0 ⑤ にぶい橙 ⑥ 土製≫						39
P-12G・2	砥石	≪① 長(6.7) ② 幅3.4 ③ 厚2.2 ④ 重66.0 ⑤ 灰 ⑥ かんらん岩≫						40
P-13G・1	砥石	≪① 長(7.1) ② 幅(2.0) ③ 厚1.7 ④ 重32.0 ⑤ 灰 ⑥ 滑石≫						40
Q-13G・1	土師坏	(13.0)	4.9	①細粒 ②良好 ③明赤褐 ④1/4	端部外反。篦削り。	丸底。篦削り。		37
R-14G・1	土師坏	(13.4)	3.9	①中粒 ②良好 ③橙 ④1/4	端部内湾。篦削り。	平底。篦削り。		37
R-14G・2	土師坏	(11.8)	3.8	①細粒 ②良好 ③橙 ④1/2	端部内湾。篦削り。	篦削り。		37
ST15G・1	土師質坏	(12.0)	3.8	①中粒 ②良好 ③明赤褐 ④ 1/2	大きく外反。篦削り。	平底。篦削り。		37
S-15G・1	土師質坏	(14.9)	4.5	①細粒 ②良好 ③にぶい黄橙 ④1/2	緩やかに内湾。轆轤。	平底。右回転糸切痕。		37
T-16G・1	土師質坏	10.2	3.0	①細粒 ②良好 ③橙 ④ほぼ完形	やや外反。轆轤。	平底。右回転糸切痕。		37
T-17G・1	土師質高台皿	(14.0)	3.0	①細粒 ②良好 ③灰黄 ④1/2	大きく外反。轆轤。	右回転糸切痕。		37
T-17G・2	臼玉	≪① 長0.7 ②幅0.7 ③ 厚0.45 ④ 重0.2 ⑤ にぶい赤褐 ⑥ 滑石≫						40
U-16G・1	土師甕	(18.6)	29.9	①細粒 ②良好 ③にぶい黄橙 ④2/3	大きく外傾。篦削り。	平底。篦削り。		38
U-16G・2	土師坏	(12.0)	(5.1)	①細粒 ②良好 ③橙 ④1/2	やや内湾。篦削り。	丸底。篦削り。		38
U-17G・1	カワラケ	(9.0)	1.7	①細粒 ②良好 ③淡橙 ④1/2	端部外反。轆轤。	平底。右回転糸切痕。		37
U-17G・2	土師坏	12.4	4.2	①中粒 ②良好 ③明赤褐 ④ 4/5	端部内湾。篦削り。	平底。篦削り。		37
U-17G・3	紡錘車	≪① 長(4.0) ② 幅7.2 ③ 厚0.8 ④ 重30 ⑤ 灰褐 ⑥ 土製≫					1/2残存	39
U-17G・4	円盤	≪① 長4.8 ② 幅4.6 ③ 厚0.7 ④ 重18 ⑤ 橙 ⑥ 土製≫						40
U-17G・5	円盤	≪① 長4.2 ② 幅4.7 ③ 厚1.2 ④ 重23 ⑤ にぶい橙 ⑥ 土製≫						40
U-17G・6	臼玉	≪① 長0.6 ② 幅0.6 ③ 厚(0.3) ④ 重0.25 ⑤ 灰白 ⑥ 滑石≫						40
U-17G・7	臼玉	≪① 長0.6 ② 幅0.6 ③ 厚0.3 ④ 重0.25 ⑤ 灰 ⑥ 滑石≫						40
V-17G・1	土師質高台椀	10.2	4.7	①細粒 ②良好 ③灰白 ④ほぼ完形	緩やかに外反。轆轤。	右回転糸切痕。		38
V-17G・2	土師質坏	(13.2)	4.6	①細粒 ②良好 ③灰 ④2/5	やや外反。轆轤。	平底。回転糸切痕。		38
V-17G・3	土師質高台椀	(14.2)	5.6	①細粒 ②良好 ③灰黄 ④2/5	やや外反。轆轤。	右回転糸切痕。	高台部後付け。	38
V-17G・4	カワラケ	(9.6)	2.8	①細粒 ②良好 ③にぶい橙 ④1/3	短く外反。轆轤。	平底。右回転糸切痕。		38
V-17G・5	軒丸瓦	≪① 細粒 ② 良好 ③ 灰白 ④ 1/2 ⑤ 複弁蓮華文、周縁竹管刺突 ⑥ 第4次山王廃寺≫						42
V-18G・1	軒丸瓦	≪① 細粒 ② 良好 ③ オリーブ灰 ④ 1/4 ⑤ 復複弁蓮華文、周縁竹管刺突 ⑥ 第4次山王廃寺≫					瓦当裏面カキヤブリ。	42
W-17G・1	土師質高台椀	14.8	5.5	①細粒 ②良好 ③明緑灰 ④2/3	やや外反。轆轤。	右回転糸切痕。	高台部後付け。	38
W-17G・2	土師質高台椀	(15.3)	5.5	① 細粒②良好 ③灰 ④1/2	端部外反。轆轤。	右回転糸切痕。	高台部後付け。	38
W-18G・1	土師質高台椀	(15.6)	5.3	①細粒 ②良好 ③にぶい黄橙 ④1/2	端部外反。轆轤。	右回転糸切痕。	高台部後付け。	38
W-18G・2	土師質坏	(13.2)	4.0	①細粒 ②良好 ③灰 ④2/5	外反。轆轤。	平底。		38
Y-16G・1	土師質小甕	9.8	11.0	①細粒 ②良好 ③明赤褐 ④完形	やや外反。篦磨き。	平底。篦削り。		38
Z-17G・1	円盤	≪① 長3.9 ② 幅3.8 ③ 厚0.5 ④ 重10 ⑤ にぶい橙 ⑥ 土製≫						40
D－30・1	土師椀	(11.2)	5.7	①細粒 ②良好 ③明黄褐 ④ 1/2	内湾。篦削り。	丸底。篦削り。		39

Tab. 8　29トレンチ遺物観察表（4）

番号	器形	大きさ 口径器高	①胎土 ②焼成 ③色調 ④残存	成・整形方法 口縁・同部	成・整形方法 底部	備考	挿図 (Fig)
D－47・1	土師質坏	(13.0)　3.8	①細粒 ②良好 ③浅黄 ④1/2	短く外反。轆轤。	平底。右回転糸切痕。		39
D－51・1	土師坏	12.2　5.2	①細粒 ②良好 ③橙 ④ほぼ完形	内湾。暗文状磨き。	丸底。篦削り。		39
D－92・1	カワラケ	(9.6)　2.7	①細粒 ②良好 ③にぶい橙 ④1/2	端部外反。轆轤。	平底。		39
D－93・1	土師甕	14.0 (15.2)	①粗粒 ②不良 ③浅黄橙 ④1/2	やや外反。篦削り。	底部欠損。		39
D－97・1	土師質坏	9.7　3.3	①細粒 ②良好 ③灰白 ④1/3	緩やかに内湾。轆轤。	平底。		39
I－3・1	高台皿	11.5　2.6	①細粒 ②良好 ③灰白 ④3/5	端部外反。轆轤。	回転調整。高台欠損。	施釉。磁器。	39
I－3・2	カワラケ	(8.4)　2.5	①細粒 ②良好 ③浅黄橙 ④1/4	端部外反。轆轤。	平底。		39
I－3・3	五輪塔	≪① 空風輪　② 上幅17.2　③ 下幅12.5　④ 高28.8　⑤ 重6,200　⑥ オリーブ黒　⑦ 粗粒安山岩≫					41
I-3・フク土1	石臼	≪① 長(15.5)　② 幅(9.3)　③ 厚(13.3)　④ 重1,800　⑤ 暗灰黄　⑥ 粗粒安山岩≫					40
I-3・フク土2	石臼	≪① 長(31.6)　② 幅33.9　③ 厚10.9　④ 重15,400　⑤ 緑灰　⑥ 粗粒安山岩≫					40
I-3・フク土3	石臼	≪① 長31.1　② 幅31.4　③ 厚8.3　④ 重11,600　⑤ 暗青灰　⑥ 粗粒安山岩≫					40
I-3・フク土4	石臼	≪① 長31.7幅　② 32.0　③ 厚6.7　④ 重9,500　⑤ 緑灰　⑥ 粗粒安山岩≫					41
I-3・フク土5	石臼	≪① 長(12.1)　② 幅(14.6)　③ 厚7.4　④ 重1,500　⑤ 灰オリ-ブ　⑥ 粗粒安山岩≫					41
I-3・フク土6	石臼	≪① 長(16.6)　② 幅(30.3)　③ 厚13.3　④ 重6,600　⑤ 浅黄　⑥ 粗粒安山岩≫					41
I-3・フク土7	五輪塔	≪① 空風輪　② 上幅15.0　③ 下幅(11.0)　④ 高(19.7)　⑤ 重3,800　⑥ 暗緑灰　⑦ 粗粒安山岩≫					41
I-3・フク土8	五輪塔	≪① 火輪　② 上幅10.6　③ 下幅16.5　④ 高11.4　⑤ 重4,000　⑥ 明オリ-ブ灰　⑦ 粗粒安山岩≫					41
I-3・フク土9	五輪塔	≪① 火輪　② 上幅15.3　③ 下幅32.4　④ 高17.7　⑤ 重16,500　⑥ 灰オリ-ブ　⑦ 粗粒安山岩≫					41
I-3・フク土10	五輪塔	≪① 火輪　② 上幅11.7　③ 下幅18.9　④ 高11.1　⑤ 重5,800　⑥ 黄灰　⑦ 粗粒安山岩≫					42
I-3・フク土11	五輪塔	≪① 水輪　② 長12.8　③ 幅19.8　④ 厚13.5　⑤ 重1,900　⑥ 灰オリーブ　⑦ 粗粒安山岩≫					41
W－1・1	古銭	≪① 寛永通寶　② 銅　③ 江戸　④ 不明　⑤ 対　⑥ 楷　⑦ 2.22　⑧ 1.82　⑨ 1.98≫				背文無し。	42
W－1・2	古銭	≪① 不明　② 銅　③ 不明　④ 不明　⑤ 不明　⑥ 不明　⑦ 2.42　⑧ 不明　⑨ 1.95≫				腐食。一部欠損。	42
W－1・3	円盤	≪① 長3.9　② 幅3.9　③ 厚0.6　④ 重14.1　⑤ 灰黄　⑥ 土製≫					42
W－1・4	くぼみ石	≪① 長9.0　② 幅9.0　③ 厚3.8　④ 重272　⑤ 黒褐　⑥ 粗粒安山岩≫					40
W－2・1	小皿	(9.8)　1.9	①細粒 ②良好 ③明赤褐 ④1/2	やや外反。轆轤。	平底。回転調整。	施釉。	39
W－2・2	茶椀	11.0　5.0	①細粒 ②良好 ③明緑灰 ④2/3	緩やかに内湾。轆轤。	回転調整。	唐津焼。	39
W－2・3	古銭	≪① 聖宋元寶　② 銅　③ 江戸　④ 不明　⑤ 廻　⑥ 行　⑦ 2.35　⑧ 1.78　⑨ 3.35≫				背文無し。	42
W－2・4	古銭	≪① 寛永通寶　② 銅　③ 江戸　④ 不明　⑤ 対　⑥ 楷　⑦ 2.28　⑧ 1.92　⑨ 2.10≫				背文無し。歪み持つ。	42
W－2・5	古銭	≪① 元豊通寶　② 銅　③ 北宋　④ 1078　⑤ 廻　⑥ 行　⑦ 2.38　⑧ 1.82　⑨ 2.20≫				背文無し。	42
W－2・6	円盤	≪① 長3.7　② 幅3.8　③ 厚0.8　④ 重14.0　⑤ 明赤褐　⑥ 土製≫					40
W－2・7	円盤	≪① 長(4.8)　② 幅5.5　③ 厚0.8　④ 重26.9　⑤ 明黄褐　⑥ 土製≫					40
W－2・8	円盤	≪① 長3.2　② 幅3.2　③ 厚0.7　④ 重9.1　⑤ 明褐　⑥ 土製≫					40
W－2・9	円盤	≪① 長3.4　② 幅3.9　③ 厚0.8　③ 重13.4　④ 明赤褐　⑤ 土製≫					40
W－2・10	砥石	≪① 長(7.8)　② 幅3.8　③ 厚2.5　④ 重105.4　⑤ にぶい黄　⑥ 流紋岩≫					40
W－3・1	坏	13.4　4.0	①細粒 ②良好 ③にぶい黄橙 ④4/5	やや外反。轆轤。	平底。右回転糸切痕。		39
W－3・2	高台椀	12.8　3.4	①細粒 ②良好 ③灰白 ④1/2	直線的に外反。轆轤。	回転糸切痕。		39
W－3・3	石製模造品	≪① 長3.3　② 幅(2.8)　③ 厚0.4　④ 重7.4　⑤ 灰白　⑥ 滑石≫					40
29トレ・フク土1	古銭	≪① 元？　② 銅　③ 不明　③ 不明　④ 廻　⑤ 行　⑥ 2.38　⑦ 2.12　⑧ 1.40≫				背文無し。1/2欠損。	42
29トレ・フク土2	古銭	≪① 寛永通寶　② 銅　③ 江戸　④ 不明　⑤ 対　⑥ 楷　⑦ 2.38　⑧ 2.14　⑨ 4.41≫				背文無し。	42
29トレ・フク土3	古銭	≪① 寛永通寶　② 銅　③ 江戸　④ 不明　⑤ 対　⑥ 楷　⑦ 2.45　⑧ 2.10　⑨ 3.21≫				島屋文（通用）	42
29トレ・フク土4	古銭	≪① 寛永通寶　② 銅　③ 江戸　④ 不明　⑤ 対　⑥ 楷　⑦ 2.41　⑧ 2.08　⑨ 2.98≫				背文無し。	42
29トレ・フク土5	古銭	≪① 文久永寶　② 銅　③ 江戸　④ 1863　⑤ 対　⑥ 楷　⑦ 2.62　⑧ 1.98　⑨ 3.42≫				背文不明。	42
29トレ・フク土6	古銭	≪① 5銭白銅貨　② 銅75%・ニッケル25%　③ 明治　④ 明治30年　⑤ 2.01　⑥ 1.92　⑦ 4.58≫					42
29トレ・フク土7	古銭	≪① 寛永通寶　② 銅　③ 江戸　④ 不明　⑤ 対　⑥ 楷　⑦ 2.22　⑧ 1.72　⑨ 2.48≫				背文無し。	42
29トレ・フク土8	円盤	≪① 長4.0　② 幅4.0　③ 厚0.7　④ 重13.6　⑤ 明赤褐　⑥ 土製≫					40
29トレ・フク土9	砥石	≪① 長(7.8)　② 幅2.9　③ 厚2.7　④ 重81.0　⑤ 明黄褐　⑥ 流紋岩≫					40
29トレ・フク土10	小皿	(10.1)　2.1	①細粒 ②良好 ③にぶい赤褐 ④1/2	端部内湾。轆轤。	平底。回転調整。		39
29トレ・フク土11	坏	(9.0)　2.6	①細粒 ②良好 ③浅黄橙 ④1/2	直線的に外反。轆轤。	平底。右回転糸切痕。		39
29トレ・フク土12	高台椀	(18.0)(6.0)	①細粒 ②良好 ③にぶい黄橙 ④1/2	端部やや外反。轆轤。	回転糸切痕。		39
29トレ・フク土13	土師坏	(12.6)　4.5	①細粒 ②良好 ③橙 ④1/2	直立気味に外反。篦削り	丸底。篦削り。		39

Tab. 9　Zトレンチ遺物観察表（1）

番号	器形	大きさ 口径・器高	①胎土 ②焼成 ③色調 ④残存	成・整形方法 口縁・胴部	成・整形方法 底部	備考	挿図 (Fig)
H-1・フク土	土師質坏	(15.0)　4.0	①中粒 ②良好 ③浅黄橙 ④1/2	やや外反。轆轤。	平底。右回転糸切痕。		43
H－1・18	羽釜	(28.4)(15.5)	①細粒②良好③にぶい褐④口縁部1/3	大きく内湾。轆轤。	底部欠損。		43
H－2・8	土師質坏	14.4　4.8	①中粒②良好③にぶい橙④ほぼ完形	直線的に外傾。轆轤。	平底。右回転糸切痕。		43
H－2・48	カワラケ	9.4　2.3	①細粒 ②良好 ③浅黄橙 ④完形	やや外反。轆轤。	平底。右回転糸切痕。		43
H－2・9	土師質坏	15.4　5.1	①中粒 ②良好 ③にぶい黄橙④2/3	緩やかに外反。轆轤。	平底。右回転糸切痕。		43
H－2・89	土師質坏	(15.8)　5.4	①細粒 ②良好 ③橙 ④1/2	直線的に外傾。轆轤。	平底。右回転糸切痕。		43
H－2・49	カワラケ	9.0　1.9	①細粒 ②良好 ③にぶい橙 ④完形	短く外反。轆轤。	平底。右回転糸切痕。		43
H－2・11	砥石	≪ ① 長6.2　② 幅2.9　③ 厚2.1　④ 重70　⑤ 灰白　⑥ かんらん岩≫			欠損（3面使用。）		51
H-5・フク土	土師質坏	(15.0)　5.5	①細粒②良好③にぶい黄橙④1/2	直線的に外傾。轆轤。	平底。右回転糸切痕。		43
H－5・1、3	土師質坏	(14.6)　4.5	①中粒 ②良好 ③浅黄橙④3/5	直線的に外傾。轆轤。	平底。右回転糸切痕。		3
H－6・253	カワラケ	8.2　1.6	①細粒②良好 ③橙④完形	短く外傾。轆轤。	平底。右回転糸切痕。		43
H－6・220	砥石	≪ ① 長9.3　② 幅2.7　③ 厚2.1　④ 重71.6　⑤ 灰白　⑥ 流紋岩≫			欠損（4面使用。）		51
H－6・146	瓦器甕		①細粒 ②良好 ③緑灰 ④破片			篦書模様『葉』。	45
H－7・21	土師質坏	(10.4)　2.2	①中粒 ②良好 ③橙 ④2/3	やや外反。轆轤。	平底。右回転糸切痕。		43
H－7・3、4、	土師質甕	(22.7)(19.5)	①中粒②良好③にぶい黄橙④口縁部1/7	端部外反。篦削り。	底部欠損。		44
H－8・59	カワラケ	8.8　2.1	①細粒 ②良好 ③にぶい黄橙 ④ほぼ完形	短く外傾。轆轤	平底。右回転糸切痕。		43
H－8・19	土師壺	(11.5) 11.0	①細粒 ②良好③橙 ④1/4	口縁部欠損。篦削り。	平底。篦削り。	内面黒色。	45
H-8・フク土	円盤	≪長4.1　幅3.6　厚0.7　重8.9≫　① 明黄褐　② 土製（土師質土器の底部利用。）					51
H-8・フク土	削器	≪長2.7　幅2.2　厚0.3　重2.6≫　安赤　チャート				混入遺物。	51
H－10・133	カワラケ	8.8　2.0	①細粒 ②良好 ③浅黄橙 ④完形	短く外傾。轆轤。	平底。右回転糸切痕。		43
H－10・172	カワラケ	8.8　2.0	①細粒 ②良好 ③明褐灰 ④完形	短く外傾。轆轤。	平底。右回転糸切痕。	内面油煙付着。	43
H－10・71	土師質坏	14.4　4.3	①細粒 ②良好 ③灰白 ④ほぼ完形	口縁部やや外反。轆轤。	平底。右回転糸切痕。		44
H－10・72	土師質坏	14.6　3.7	①細粒 ②極良 ③にぶい橙 ④2/3	やや外反。轆轤。	平底。右回転糸切痕。		44
H－10・52	土師質羽釜	(28.8) 15.5	①中粒②良好③にぶい橙④口縁部1/2	緩やかに内湾。篦削り	底部欠損。		46
H－10・55	平瓦	≪ ① 中粒　② 良好　③ にぶい褐　④ 小片　⑤ 外面縄叩き。内面布面痕。≫					50
H－11・27	土師質坏	14.4　4.5	①中粒②良好③にぶい橙④ほぼ完形	口縁部やや外反。轆轤	平底。右回転糸切痕。		44
H－12・30	カワラケ	8.6　1.8	①細粒 ②良好 ③浅黄橙 ④完形	直線的に外傾。轆轤。	平底。右回転糸切痕。		44
H－12・42	土師質坏	(14.4)　4.1	①細粒 ②良好 ③淡橙 ④2/3	外傾。轆轤。	平底。右回転糸切痕。		44
H－12・45	土師質高台椀	(15.2)　6.2	①細粒 ②良好 ③浅黄橙 ④2/3	外傾。轆轤。	回転糸切痕。		44
H－12・43	カワラケ	8.4　2.1	①細粒 ②良好 ③にぶい橙 ④完形	短く外傾。轆轤。	平底。右回転糸切痕。		44
H－12・44	カワラケ	8.6　1.8	①細粒②良好③浅黄橙④ほぼ完形	短く外傾。轆轤。	平底。右回転糸切痕。		44
H－12・60	土師質坏	(14.8)　3.5	①細粒 ②良好 ③浅黄橙 ④2/3	外反。轆轤。	平底。右回転糸切痕。		44
H－12・61	土師質坏	(15.2)　4.5	①細粒 ②良好 ③浅黄橙 ④2/3	口縁部外反。轆轤。	平底。右回転糸切痕。	口縁部に炭化物付着	44
H－12・46	カワラケ	9.0　2.0	①細粒②良好③浅黄橙④ほぼ完形	短く外傾。轆轤。	平底。右回転糸切痕。		44
H－12・48	カワラケ	8.6　1.7	①細粒②極良③浅黄橙④ほぼ完形	口縁部外反。轆轤。	平底。右回転糸切痕。		44
H－12・65	カワラケ	8.7　1.8	①中粒 ②良好 ③橙 ④ほぼ完形	短く外傾。轆轤。	平底。右回転糸切痕。		44
H－12・84	土師質坏	(14.6)　4.0	①細粒②良好③浅黄橙④ほぼ完形	端部外反。轆轤。	平底。右回転糸切痕。		45
H－12・96	土師質坏	(12.6)　3.8	①細粒 ②極良 ③橙 ④2/3	直線的に外傾。轆轤。	平底。右回転糸切痕。		45
H－12・205	カワラケ	(9.0)　2.1	①中粒 ②不良 ③浅黄橙 ④2/3	口縁部やや外反。轆轤	平底。右回転糸切痕。		45
H－12・97	土師質坏	14.9　4.4	①細粒 ②良好 ③明赤褐 ④2/3	口縁部外反。轆轤。	平底。右回転糸切痕。		45
H－12・98	土師質坏	(15.2)　4.2	①細粒 ②良好 ③明褐灰 ④1/3	やや外傾。轆轤。	平底。右回転糸切痕。	内面を黒色処理。	45
H－12・100	土師質坏	(14.0)　3.7	①細粒 ②極良 ③にぶい橙 ④3/4	端部やや外反。轆轤。	平底。右回転糸切痕。		45
H－12・106	土師質坏	(15.0)　4.2	①中粒②良好③浅黄橙④ほぼ完形	外反。轆轤。	平底。回転糸切痕。	口縁部に炭化物付着	45
H－12・230	カワラケ	9.2　1.8	①細粒 ②良好 ③灰白 ④完形	短く外傾。轆轤。	平底。右回転糸切痕。		45
H－12・206	カワラケ	(8.8)　1.8	①粗粒 ②良好 ③橙 ④3/4	短く外傾。轆轤。	平底。右回転糸切痕。		45
H－12・229	カワラケ	(8.4)　1.8	①細粒②良好③浅黄橙④ほぼ完形	短く外傾。轆轤。	平底。右回転糸切痕。		45
H－12・115	土師質坏	15.2　4.5	①細粒 ②良好 ③淡橙 ④4/5	外傾。轆轤。	平底。右回転糸切痕。		45
H－12・144	土師椀	(13.6)　7.0	①中粒②不良③にぶい黄橙④4/5	ほぼ直立。篦削り。	平底。篦削り。	作りが雑。	45
H－12・39	平瓦	≪ ① 細粒　② 良好　③ オリーブ灰　④ 小片　⑤ 外面撫で。内面撫で。格子目の叩。≫					50
H-12・フク土	石製模造品	≪ ① 長2.7　② 幅2.2　③ 厚0.3　④ 重2.6　⑤ 褐灰　⑥ 滑石≫ 剣形。双孔だが1孔は未通。欠損					51

Tab. 10　Zトレンチ遺物観察表（2）

番号	器形	大きさ 口径・器高	①胎土 ②焼成 ③色調 ④残存	成・整形方法 口縁・胴部	成・整形方法 底部	備考	挿図 (Fig)
H－12・235	カワラケ	9.0　2.0	①細粒 ②良好 ③淡赤橙 ④4/5	短く外傾。轆轤。	平底。右回転糸切痕。		45
H－12・138	土師質坏	(14.2)　4.4	①細粒 ②良好 ③淡黄 ④2/3	直線的に外反。轆轤。	平底。右回転糸切痕。		46
H－12・143	土師質坏	(14.0)　3.6	①細粒 ②良好 ③にぶい橙 ④2/3	端部外反。轆轤。	平底。右回転糸切痕。		46
H－12・305	カワラケ	9.2　2.3	①細粒 ②良好 ③灰白 ④ほぼ完形	口縁部外反。轆轤。	平底。右回転糸切痕。		46
H－12・306	カワラケ	9.4　2.5	①細粒 ②良好 ③浅黄 ④ほぼ完形	口縁部外反。轆轤。	平底。右回転糸切痕。		46
H－12・139	土師質坏	(15.2)　4.3	①細粒 ②良好 ③浅黄橙 ④3/4	端部外反。稜有す。轆轤	平底。右回転糸切痕。	炭化物付着。	46
H－12・204	土師質坏	(14.4)　3.8	①細粒 ②良好③にぶい黄橙 ④2/3	端部外反。轆轤。	平底。右回転糸切痕。		46
H－12・184	土師質坏	(14.0)　3.9	①細粒 ②良好 ③灰白 ④2/3	端部外反。轆轤。	平底。右回転糸切痕。	内面に炭化物付着。	46
H－12・192	土師質坏	(14.6)　3.9	①細粒 ②良好 ③浅黄橙 ④2/3	端部外反。轆轤。	平底。右回転糸切痕。		46
H－12・220	土師質坏	14.0　4.2	①粗粒②良好③にぶい橙④ほぼ完形	端部外反。轆轤。	平底。右回転糸切痕。	内面に炭化物付着。	46
H－12・265	土師質坏	14.8　4.4	①中粒 ②良好 ③橙 ④完形	直線的に外傾。轆轤。	平底。右回転糸切痕。	口縁部に炭化物付着	47
H－16・1、2	土師質坏	(15.2)　4.3	①細粒②極良③にぶい黄橙④2/3	外傾。轆轤。	平底。右回転糸切痕。		47
H－17・21	土師質坏	14.2　5.0	①細粒 ②良好 ③黄橙 ④完形	端部外反。轆轤	平底。右回転糸切痕。	口縁部に炭化物付着	47
H－17・7	土師質羽釜	(30.6)(11.1)	①細粒 ②良好 ③橙 ④口縁部1/10	緩やかに内湾。箆削り。	轆轤。底部欠損。		47
D－8・5	土師質坏	－　(4.0)	①細粒②良好③にぶい黄橙④1/2	口縁部欠損。轆轤。	平底。右回転糸切痕。		47
D－13・12	くぼみ石	≪① 長15.7　② 幅13.6　③ 厚4.0　④ 重1500　⑤ 黒褐　⑥ 粗粒安山岩≫				ほぼ完形	51
D－15・15	カワラケ	(7.6)　8.1	①細粒 ②良好 ③橙 ④2/3	口縁部外反。轆轤。	平底。右回転糸切痕。		46
D-17・フク土	カワラケ	(8.6)　2.0	①粗粒 ②不良 ③にぶい橙 ④1/2	短く外傾。轆轤。	平底。右回転糸切痕。		46
D－18・10	カワラケ	(8.6)　2.0	①中粒 ②良好 ③浅黄橙 ④1/2	短く外反。轆轤。	平底。右回転糸切痕。		46
D-18・フク土	土師質坏	(14.8)　5.1	①細粒 ②良好 ③淡黄 ④1/2	外傾。轆轤。	平底。右回転糸切痕。	D-18・2、4と接合する	47
D-18・フク土	土師質坏	(15.6)　4.2	①中粒 ②良好 ③浅黄橙 ④2/3	端部やや外反。轆轤。	平底。右回転糸切痕。	D-18・1、7と接合する	47
O-34G・11	カワラケ	8.2　2.2	①細粒②良好③浅黄橙④ほぼ完形	短く外傾。轆轤。	平底。右回転糸切痕。	口縁部に歪み。	46
P-32G・フク土	丸瓦	≪① 中粒　② 良好　③ 褐灰　④ 小片　⑤ 外面撫で。内面布目痕。≫					50
P－33G・16	円盤	≪① 長5.2　② 幅5.2　③ 厚1.1　④ 重35.8　⑤ にぶい褐　⑥ 土製≫（土師質土器の底部を利用。）				完形	51
P－33G・55	カワラケ	8.2　1.8	①細粒 ②良好 ③橙 ④完形	短く外傾。轆轤。	平底。右回転糸切。	二次焼成あり。	46
P－33G・59	土師質高台椀	(8.8)　3.7	①細粒 ②良好 ③橙 ④2/3	口縁部外反。轆轤。	回転糸切後撫で調整。		47
P－34G・84	土師質羽釜	(28.4)(22.0)	①中粒 ②良好 ③橙 ④1/6	緩やかに内湾。箆削り。	底部欠損。		48
P－34G・97	カワラケ	(9.0)　2.3	①細粒②極良③にぶい黄橙④2/3	短く外傾。轆轤。	平底。右回転糸切痕。		47
P－34G・98	カワラケ	(8.6)　2.2	①細粒 ②極良 ③浅黄橙 ④4/5	やや外反。轆轤。	平底。右回転糸切痕。		47
P－35G・72	カワラケ	8.8　2.1	①中粒 ②良好 ③橙 ④完形	短く外傾。轆轤。	平底。右回転糸切痕。		47
P－35G・54	土師質坏	(14.0)　3.8	①中粒 ②良好 ③にぶい橙 ④3/4	端部外反。轆轤。	平底。右回転糸切痕。	口縁部炭化物付着。	47
P－35G・91	土師質坏	14.0　3.5	①細粒②極良③浅黄橙④ほぼ完形	端部外反。轆轤。	平底。右回転糸切痕。		48
P－35G・96	土師質坏	(16.2)　3.7	①細粒 ②良好 ③浅黄橙 ④2/3	外傾。轆轤。	平底。右回転糸切痕。		48
P-38G・フク土	軒丸瓦	≪① 中粒　② 良好　③ にぶい黄橙　④ 小片　⑤ 外面撫で。内面布目痕。≫					50
Q-30G・フク土	平瓦	≪① 中粒　② 良好　③ 明緑灰　④ 小片　⑤ 外面縄叩き。内面布目痕。≫					50
Q－32G・2	平瓦	≪① 細粒　② 良好　③ 灰オリーブ　④ 小片　⑤ 外面縄叩き。内面布目痕。≫					50
Q－32G・6	カワラケ	9.6　2.2	①中粒 ②良好 ③淡黄 ④　完形	やや内湾。轆轤。	平底。右回転糸切痕。		47
Q-33G・37	土師質坏	(13.4)　4.6	①細粒 ②良好 ③橙 ④1/5	外傾。稜有す。轆轤。	平底。右回転糸切痕。		48
Q-33G・フク土	砥石	≪① 長8.1　② 幅3.9　③ 厚3.4　④ 重170　⑤ 灰白　⑥ 流紋岩≫				欠損（4面使用。）	51
Q－34G・38	円盤	≪① 長3.6　② 幅5.0　③ 厚1.2　④ 重24.8　④ にぶい黄橙　⑤ 土製≫					51
Q-34G・149	丸瓦	≪① 中粒　② 良好　③ 暗青灰　④ 小片　⑤ 外面撫で。内面布目痕。				箆書文字判読不能。	51
Q-34G・255	カワラケ	9.8　2.4	①細粒②良好③浅黄橙④ほぼ完形	直線的に外反。轆轤。	平底。右回転糸切痕。		48
Q-34G・256	土師質坏	(14.8)　3.8	①細粒 ②極良 ③橙 ④2/3	端部外反。轆轤。	平底。右回転糸切痕。		48
Q-34G・262	須恵椀	14.2　5.2	①細粒 ②極良 ③灰白 ④完形	外傾。轆轤。	右回転糸切痕。		48
Q-34G・フク土	須恵坏		①細粒②極良③灰白④口縁部一部	赤色塗彩。			47
Q－35G・6	紡錘車	≪① 長5.9　② 幅5.8　③ 厚1.0　④ 重36　⑤ 灰白　⑥ 土製≫（土師質土器の底部転用。全周研磨。）					51
Q-35G・フク土	土師質高台椀	5.3　3.6	①細粒 ②良好 ③橙 ④1/3	外傾。轆轤。	高台部一部欠損。		47
R-31G・フク土	平瓦	≪① 細粒　② 良好　③ 灰黄　④ 小片　⑤ 外面縄叩き。内面布面痕。				箆書『七』か。	51
R－33G・3	砥石	≪① 長6.0　② 幅2.6　③ 厚1.5　④ 重40　⑤ 灰白　⑥ 流紋岩≫				欠損（4面使用。）	51
R-33G・10	瓦器脚付焙烙	(8.2)　5.2	①細粒 ②良好 ③にぶい赤褐 ④1/4	緩やかに内湾。箆削り。	突出した脚を有す。		49

Tab. 11　Zトレンチ遺物観察表（3）

番号	器形	大きさ 口径・器高	①胎土 ②焼成 ③色調 ④残存	成・整形方法 口縁・胴部	成・整形方法 底部	備考	挿図 (fig.)
R-33G・24	砥石	≪ ① 長4.6	② 幅30 ③ 厚1.3 ④ 重34 ⑤ 灰白 ⑥ 流紋岩≫		欠損（4面使用。）		51
R-33G・26	砥石	≪ ① 長14.3	② 幅3.1 ③ 厚3.6 ④ 重266 ⑤ 灰白 ⑥ 流紋岩≫		欠損（4面使用。）		51
R-34G・フク土	砥石	≪ ① 長11.3	② 幅3.1 ③ 厚3.5 ④ 重202 ⑤ 灰白 ⑥ 流紋岩≫		欠損（2面使用。）		51
Zトレ・1	土師質坏	14.8　4.6	①細粒 ②良好 ③淡黄 ④完形	直線的に外傾。轆轤。	平底。右回転糸切痕。		48
Zトレ・2	土師質脚部	－　－	①細粒②良好③にぶい橙④脚部のみ		回転糸切後調整。		48
Zトレ・3	カワラケ	9.1　1.5	①中粒 ②良好 ③浅黄橙 ④完形	やや内湾。轆轤。	平底。右回転糸切痕。		48
Zトレ・6	土師質坏	(16.2)　4.7	①細粒 ②良好 ③にぶい橙 ④1/2	口縁部外反。轆轤。	平底。回転糸切痕。		49
Zトレ・26	平瓦	≪ ① 細粒 ② 良好 ③ 黄灰 ④ 小片 ⑤ 外面縄叩き。内面布目痕。≫				篦書文字判読不能。	51
Zトレ・27	須恵椀	(10.0)　3.6	①細粒②良好③にぶい黄橙④4/5	外傾。轆轤。	回転糸切後撫で調整。	炭化物付着。	48
Zトレ・29	カワラケ	7.9　2.5	①中粒 ②良好 ③橙 ④ほぼ完形	口縁部外反。轆轤。	平底。右回転糸切痕。		48
Zトレ・30	カワラケ	9.2　1.9	①細粒 ②良好 ③橙 ④完形	短く外傾。轆轤。	平底。右回転糸切痕。		48
Zトレ・32	土師質坏	14.6　4.3	①細粒 ②良好 ③にぶい橙 ④4/5	端部外反。轆轤。	平底。右回転糸切痕。		49
Zトレ・57	カワラケ	10.0　2.8	①中粒 ②良好 ③にぶい橙 ④完形	外傾。轆轤。	平底。右回転糸切痕。		48
Zトレ・70	灰釉椀	(13.0)　3.8	①細粒 ②極良 ③灰白 ④1/2	外傾。轆轤。	右回転糸切痕。		49
Zトレ・79	カワラケ	9.2　2.0	①細粒 ②良好 ③にぶい黄橙 ④ほぼ完形	口縁部外反。轆轤。	平底。右回転糸切痕。		49
Zトレ・80	土師質坏	13.0　5.2	①細粒②良好③浅黄橙④ほぼ完形	やや外傾。轆轤。	平底。右回転糸切痕。	口縁部に炭化物付着	49
Zトレ・81	カワラケ	(9.1)　2.2	①中粒 ②良好 ③淡黄 ④2/3	短く外傾。轆轤。	平底。右回転糸切痕。		49
Zトレ・82	カワラケ	8.2　1.9	①細粒②良好③浅黄橙④ほぼ完形	短く外傾。轆轤。	平底。右回転糸切痕。		49
Zトレ・92	土師質坏	(16.0)　4.2	①細粒 ②良好 ③浅黄橙 ④2/3	直線的に外反。轆轤。	平底。右回転糸切痕。		49
Zトレ・93	土師甕	(29.4)(14.0)	①中粒②良好③にぶい赤褐 ④口縁部1/8	口縁部外反。篦削り。	底部欠損。		49
Zトレ・95	カワラケ	(10.0)　2.8	①細粒 ②良好 ③灰白 ④2/3	緩やかに内湾。轆轤。	平底。右回転糸切痕。		49
Zトレ・101	カワラケ	8.6　2.1	①細粒 ②極良 ③橙 ④完形	短く外傾。轆轤。	平底。右回転糸切痕。		50
Zトレ・114	平瓦	≪ ① 細粒 ② 良好 ③ オリ-ブ灰 ④ 小片 ⑤ 外面縄叩き。内面布目痕。≫					50
Zトレ・125	カワラケ	9.6　1.8	①細粒 ②良好 ③淡橙 ④完形	直線的に外反。轆轤。	平底。右回転糸切痕。		49
Zトレ・126	カワラケ	8.8　1.7	①粗粒 ②不良 ③浅黄 ④ほぼ完形	短く外傾。轆轤。	回転糸切後篦調整。		49
Zトレ・127	カワラケ	9.5　1.9	①中粒 ②良好 ③にぶい橙 ④完形	短く内湾。轆轤。	平底。右回転糸切痕。		50
Zトレ・143	土師質坏	15.3　4.8	①細粒 ②良好 ③浅黄橙 ④完形	直線的に外反。轆轤。	平底。右回転糸切痕。	炭化物付着。	49
Zトレ・表採	灰釉椀	(11.2)　3.7	①細粒 ②良好 ③灰白 ④2/3	口縁部外反。轆轤。	右回転糸切後撫で調整		49
Zトレ・フク土1	カワラケ	9.9　2.2	①中粒 ②良好 ③淡黄 ④完形	やや内湾。轆轤。	平底。右回転糸切痕。		50
Zトレ・フク土2	カワラケ	9.4　2.2	①細粒 ②良好 ③浅黄橙 ④完形	やや内湾。轆轤。	平底。右回転糸切痕。		50
Zトレ・フク土3	カワラケ	9.6　2.2	①細粒②良好③にぶい黄橙④2/3	短く外反。轆轤。	平底。右回転糸切痕。		50
Zトレ・フク土4	カワラケ	9.4　2.1	①細粒②良好③にぶい赤褐④4/5	口縁部外反。轆轤。	平底。左回転糸切痕。		50
Zトレ・フク土5	土師質高台皿	10.0　3.5	①細粒②良好③浅黄橙④ほぼ完形	直線的に外傾。轆轤。	回転糸切後撫で調整。		50
Zトレ・フク土6	瓦器鉢	(34.0)　9.2	①中粒 ②良好 ③黒褐 ④1/6	口縁部外傾。内面に稜有す。			50

Tab. 12　元総社明神遺跡出土白磁観察表

通番	出土地点・登録番号	種類・器種	部位	時期	産地	器形・技法の特徴など
1	Z	白磁碗	口縁部～体部	11世紀後半～12世紀前半（北宋後半代）	中国	口縁部は中型の玉縁。胎土中に黒色粒子を少量含む。胎土はガラス質でわずかに灰色味を帯びる。
2	Z	白磁碗	口縁部～体部下位	11世紀後半～12世紀前半（北宋後半代）	中国	口縁部は内湾し、内面に片切り彫りで文様を施す。体部外面中位以下は回転ヘラ削り。外面下部は露体。内外面共に使用によると思われるスリキズが著しい。胎土はガラス質で灰色味を帯びる。
3	Z・Q－33G	白磁碗	口縁部	11世紀末～12世紀前半？（北宋後半代？）	中国	体部は内湾し、口縁部は小さく外反する。外面口縁部以下は回転ヘラ削り。胎土は白色で、黒色粒子をわずかに含む。口縁部にスリキズが認められる。
4	Z	白磁碗	口縁部	11世紀後半～12世紀前半（北宋後半代）	中国	口縁部は中型の玉緑。胎土はやや粗く、黒色粒子を含む。釉はオリーブ灰色に近く、貫入が著しい。
5	Z	白磁碗	口縁部	11世紀後半～12世紀前半（北宋後半代）	中国	口縁端は中型の玉緑。玉緑の折り返し部分に小孔がある。全面に貫入が入る。
6	Z・D－2	白磁皿？	口縁部	11世紀後半～12世紀前半（北宋後半代？）	中国	器壁は薄く、わずかに内湾する。内面に螺旋状もしくは雲状の文様を施す。全面に貫入が入る。
7	Z・Q－30G	白磁碗	体部下位	11世紀後半～12世紀前半（北宋後半代）	中国	胎土は白色ガラス質で黒色粒子を含む。全面に貫入が入る。
8	Z・Q－30G	白磁碗	体部下位	11世紀後半～12世紀前半（北宋後半代）	中国	胎土は緻密で灰色味を帯びる。外面にヘラによる片切り彫りで、文様を施す。博多分類のO　類と思われる。
9	Z・Q－34G	白磁碗	体部下位	11世紀後半～12世紀前半（北宋後半代）	中国	外面は回転ヘラ削り。胎土はガラス質であるがやや粗い。
10	Z・P－35G	白磁皿？	体部	11世紀後半～12世紀前半（北宋後半代）	中国	胎土や釉の特徴は6番と一致する。6番と同一個体か。
11	Z	白磁碗	体部	11世紀後半～12世紀前半（北宋後半代）	中国	外面は回転ヘラ削り。胎土は白色で黒色粒子を含む。
12	Z	白磁皿？	体部下位	11世紀後半～12世紀前半？（北宋後半代）	中国	外面下部は露胎。胎土は部分的にクリーム色を呈し、磁化していない。全面に貫入が入る。
13	Z・P－30G	白磁碗	底部	11世紀後半～12世紀前半（北宋後半代）	中国	外面は無釉。胎土はガラス質で灰色味を帯びる。釉にはスリキズが認められる。
14	Z・P－33G	白磁碗	底部	11世紀後半～12世紀前半（北宋後半代）	中国	胎土、釉調の特徴は13番と一致する。13番と同一個体か。
15	29・N－11G 295	白磁碗	体部下位	11世紀後半～12世紀前半（北宋後半代）	中国	底部周縁に片切りの圏線をめぐらす。土はわずかにクリーム色を呈し、あまり磁化していない。全面に貫入が入る。

Tab.13　元総社明神遺跡出土緑釉陶器観察表

通番	出土地点・登録番号	種類・器種	部位	器形・技法の特徴など
1	29・G－13G	緑釉皿	底部	外面回転ヘラ削り。内面はヘラ磨きを行わない。胎土は灰色でやや硬質。釉は黄色味を帯びる。
2	29・N－11G 79	緑釉輪花椀	体部	外面は回転横撫で。内面はヘラ磨き。外面から内面に押えた輪花を有する。胎土は鋭い褐色。釉は濃い緑色。
3	29・N－11G 212	緑釉椀	体部下位	外面下位は回転ヘラ削り。胎土に白色鉱物粒と黒色粒子を含む。胎土、釉調は6番に似ている。
4	29・H－40 31	緑釉椀	底部	底部内面はヘラ磨き。高台端部に、凹線をめぐらす。高台内に目痕1つ残る。胎土は灰色。釉はきれいな緑色。
5	29・H－13 24	緑釉椀	底部	高台端部に凹線をめぐらす。高台内に糸切り痕が残る。底部内面に圏線をめぐらす。底部内面と高台端部は使用により摩滅する。
6	29・N－11G 1	緑釉手付瓶	取手	取手部分の小片で、胎土は灰色で硬質。釉は濃い緑色。
7	29・N－11G 354	緑釉瓶	体部	内面は無釉。胎土は鈍い橙色。釉は濃い緑色。

註）1．上記の観察表は、（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団　大西雅広氏の観察に基づいて作成した。
2．Zトレンチは平成元年度の調査区であるが、元総社明神遺跡Ⅷ作成時整理途中であったため本書に掲載した。
3．緑釉陶器は、29トレンチより21点検出した。上記の観察表および図版には、7点を掲載した。

器種	出土点数	実測点数	備考
碗	10	4	うち1点は輪花椀
皿	1	1	
瓶類体部片	3	1	総て同一個体か
手付瓶	1	1	
不祥	6	0	

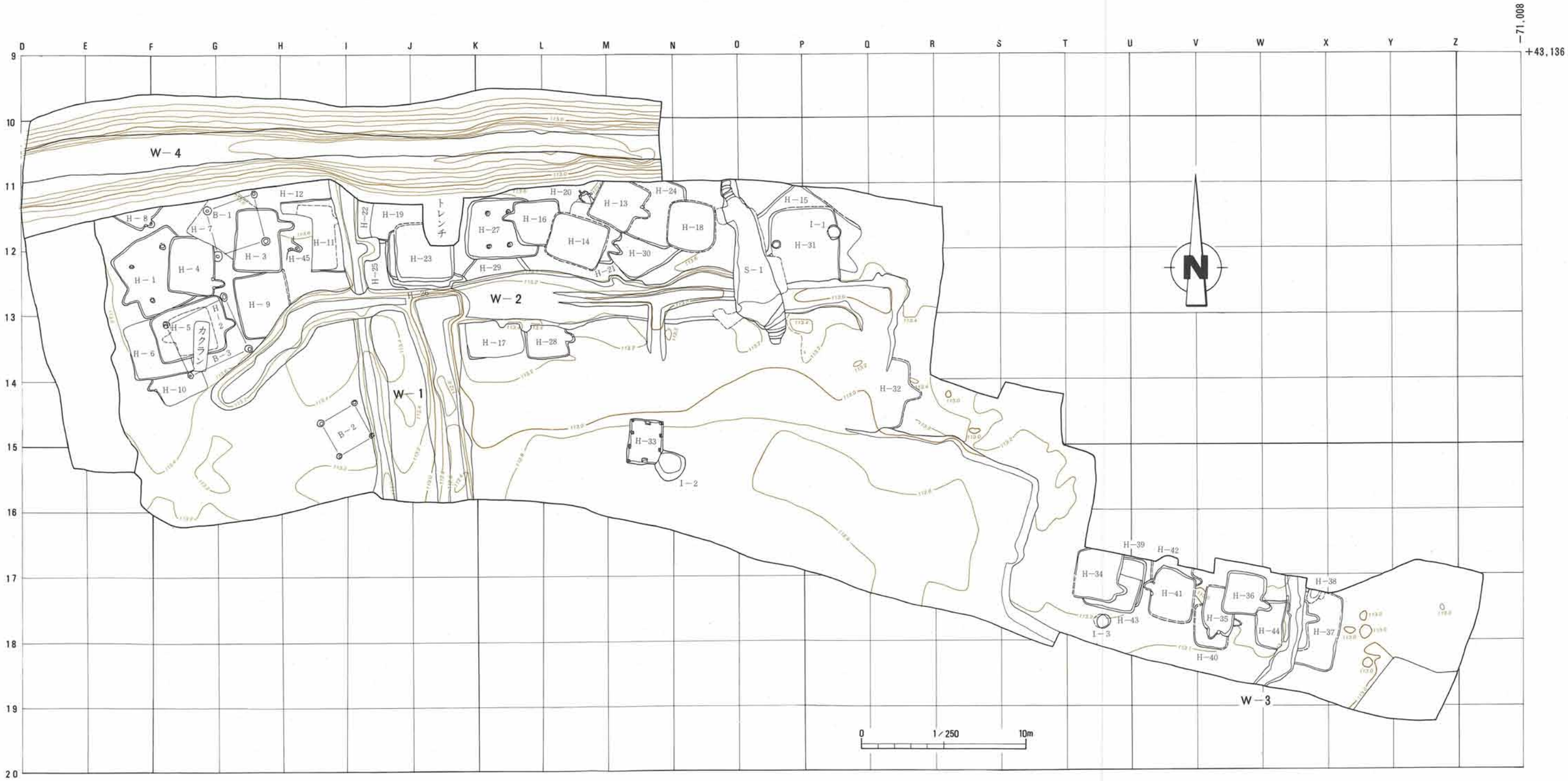


Fig. 7　29トレンチ　住居址全体図

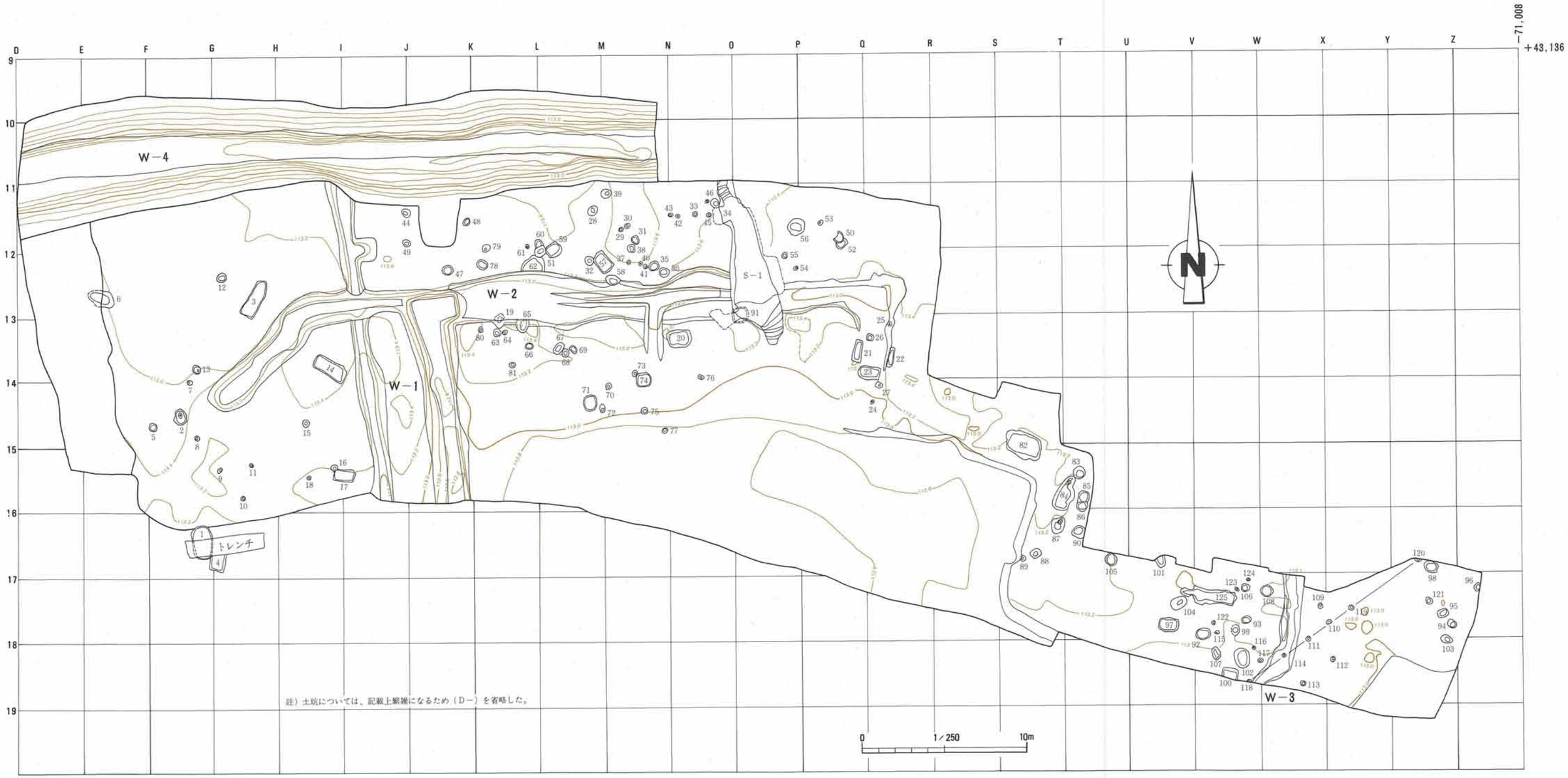
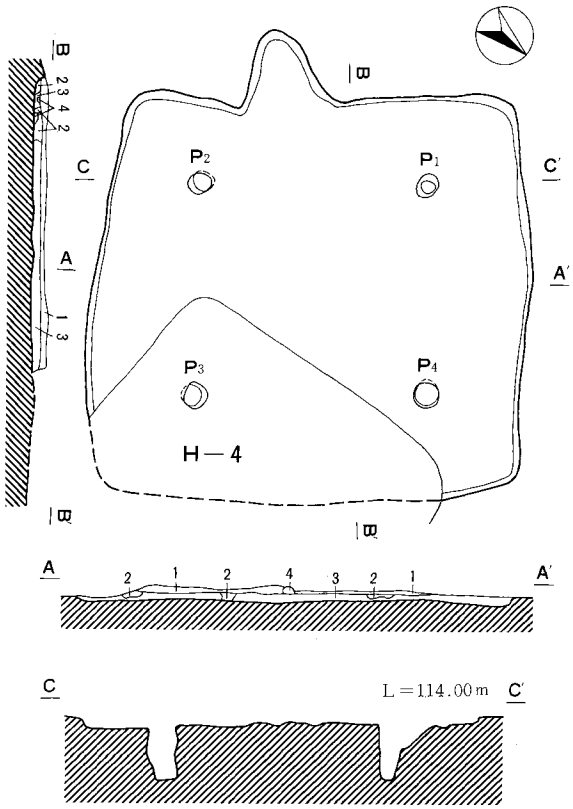
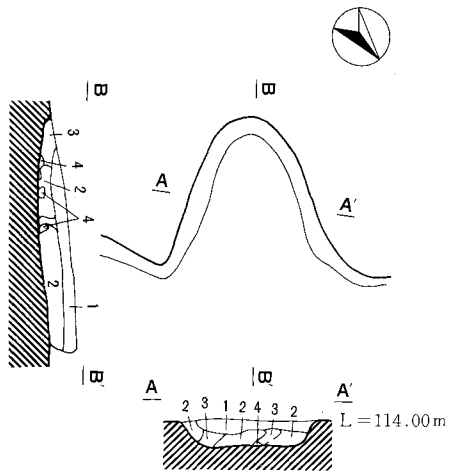


Fig. 8　29トレンチ　土坑全体図

H－1号住居址



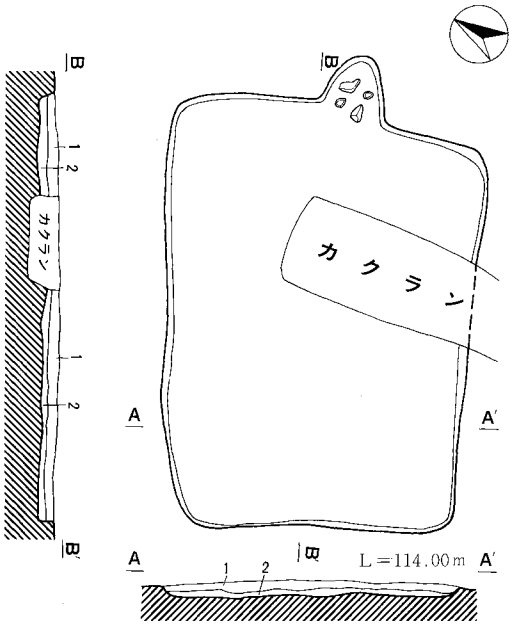
H－1号住居址竈



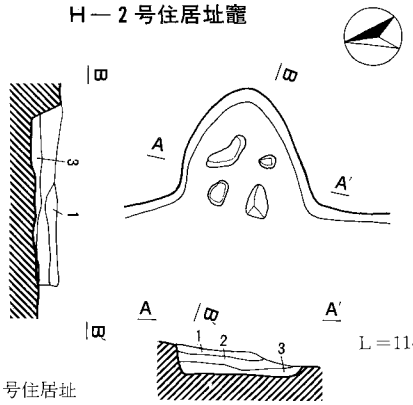
H－1号住居址
1層　褐色細砂層　φ1～2の軽石少量含む
2層　褐色細砂層　φ1～2の軽石2％含む
3層　暗褐色細砂層　炭化物少量含む
4層　橙色細砂層　焼土

H－1号住居址竈
1層　鈍い赤褐色細砂層　焼土粒子少量含む
2層　暗赤褐色細砂層　焼土粒子少量し含む
3層　褐色細砂層　灰少量含む
4層　橙色細砂層　焼土

H－2号住居址



H－2号住居址竈



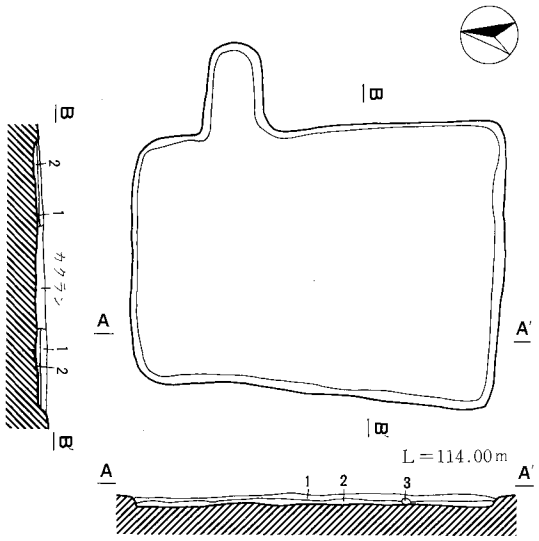
H－2号住居址
1層　褐色細砂層　φ1～2の軽石10％、総社砂層ブロック少量含む
2層　黒褐色細砂層　φ1～2の軽石15％、炭化物粒子、焼土粒子少量含む

H－2号住居址竈
1層　褐色細砂層　炭化物粒子、焼土粒子少量含む
2層　暗褐色細砂層　炭化物粒子、焼土粒子少量含む
3層　黒褐色細砂層　焼土粒子少量含む

（住居址）　0　1:80　2m
（竈）　0　1:40　1m

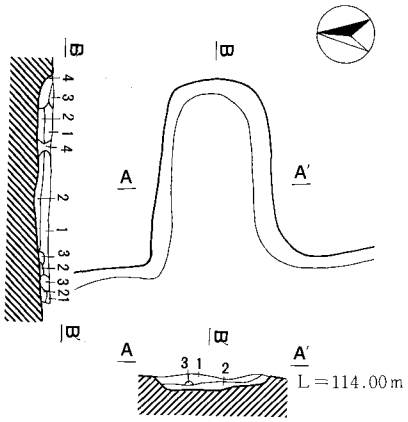
Fig.9　29トレンチ　遺構図（1）

H－3号住居址



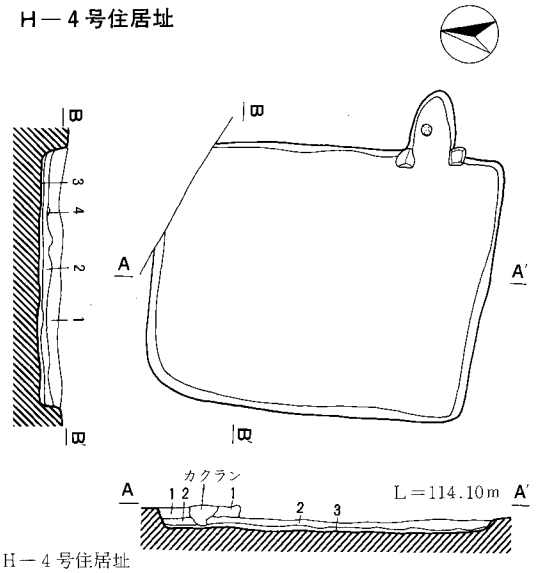
H－3号住居址
1層　黒褐色細砂層　焼土粒子10%、炭化物粒子、軽石少量含む
2層　暗褐色細砂層　φ1～2の軽石、炭化物粒子少量含む
3層　橙色細砂層　焼土ブロック

H－3号住居址竈



H－3号住居址竈
1層　暗褐色細砂層　炭化物粒子、焼土粒子少量含む
2層　褐色細砂層　焼土粒子少量含む
3層　鈍い橙色シルト層　焼土粒子10%含む
4層　明赤褐色細砂層　焼土

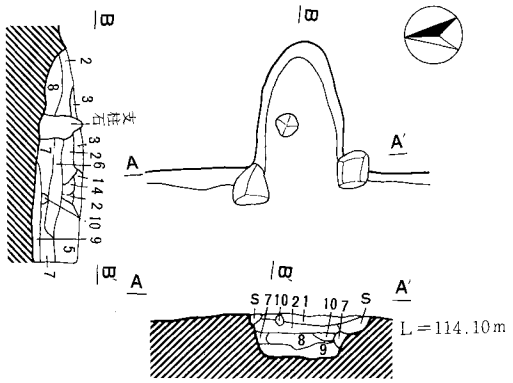
H－4号住居址



H－4号住居址
1層　明褐色細砂層　現耕作土
2層　褐色細砂層　炭化物粒子少量含む
3層　褐色細砂層　φ1～2の軽石、炭化物粒子少量含む
4層　暗褐色細砂層　総社砂層ブロック

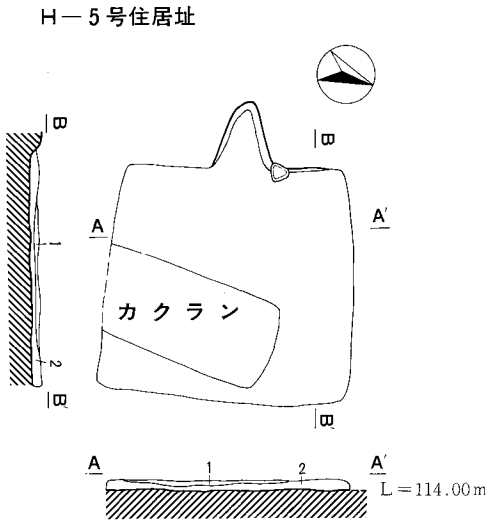
(住居址)　0　1:80　2m　　(竈)　0　1:40　1m

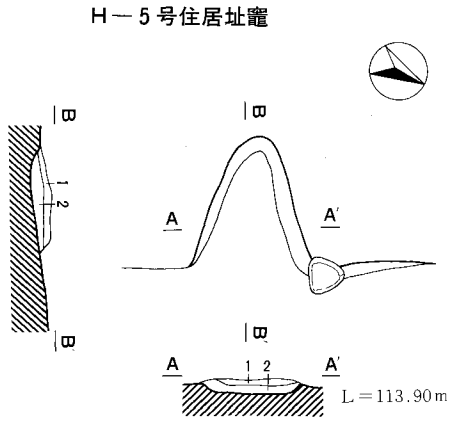
H－4号住居址竈



H－4号住居址竈
1層　褐色細砂層　焼土粒子少量含む
2層　暗褐色細砂層　炭化物粒子少量含む
3層　赤褐色細砂層　炭化物粒子、焼土粒子少量含む
4層　鈍い褐色細砂層　灰10%、炭化物粒子少量含む
5層　褐色細砂層　軽石少量含む
6層　黒褐色細砂層　炭化物粒子少量含む
7層　明褐色細砂層　焼土粒子10%、灰少量含む
8層　褐色細砂層　φ1～2の軽石10%、灰少量含む
9層　暗褐色細砂層　灰少量含む
10層　橙色細砂層　焼土ブロック

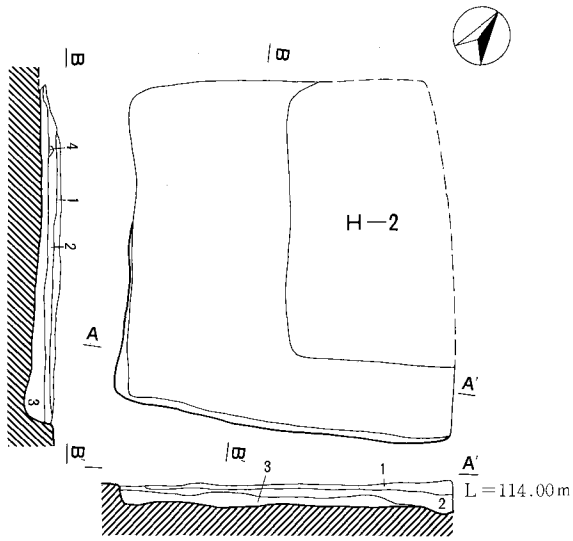
Fig.10　29トレンチ　遺構図（2）

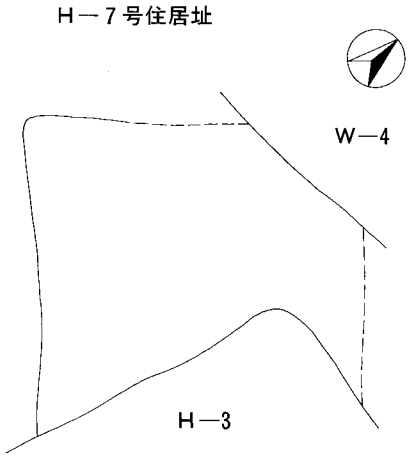




H－5
1層　褐色細砂層　φ1～2 の軽石10%、総社砂層ブロック少量含む
2層　黒褐色細砂層　φ1～2 の軽石15%、炭化物少量含む

H－5号住居址竈
1層　褐色細砂層　焼土粒子10%、灰少量含む
2層　暗褐色細砂層　焼土粒子、炭化物粒子少量含む





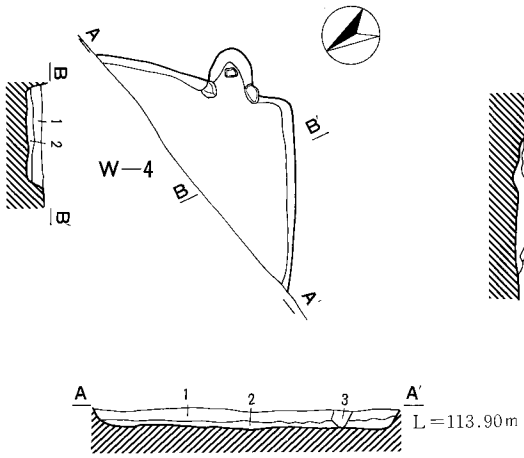
H－6号住居址
1層　褐色細砂層　φ1～2の軽石少量含む
2層　暗褐色細砂層　φ1～2の軽石少量含む
3層　暗褐色細砂層　炭化物粒子少量含む
4層　鈍い黄褐色細砂層　総社砂層ブロック

(住居址)　0　1:80　2m

(竈)　0　1:40　1m

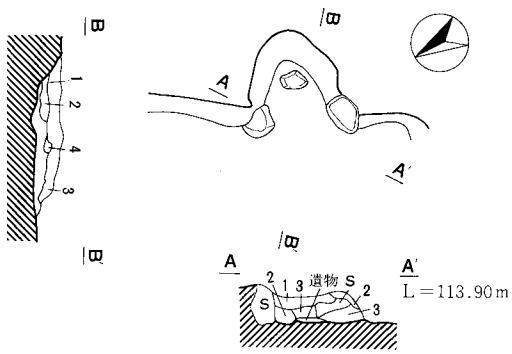
Fig.11　29トレンチ　遺構図（3）

H－8号住居址



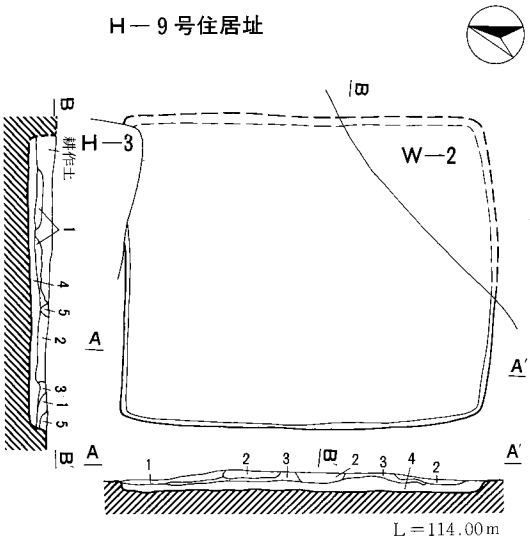
H－8号住居址
1層　暗褐色細砂層　φ1～2の軽石少量含む
2層　褐色細砂層　φ1～2の軽石、炭化物少量含む
3層　鈍い褐色細砂層　焼土粒子20%、灰10%含む

H－8号住居址竈



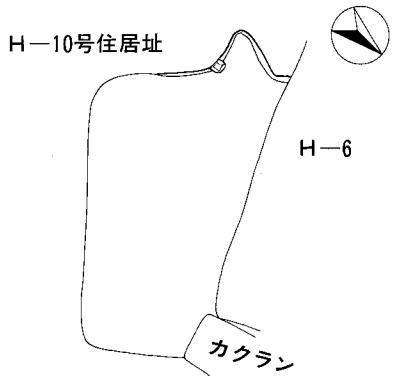
H－8号住居址竈
1層　鈍い橙色細砂層　焼土粒子多量に含む
2層　褐色細砂層　焼土粒子、炭化物少量含む
3層　暗褐色細砂層　岩化物、灰少量含む
4層　明褐色微砂層　灰ブロック

H－9号住居址

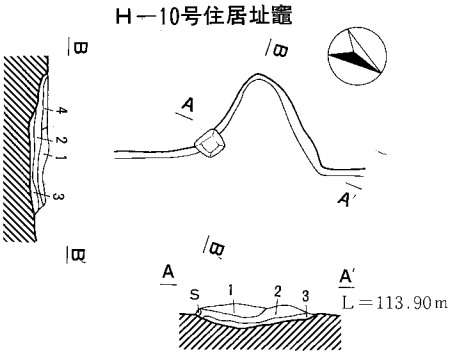


H－9号住居址
1層　褐色細砂層　φ1～2の軽石少量含む
2層　鈍い褐色細砂層　φ1～2の軽石少量含む
3層　褐色細砂層　炭化物少量含む
4層　褐色細砂層　総社砂層との混土層
5層　暗褐色細砂層　焼土粒子少量含む

H－10号住居址



H－10号住居址竈

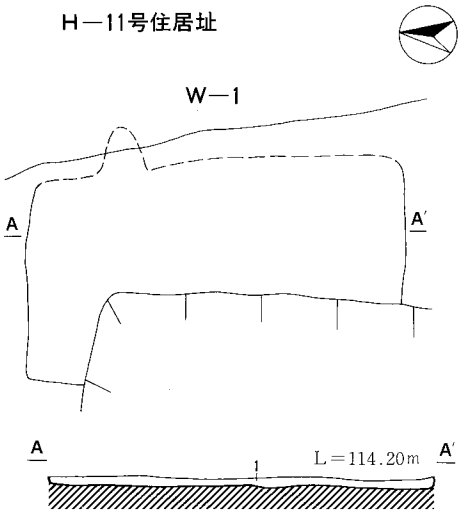


H－10号住居址竈
1層　褐色細砂層　焼土粒子、炭化物粒子、軽石少量含む
2層　暗褐色細砂層　焼土粒子、炭化物粒子少量含む
3層　暗褐色細砂層　炭化物10%、焼土粒子少量含む
4層　橙色細砂層　焼土

（住居址）　0　1:80　2m
（竈）　0　1:40　1m

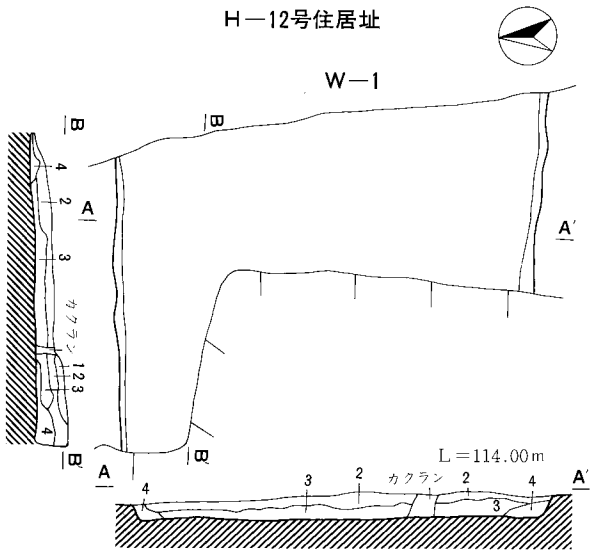
Fig.12　29トレンチ　遺構図（4）

H－11号住居址



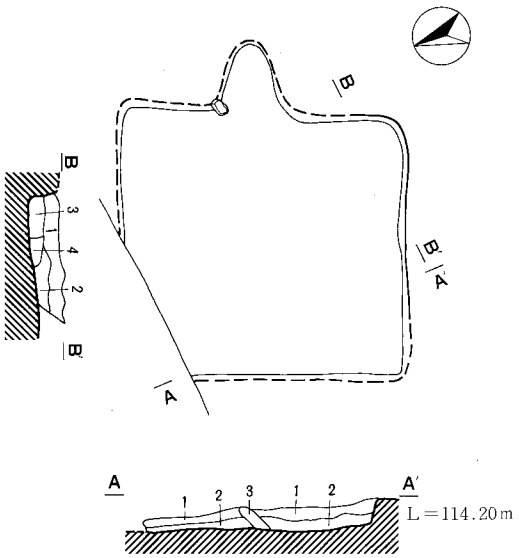
H－11号住居址
1層　暗褐色細砂層　φ1～2の軽石10%、焼土粒子10%含む

H－12号住居址



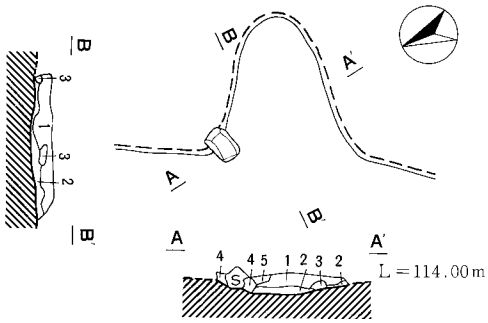
H－12号住居址
1層　褐色細砂層　φ1～2の軽石少量含む
2層　暗褐色細砂層　軽石10%、焼土粒子少量含む
3層　黒褐色細砂層　φ2～3の軽石10%含む
4層　黒色細砂層　軽石、総社砂層粒子少量含む

H－13号住居址



H－13号住居址
1層　鈍い褐色細砂層　φ1～2の軽石少量含む
2層　褐色細砂層　φ1～2程度の軽石10%含む
3層　暗褐色細砂層　軽石、焼土粒子、炭化物粒子少量含む
4層　黒褐色細砂層　軽石、焼土粒子少量含む

H－13号住居址竈



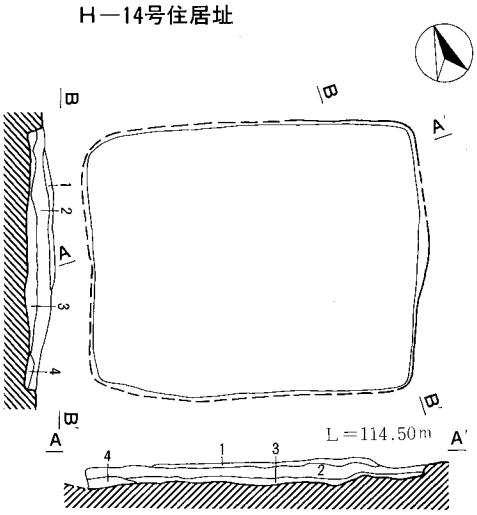
H－13号住居址竈
1層　褐色細砂層　焼土粒子、灰少量含む
2層　褐色細砂層　焼土粒子10%、灰10%、炭化物粒子少量含む
3層　明赤褐色細砂層　焼土ブロック
4層　鈍い褐色微砂層　灰を主体に炭化物少量含む
5層　暗褐色細砂層　焼土ブロック10%、灰少量含む

(住居址)　0　1:80　2m

(竈)　0　1:40　1m

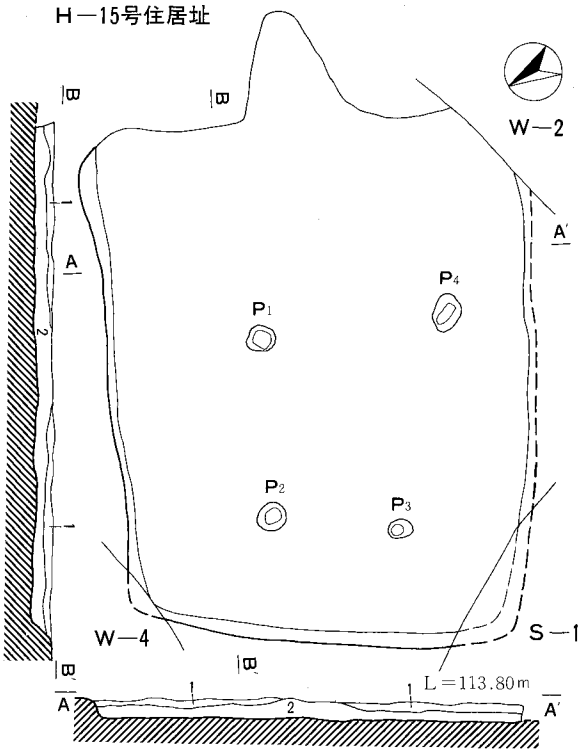
Fig.13　29トレンチ　遺構図（5）

H－14号住居址



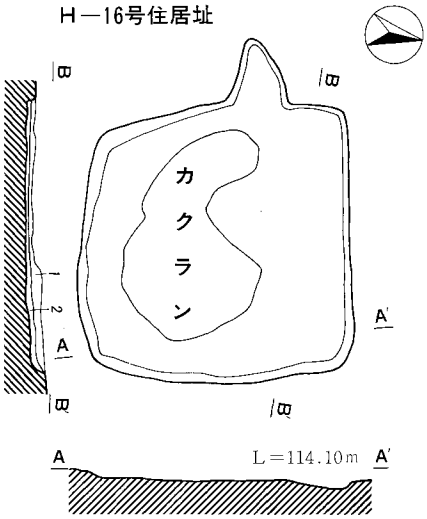
H－14号住居址
1層　灰褐色細砂層　φ1～2の軽石多量に含む
2層　褐色細砂層　φ1～2の軽石10%含む
3層　暗褐色細砂層　炭化物粒子、粘土少量含む
4層　暗褐色細砂層　炭化物粒子少量含む

H－15号住居址



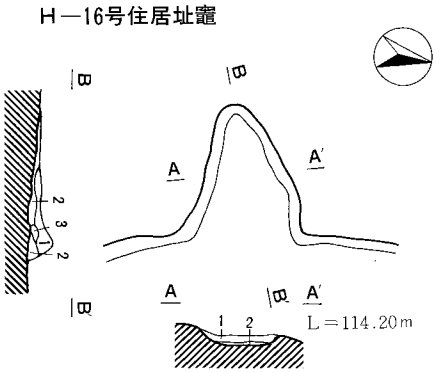
H－15号住居址
1層　褐色細砂層　炭化物粒子少量含む
2層　暗褐色細砂層　炭化物粒子、焼土粒子少量含む

H－16号住居址



H－16号住居址
1層　褐色細砂層　φ1～2の軽石少量含む
2層　暗褐色細砂層　φ1～2の軽石、炭化物粒子少量含む

H－16号住居址竈

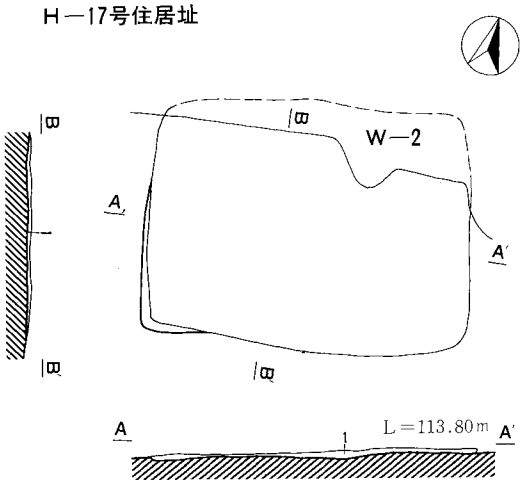


H－16号住居址竈
1層　暗赤褐色細砂層　焼土粒子少量含む
2層　赤褐色細砂層　焼土粒子、炭化物粒子少量含む
3層　赤褐色細砂層　焼土ブロック

(住居址)　0　1:80　2m
(竈)　0　1:40　1m

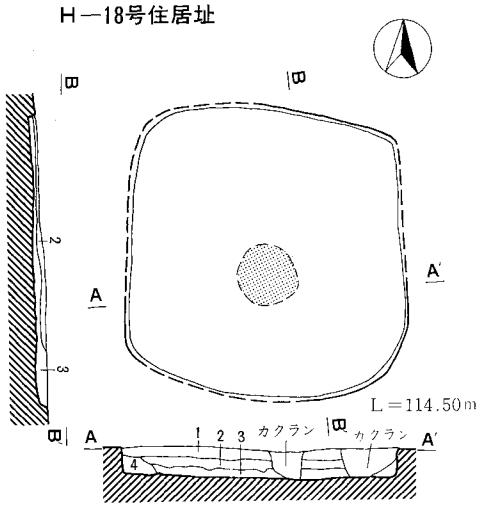
Fig. 14　29トレンチ遺構図（6）

H—17号住居址



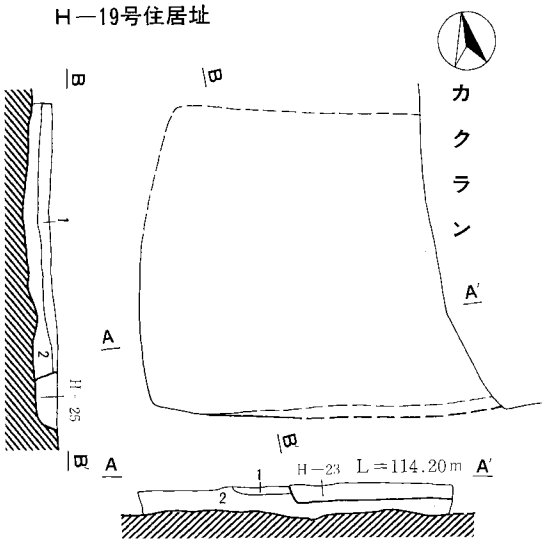
H—17住居址
1層　鈍い黄褐色粗砂層　総社砂層ブロック少量含む

H—18号住居址



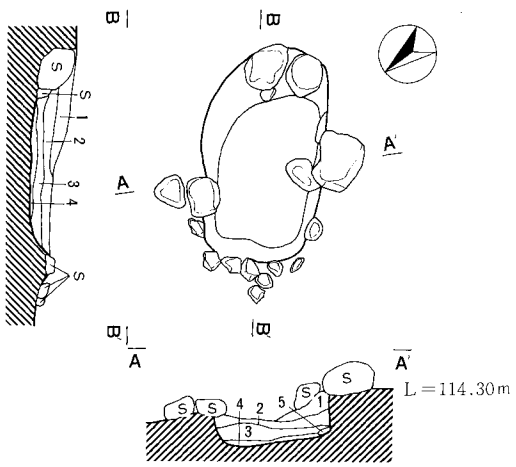
H—18号住居址
1層　褐色細砂層　φ1～2の軽石40%含む
2層　暗褐色細砂層　φ1～2の軽石20%含む
3層　暗褐色細砂層　φ1～2の軽石、炭化物粒子少量含む
4層　褐色細砂層　φ1～2の軽石15%含む

H—19号住居址



H—19号住居址
1層　褐色粗砂層　φ1～2の軽石、炭化物粒子少量含む
2層　暗褐色粗砂層　炭化物粒子、焼土粒子少量含む

H—20号住居址竈



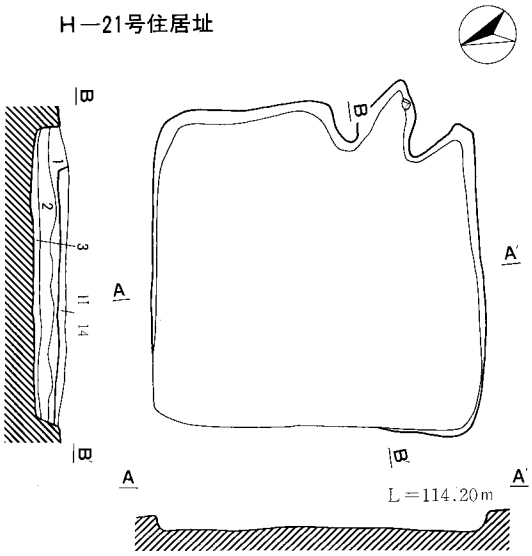
H—20号住居址竈
1層　暗褐色細砂層　粘土粒子少量含む
2層　褐色細砂層　φ1～2の軽石、焼土粒子少量含む
3層　鈍い褐色細砂層　φ1～2の軽石、灰少量含む
4層　明赤褐色細砂層　焼土層
5層　オリーブ黒色細砂層　灰層

(住居址)　0　1:80　2m

(竈)　0　1:40　1m

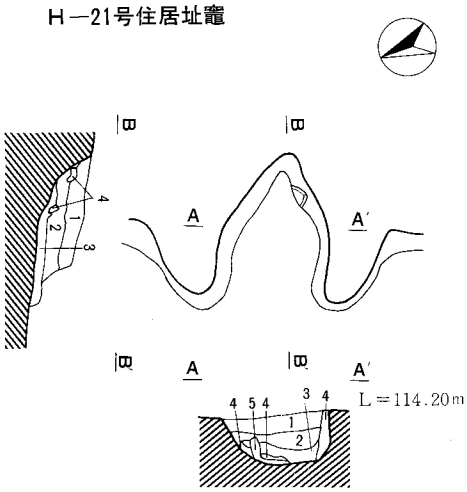
Fig. 15　29トレンチ遺構図（7）

H—21号住居址



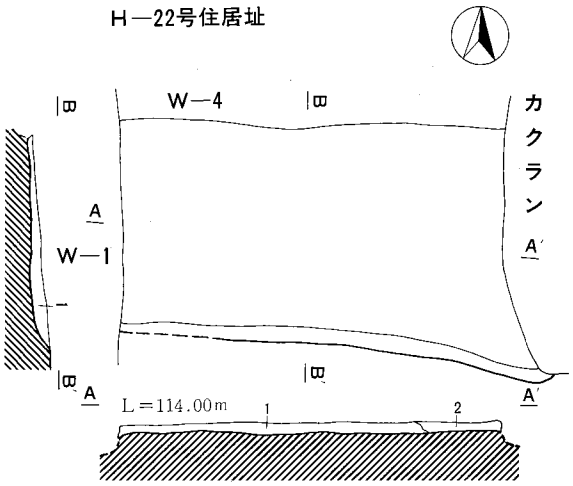
H—21号住居址
1層　暗褐色細砂層　φ1～2の軽石10%、焼土粒子少量含む
2層　黒褐色細砂層　φ1～2の軽石、炭化物少量含む
3層　黒褐色細砂層　炭化物10%、焼土粒子、灰少量含む

H—21号住居址竈



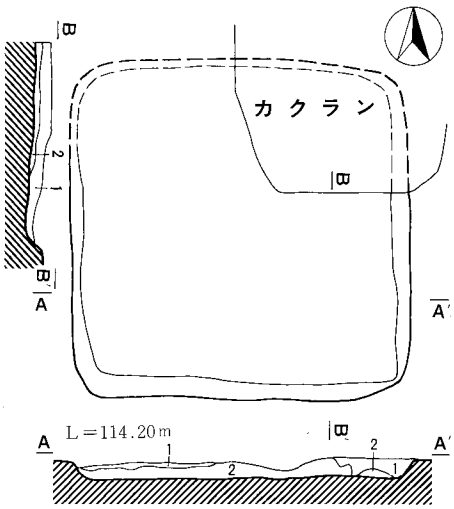
H—21号住居址竈
1層　褐色細砂層　焼土粒子、粘土粒子少量含む
2層　暗褐色細砂層　焼土粒子少量含む
3層　暗褐色細砂層　灰、炭化物粒子、焼土粒子少量含む
4層　灰白色微砂層　灰層を主体に焼土粒子少量含む
5層　明赤褐色細砂層　焼土

H—22号住居址



H—22号住居址
1層　暗褐色微砂層　φ1～2の総社砂層粒子含む
2層　黒褐色微砂層　炭化物粒子、灰少量含む

H—23号住居址



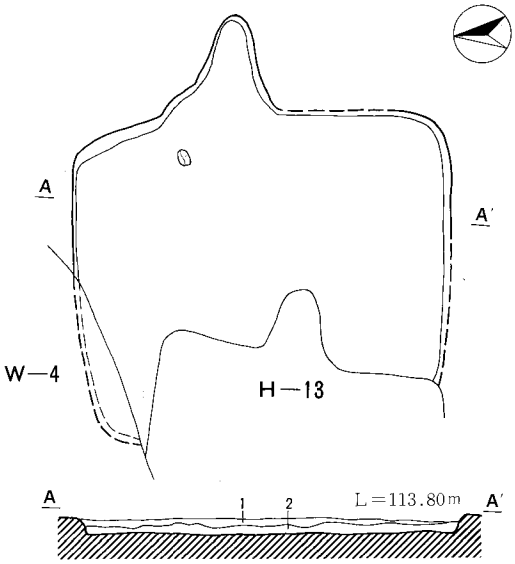
H—23号住居址
1層　鈍い黄褐色粗砂層　炭化物粒子少量含む
2層　褐色粗砂層　φ1～2の軽石、炭化物粒子少量含む

(住居址)
0　1:80　2m

(竈)
0　1:40　1m

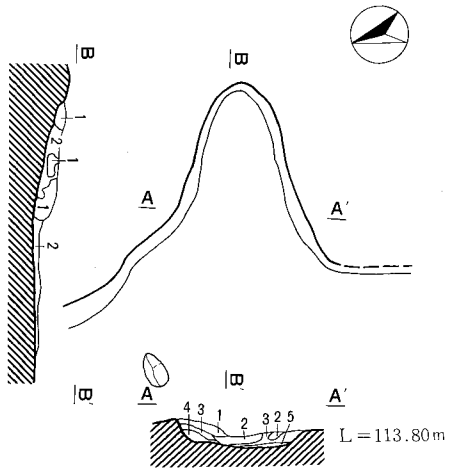
Fig. 16　29トレンチ遺構図（8）

H—24号住居址



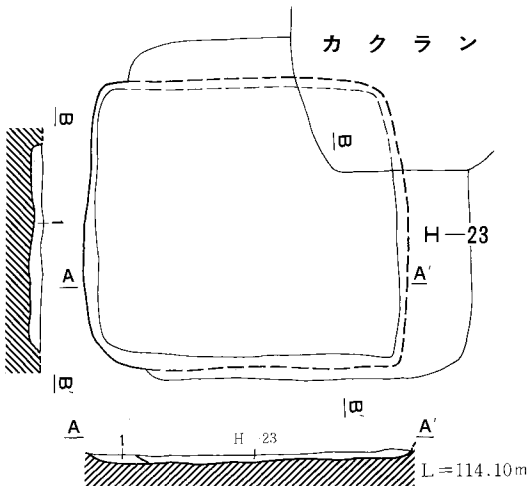
H—24号住居址
1層　褐色細砂層　φ1～2の軽石少量含む
2層　黒褐色細砂層　炭化物粒子少量含む

H—24号住居址竈



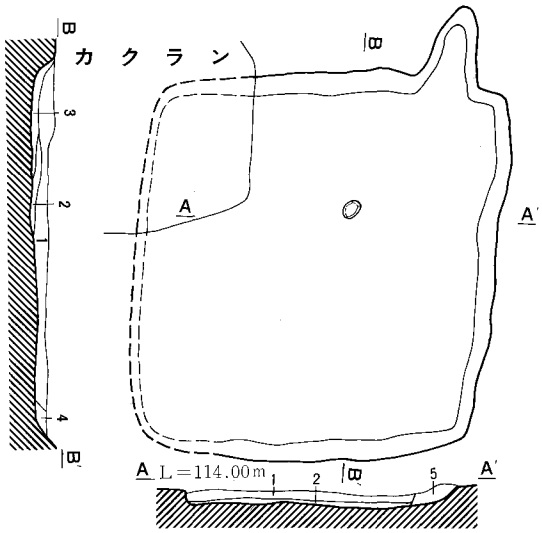
H—24号住居址竈
1層　橙色細砂層　焼土層
2層　暗褐色細砂層　炭化物粒子多量に含む
3層　褐灰色細砂層　焼土粒子を少量含む灰層
4層　灰白色微砂層　灰層を主体に焼土粒子少量含む
5層　灰褐色微砂層　灰層を主体に炭化物粒子少量含む

H—25号住居址



H—25号住居址
1層　褐色細砂層　φ1～2の軽石、炭化物少量含む

H—26号住居址

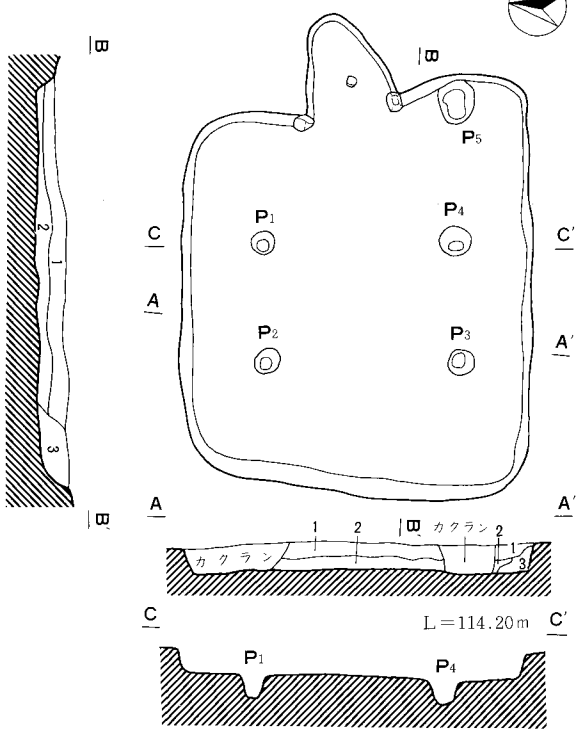


H—26号住居址
1層　暗褐色粗砂層　φ1～2の軽石少量含む
2層　褐色粗砂層　炭化物、焼土粒子少量含む
3層　暗褐色細砂層　φ1～2の軽石少量含む
4層　黒褐色細砂層　φ1～2の軽石、炭化物少量含む
5層　暗褐色細砂層　総社砂層粒子多量に含む

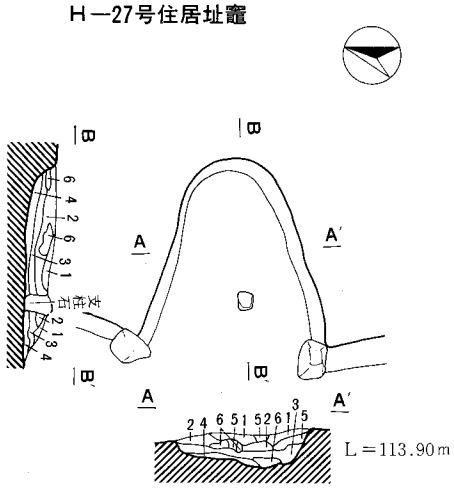
(住居址)　0　1:80　2m
(竈)　0　1:40　1m

Fig. 17　29トレンチ遺構図（9）

H—27号住居址



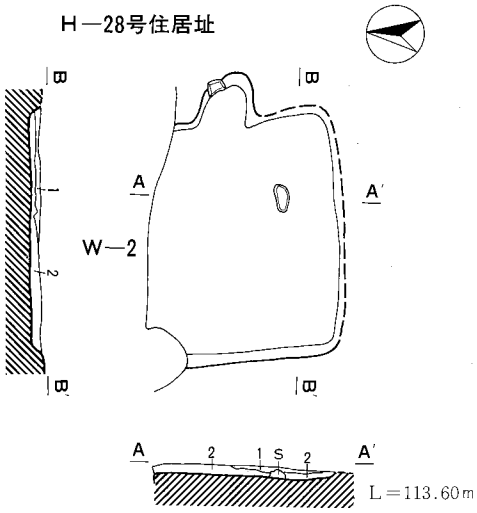
H—27号住居址竈



H—27号住居址
1層　黒褐色細砂層　φ1～2の軽石、炭化物粒子少量含む
2層　黒褐色細砂層　φ1～2の軽石、炭化物粒子少量含む
3層　褐色細砂層　軽石少量、総社砂層粒子多量に含む

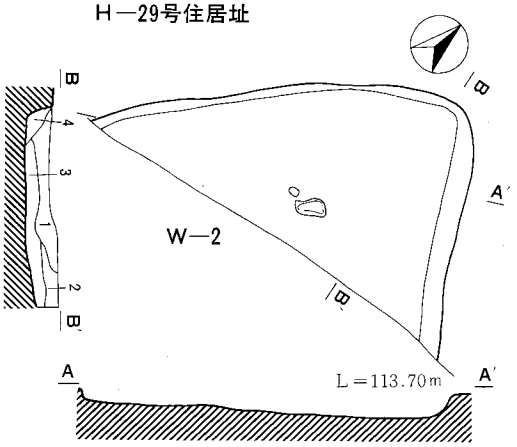
H—27号住居址竈
1層　橙色細砂層　焼土層
2層　褐灰色微砂層　焼土粒子少量含む
3層　黒褐色微砂層　焼土粒子、粘土ブロック少量含む灰層
4層　黒褐色細砂層　炭化物粒子20%、焼土粒子10%含む灰層
5層　明褐色微砂層　炭化物粒子、灰ブロックを多量に含む
6層　浅黄色微砂層　粘土ブロックを多量に含む

H—28号住居址



H—28号住居址
1層　暗褐色細砂層　φ1～2の軽石、炭化物粒子少量含む
2層　黒褐色細砂層　炭化物粒子、焼土粒子少量含む

H—29号住居址



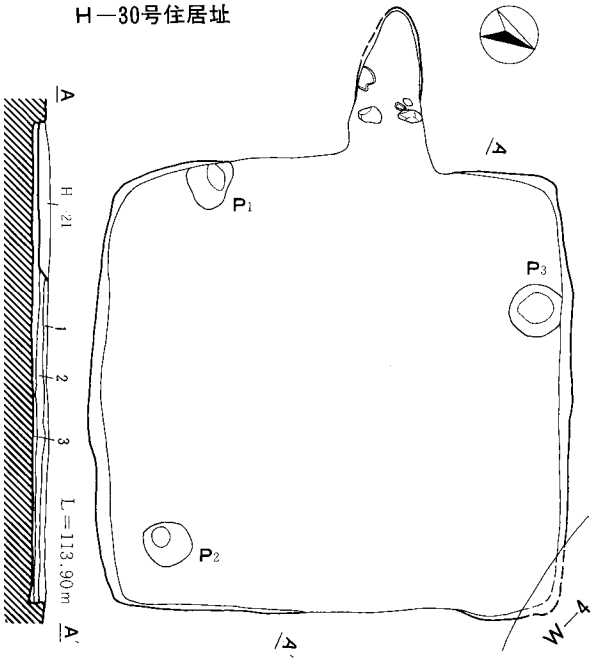
H—29号住居址
1層　暗褐色細砂層　φ1～2の軽石少量含む
2層　暗褐色細砂層　炭化物粒子、軽石少量含む
3層　褐色細砂層　焼土粒子、炭化物粒子少量含む
4層　黒褐色細砂層　炭化物粒子、総社砂層粒子少量含む

（住居址）
0　1:80　2m

（竈）
0　1:40　1m

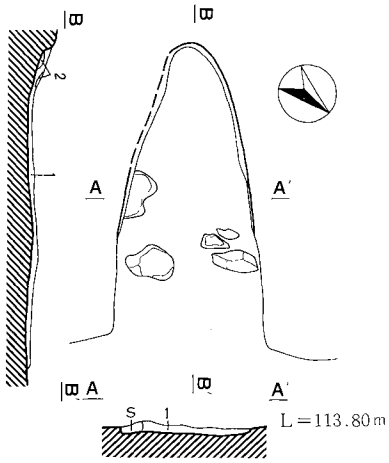
Fig. 18　29トレンチ遺構図（10）

H—30号住居址



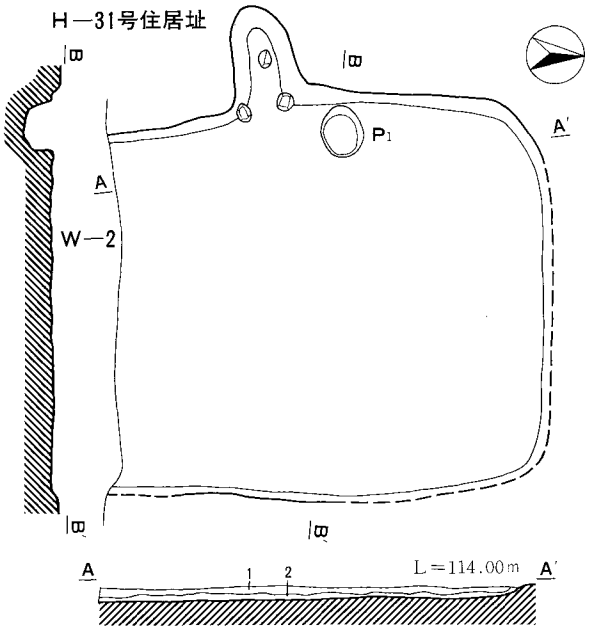
H—30号住居址
1層　褐色細砂層　φ 1～2の軽石少量含む
2層　暗褐色細砂層　φ 1～2の軽石、炭化物粒子少量含む
3層　黒褐色細砂層　炭化物粒子多量に含む

H—30号住居址竈



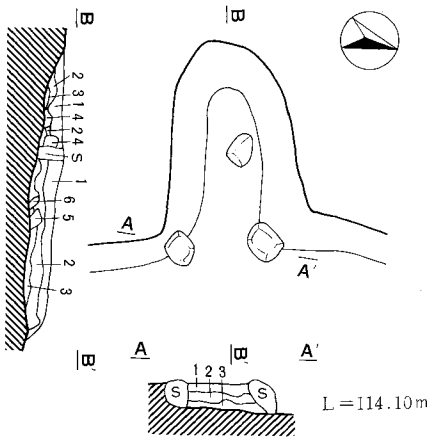
H—30号住居址竈
1層　褐色細砂層　炭化物粒子、焼土粒子少量含む
2層　橙色細砂層　焼土層

H—31号住居址



H—31号住居址
1層　褐色細砂層　φ1～2の軽石少量含む
2層　暗褐色細砂層　φ1～2の軽石、炭化物粒子少量含む

H—31号住居址竈

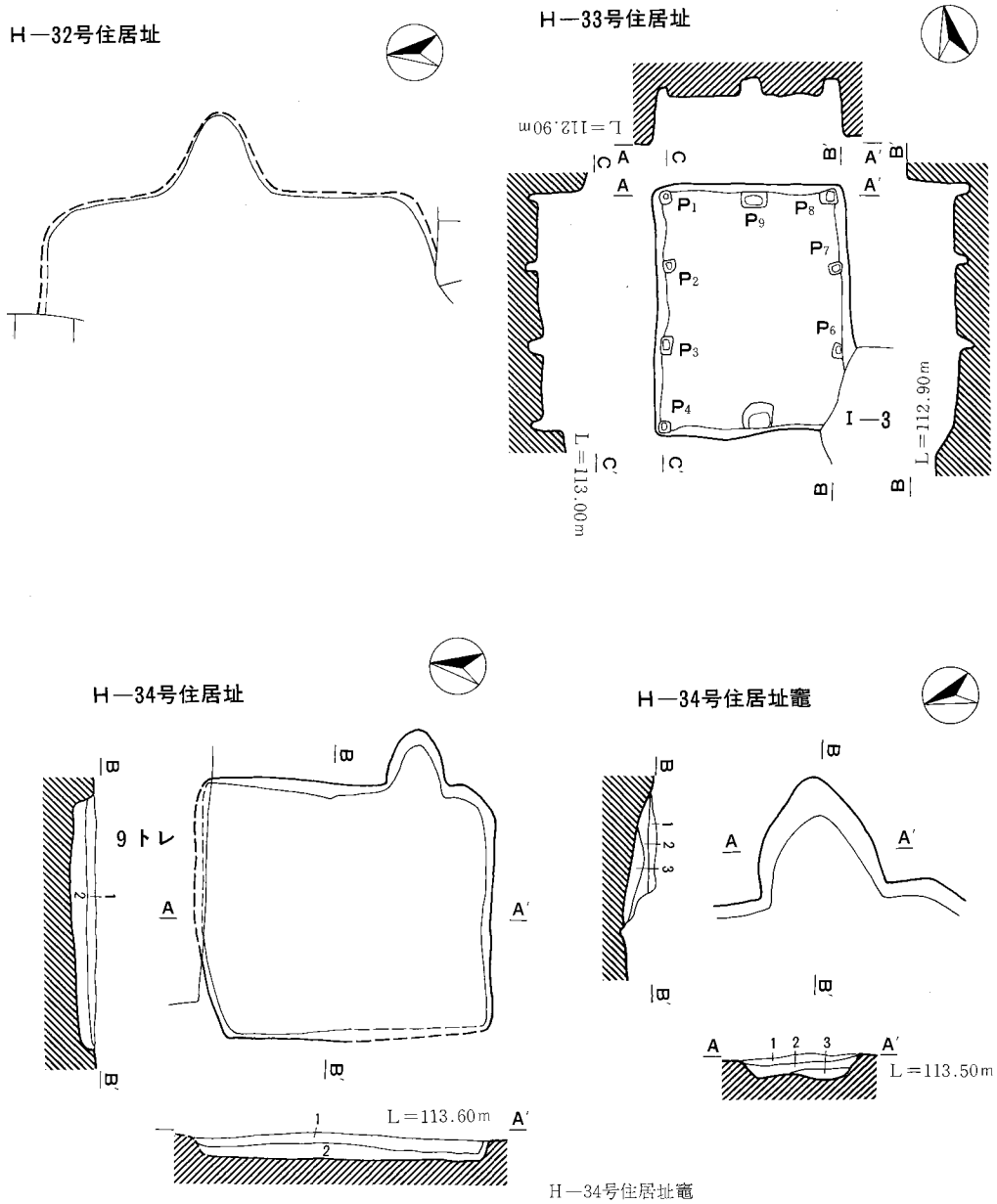


H—31号住居址竈
1層　暗褐色細砂層　焼土ブロック少量含む
2層　暗褐色細砂層　炭化物粒子、焼土粒子、粘土少量含む
3層　黒褐色細砂層　炭化物粒子、焼土粒子少量含む
4層　橙色細砂層　焼土層
5層　黒色細砂層　灰を主体に炭化物少量含む
6層　鈍い褐色微砂層　粘土層

(住居址)　0　1:80　2m

(竈)　0　1:40　1m

Fig. 19　29トレンチ遺構図（11）



H—34号住居址

1層　鈍い黄褐色細砂層　φ1～2の軽石少量含む

2層　黒褐色粗砂層　φ1～2の軽石、炭化物粒子少量含む

H—34号住居址竈

1層　鈍い黄橙色粗砂層　焼土粒子多量に含む

2層　鈍い黄褐色粗砂層　焼土粒子、炭化物粒子少量含む

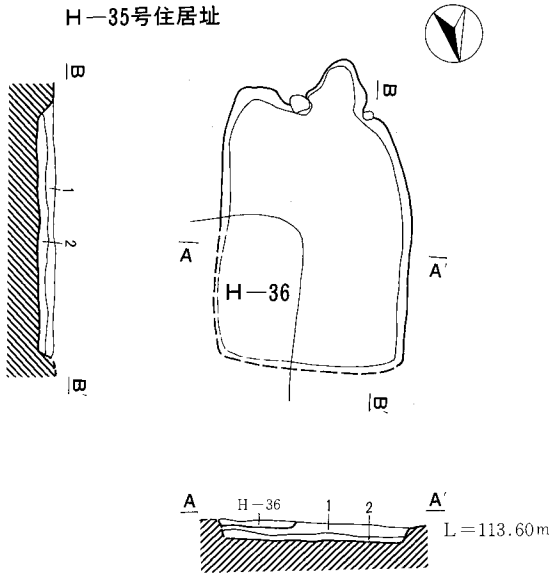
3層　黄褐色粗砂層　灰を主体に焼土粒子、炭化物粒子少量含む

(住居址)　0　1:80　2m

(竈)　0　1:40　1m

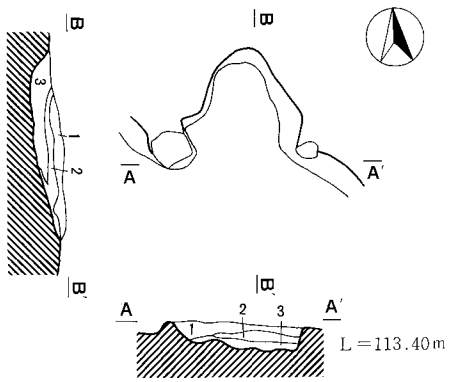
Fig. 20　29トレンチ遺構図 (12)

H—35号住居址



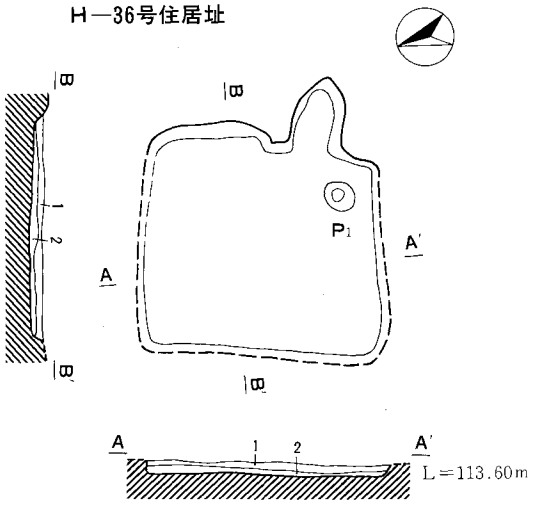
H—35号住居址
1層　鈍い黄褐色粗砂層　φ1～2の軽石10%含む
2層　鈍い黄褐色粗砂層　φ1～2の軽石、炭化物粒子少量含む

H—35号住居址竈



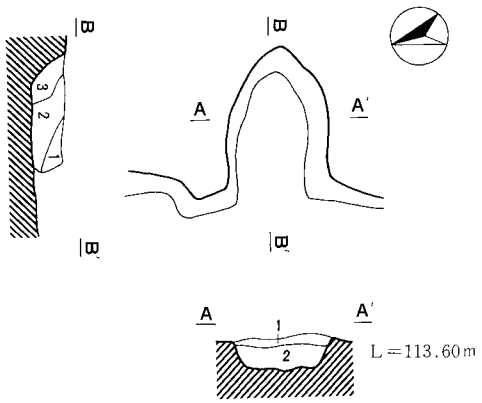
H—35号住居址竈
1層　鈍い黄褐色細砂層　焼土粒子少量含む
2層　灰黄褐色細砂層　灰層を主体に炭化物粒子少量含む
3層　鈍い黄褐色粗砂層　焼土粒子、炭化物粒子少量含む

H—36号住居址



H—36号住居址
1層　褐色細砂層　φ1～2の軽石少量含む
2層　黒褐色細砂層　φ1～2の軽石、炭化物粒子少量含む

H—36号住居址竈



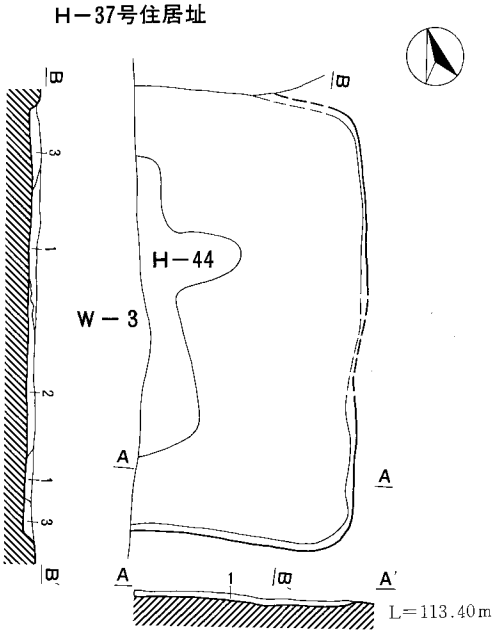
H—36号住居址竈
1層　鈍い黄橙色粗砂層　焼土層
2層　鈍い黄橙色微砂層　焼土粒子、炭化物粒子を含む灰層
3層　鈍い黄褐色粗砂層　炭化物粒子少量含む

(住居址)
0　1:80　2m

(竈)
0　1:40　1m

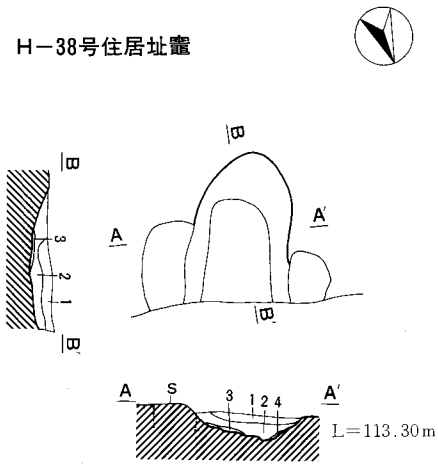
Fig. 21　29トレンチ遺構図 (13)

H－37号住居址



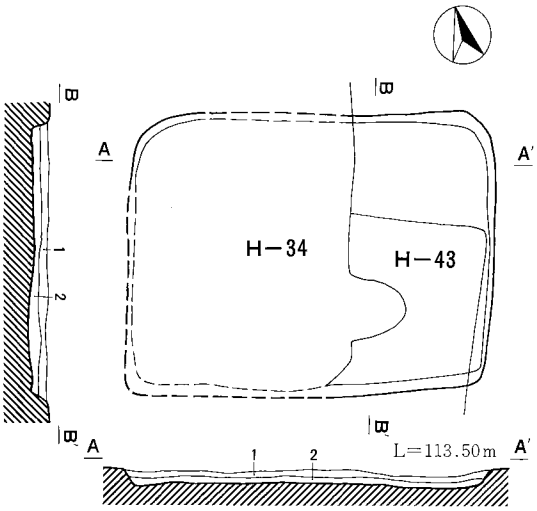
H—37号住居址
1層　鈍い黄褐色細砂層　φ1～2の軽石少量含む
2層　褐色粗砂層　総社砂層粒子少量含む
3層　黒褐色細砂層　炭化物粒子少量含む

H－38号住居址竈



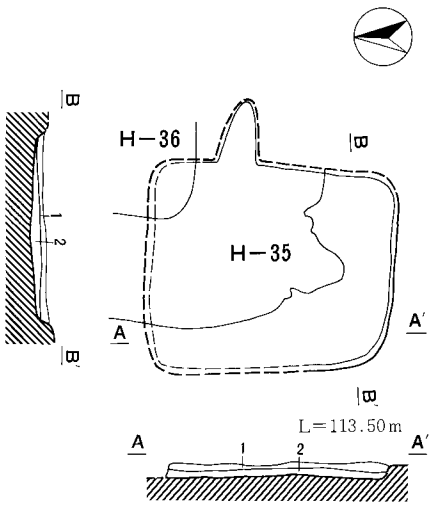
H—38号住居址竈
1層　鈍い黄褐色微砂層　焼土粒子20%、炭化物粒子20%含む
2層　暗褐色細砂層　焼土粒子、炭化物粒子少量含む
3層　褐色微砂層　焼土粒子、炭化物少量含む灰層
4層　灰黄褐色微砂層　焼土粒子を少量含む灰層

H－39号住居址



H—39号住居址
1層　鈍い黄褐色細砂層　φ1～2の軽石少量含む
2層　鈍い黄褐色微砂層　φ1～2の軽石、炭化物粒子少量含む

H－40号住居址



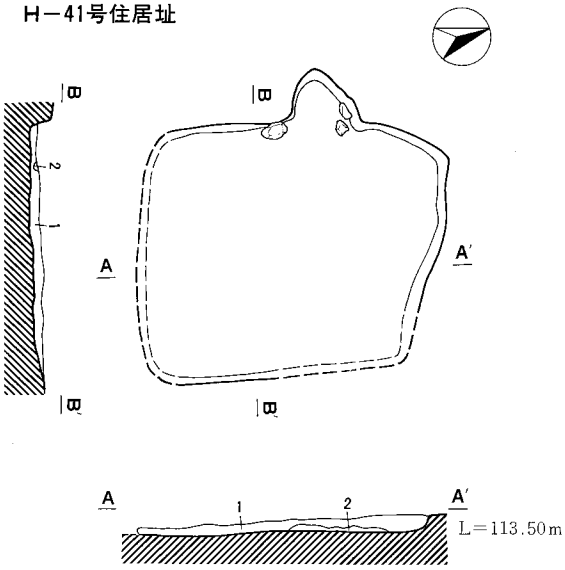
H—40号住居址
1層　鈍い黄褐色細砂層　φ1～2の軽石30%含む
2層　褐色細砂層　φ1～2の軽石、炭化物粒子少量含む

（住居址）
0　1:80　2m

（竈）
0　1:40　1m

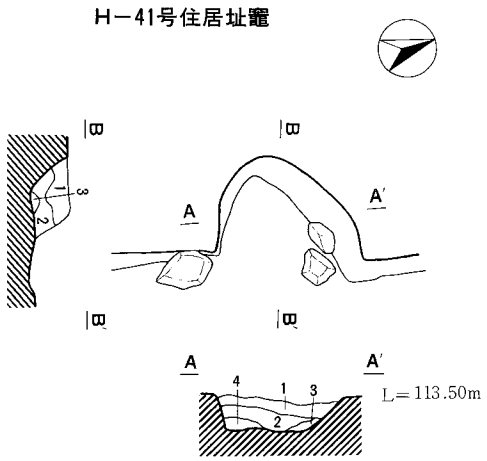
Fig.　22　29トレンチ遺構図（14）

H－41号住居址



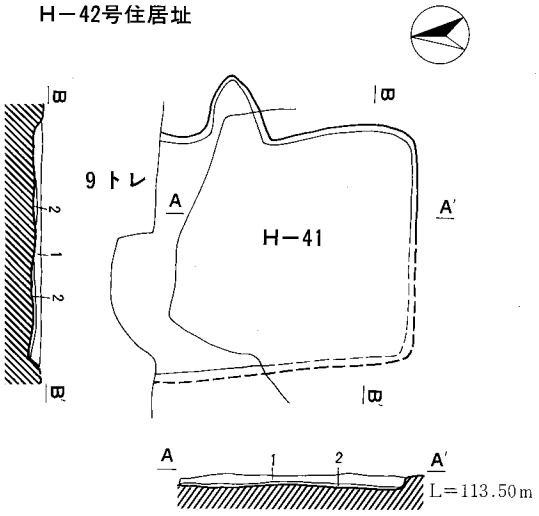
H—41号住居址
1層　褐色細砂層　φ1 ～ 2 の軽石少量含む
2層　暗褐色細砂層　φ1 ～ 2 の軽石、炭化物粒子少量含む

H－41号住居址竈



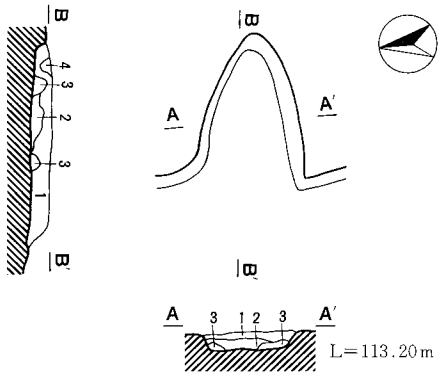
H—41号住居址竈
1層　鈍い黄褐色細砂層　φ1 ～ 2 の軽石少量含む
2層　鈍い黄褐色粗砂層　焼土粒子、炭化物粒子少量含む
3層　褐色細砂層　焼土粒子多量に含む
4層　灰褐色微砂層　炭化物を少量含む灰層

H－42号住居址



H—42号住居址
1層　鈍い黄褐色細砂層　φ1 ～ 2 の軽石少量含む
2層　鈍い黄褐色粗砂層　軽石、炭化物粒子少量含む

H－42号住居址竈



H—42号住居址竈
1層　褐色細砂層　焼土粒子20%含む
2層　褐色微砂層　焼土粒子10%含む灰層
3層　鈍い黄褐色細砂層　炭化物粒子30%、焼土少量含む
4層　赤褐色細砂層　焼土ブロック

(住居址)
0　1:80　2m

(竈)
0　1:40　1m

Fig. 23　29トレンチ遺構図 (15)

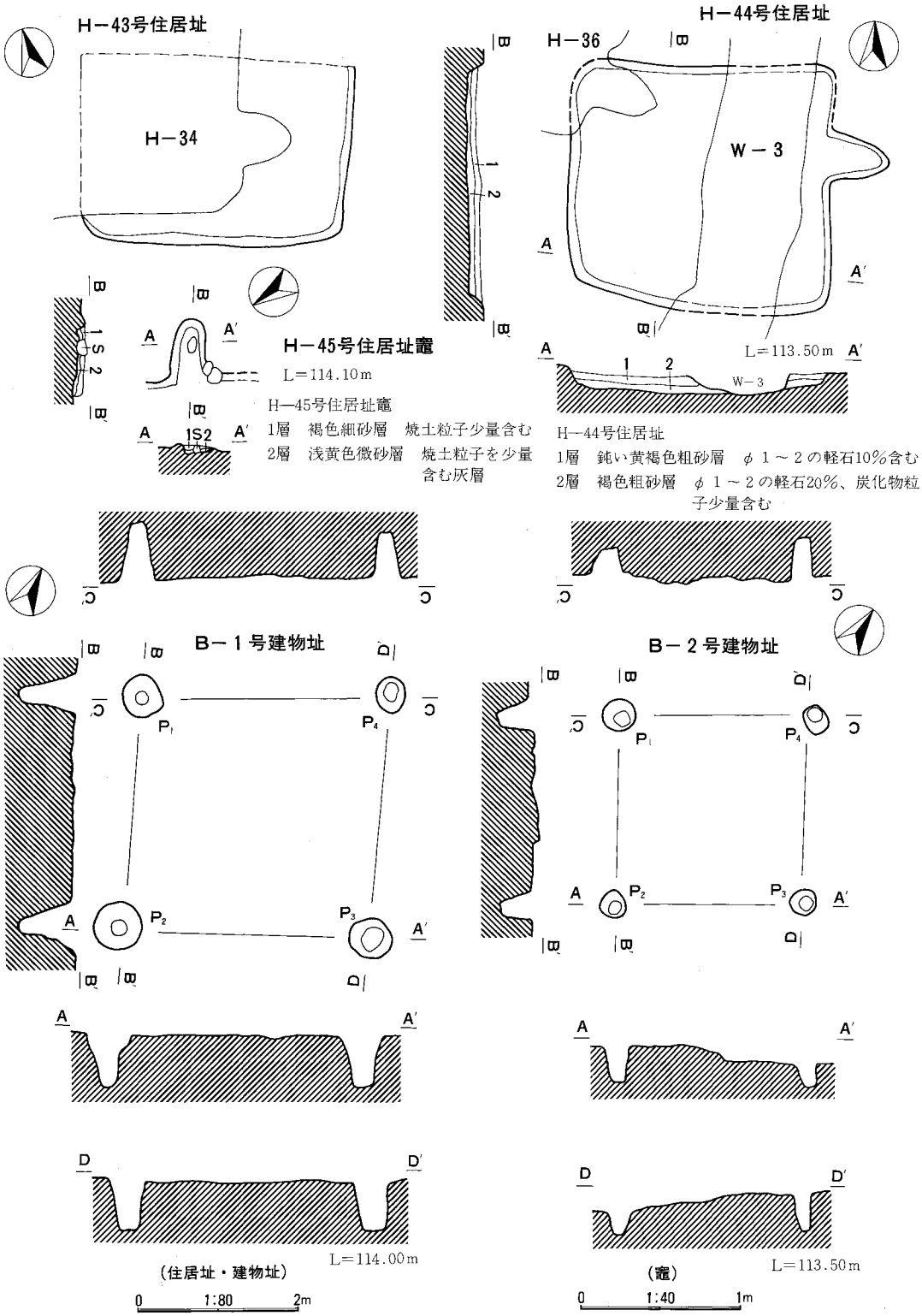


Fig.　24　29トレンチ遺構図（16）

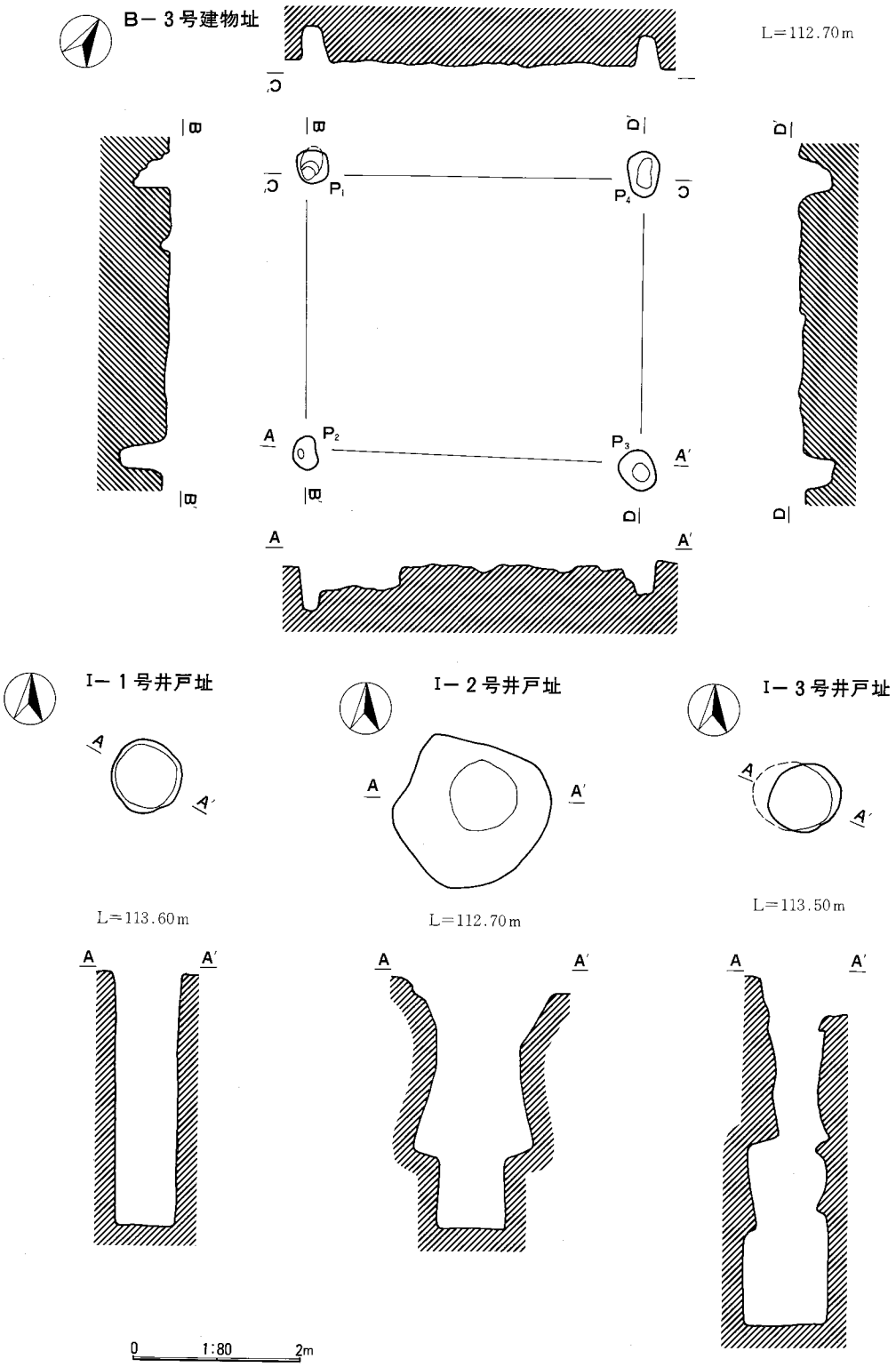


Fig. 25 29トレンチ遺構図（17）

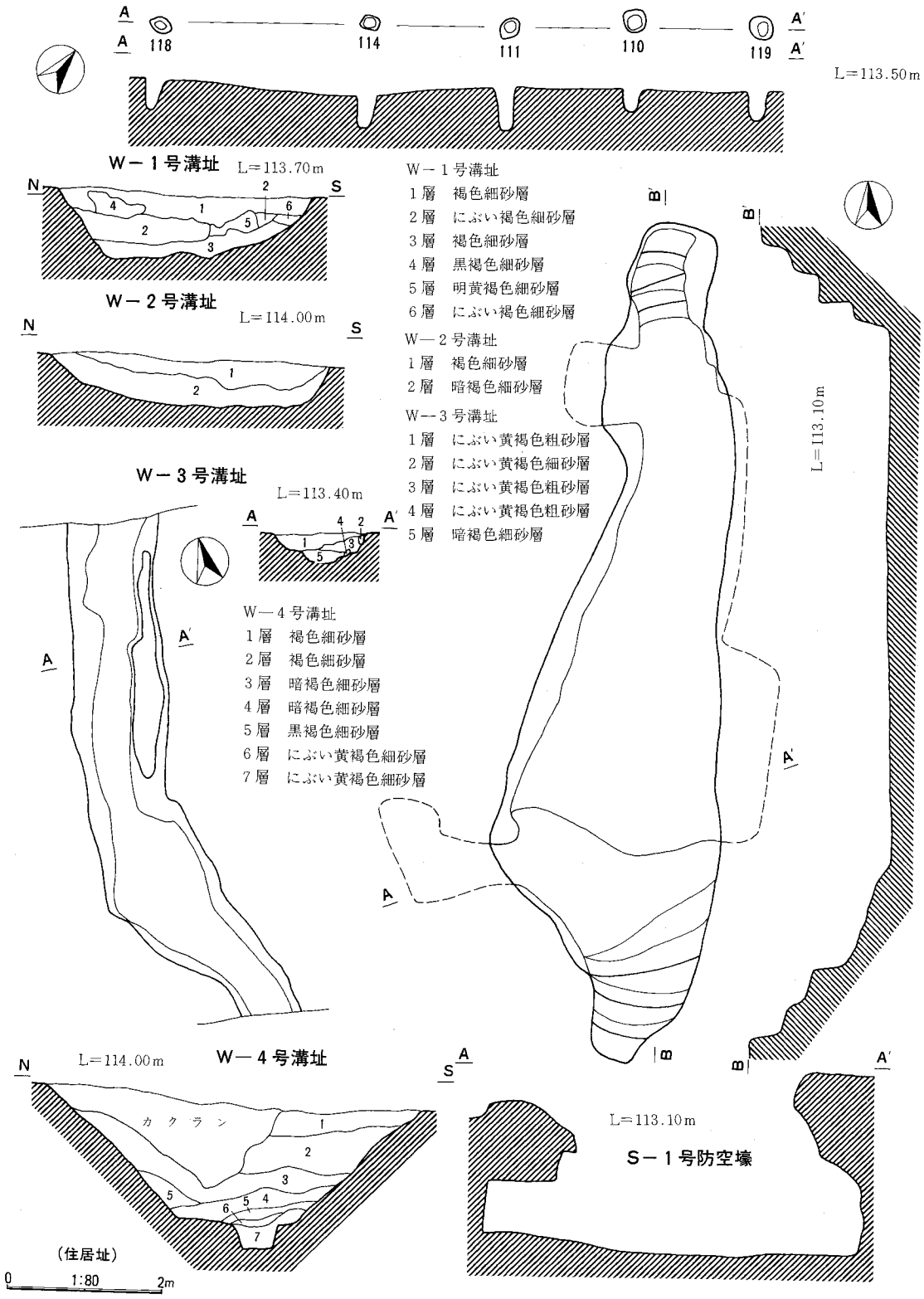


Fig. 26 29トレンチ遺構図 (18)

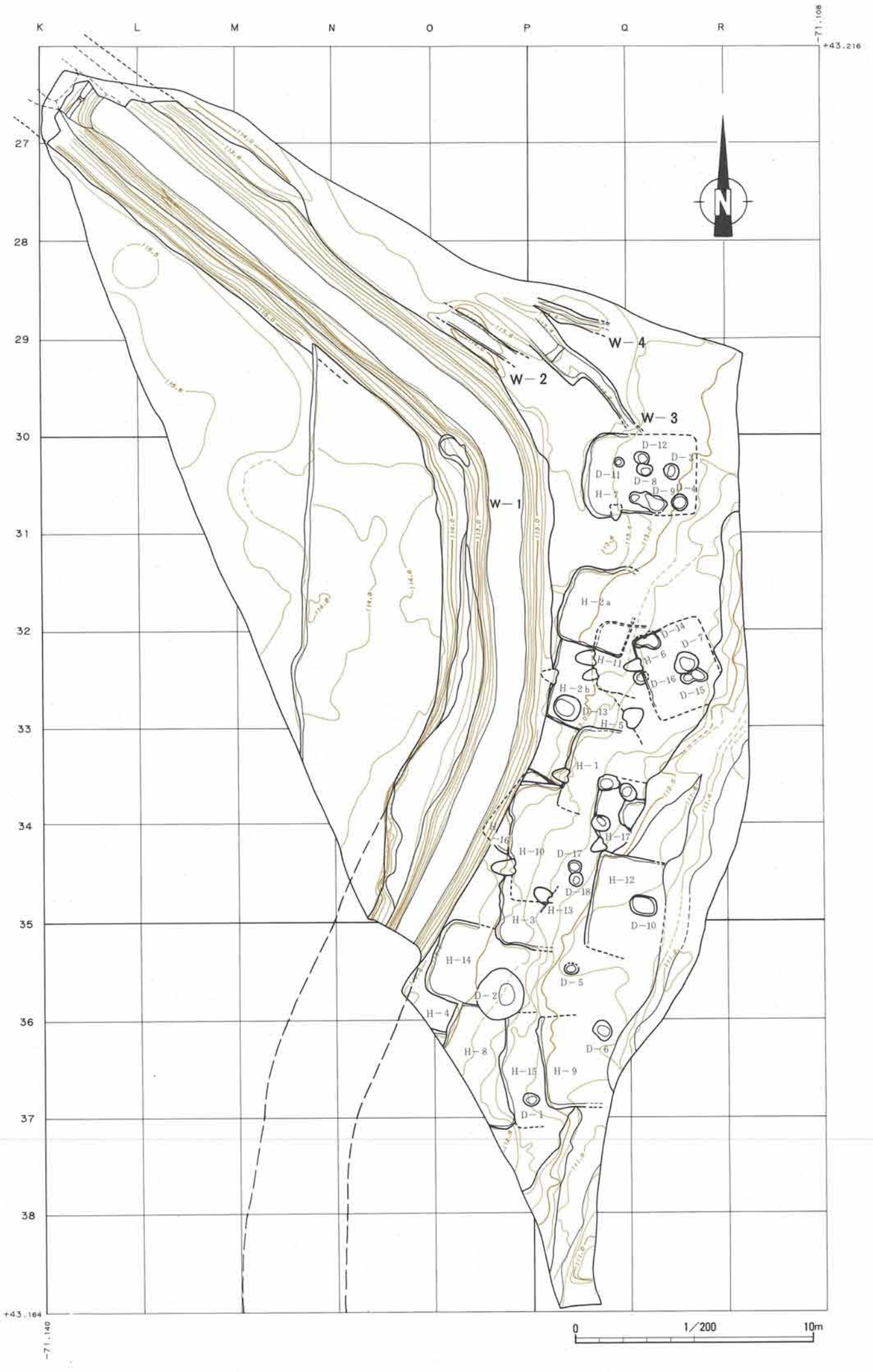


Fig. 27　元総社明神遺跡　Zトレンチ全体図

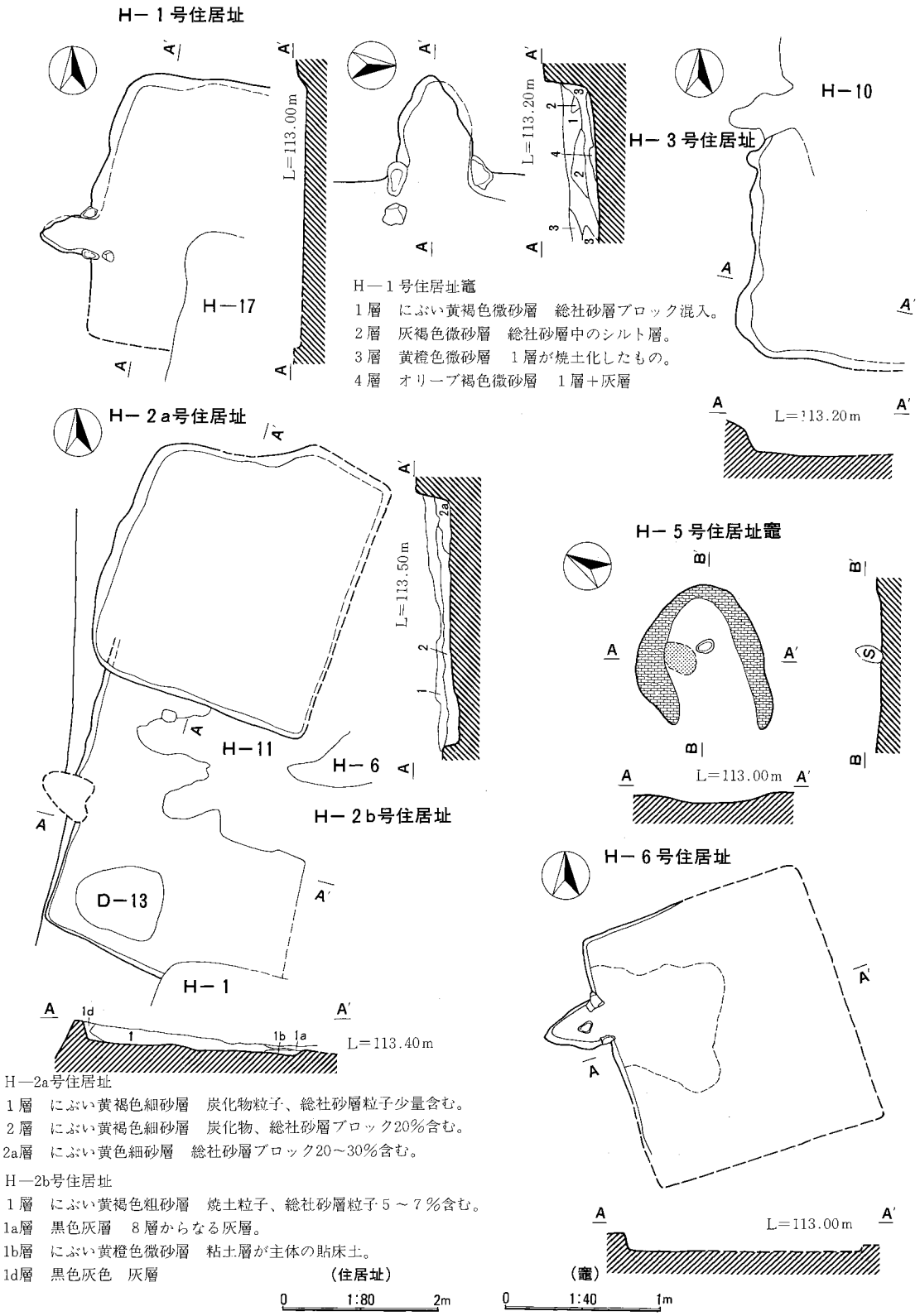


Fig. 28　2トレンチ遺構図（1）

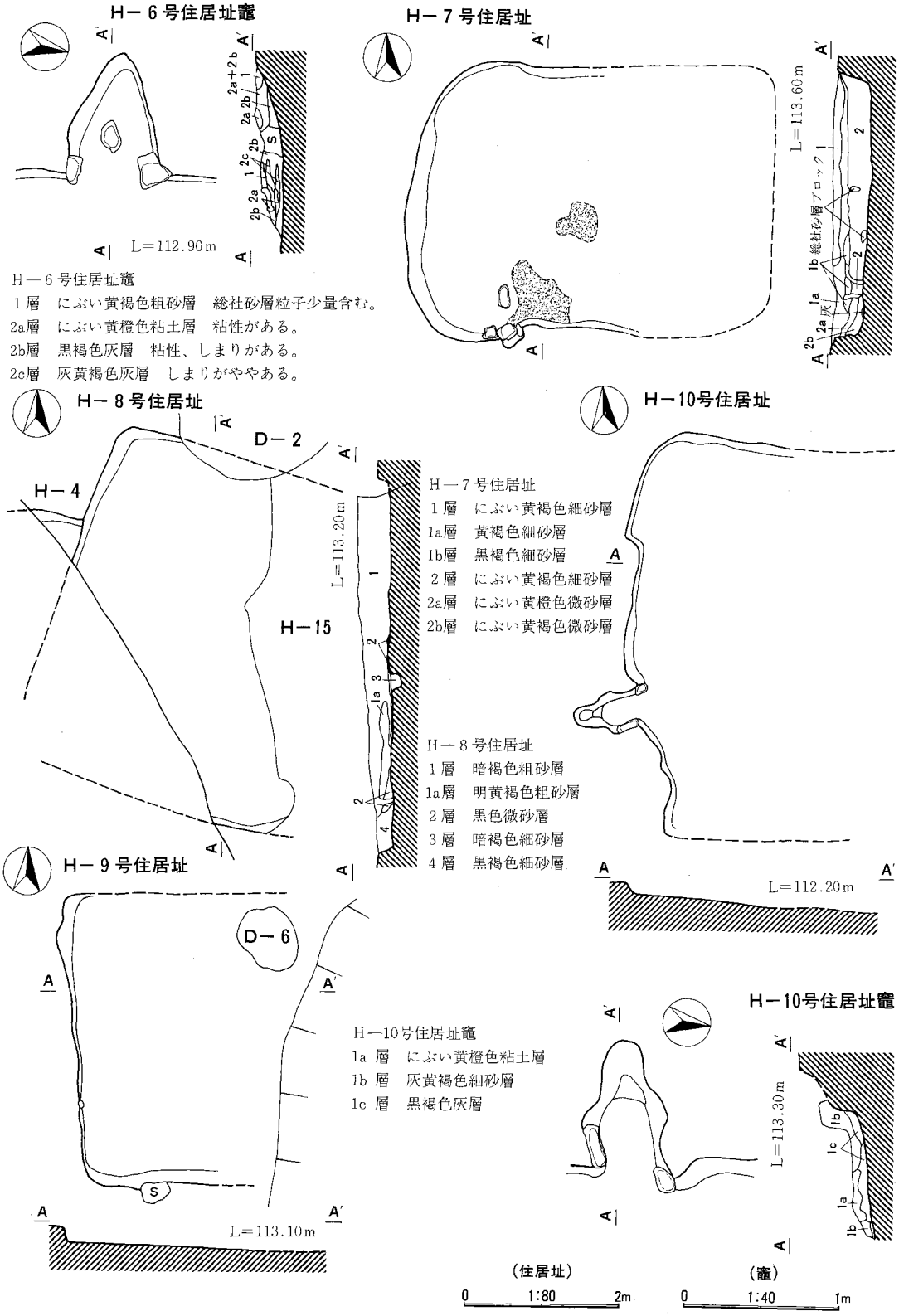
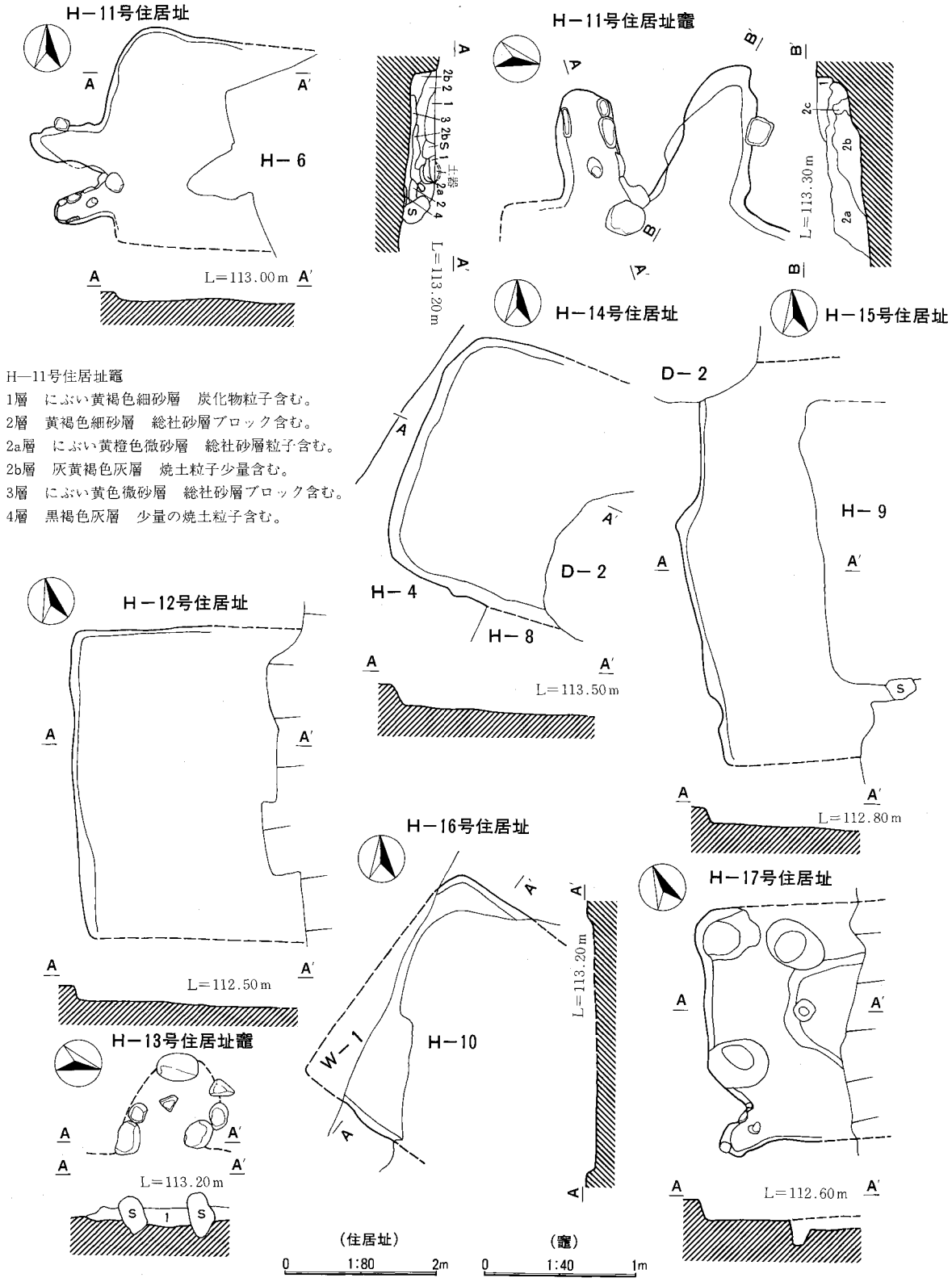
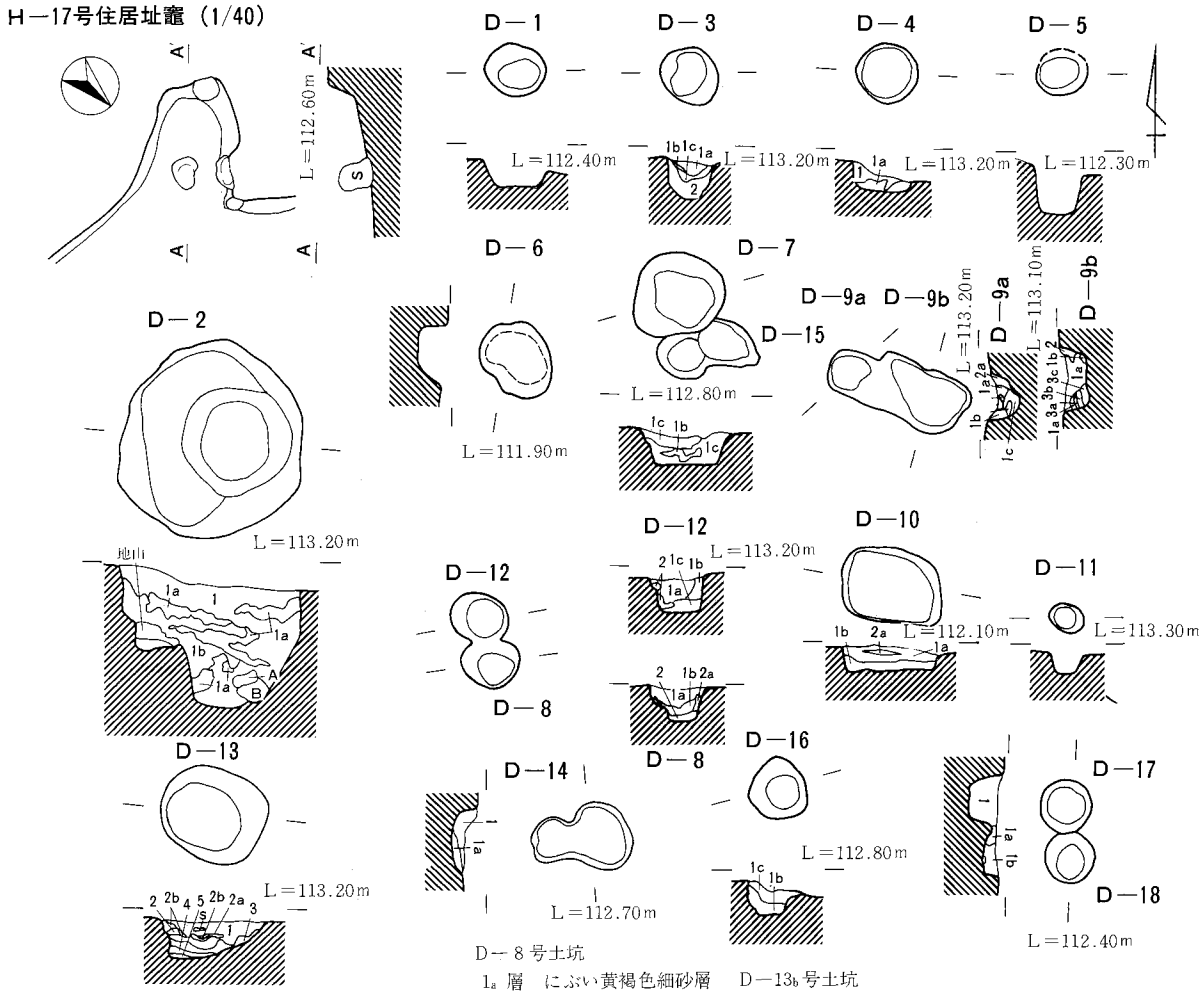


Fig. 29　Zトレンチ遺構図（2）



H—11号住居址竈
1層　にぶい黄褐色細砂層　炭化物粒子含む。
2層　黄褐色細砂層　総社砂層ブロック含む。
2a層　にぶい黄橙色微砂層　総社砂層粒子含む。
2b層　灰黄褐色灰層　焼土粒子少量含む。
3層　にぶい黄色微砂層　総社砂層ブロック含む。
4層　黒褐色灰層　少量の焼土粒子含む。

Fig. 30　Zトレンチ遺構図（3）



D－2号土坑
1 層　褐色粗砂層　軽石多量に含む。
1a 層　灰黄褐色軽石層　セカンダリーのAs－B
1b 層　黄褐色微砂層　総社砂粒子少量含む。
A 層　総社砂層のシルトブロック
B 層　暗褐色のシルトブロック

D－3号土坑
1a 層　にぶい黄褐色細砂層　総社砂層粒子少量含む。
1b 層　黒褐色微砂層　灰層が主体
1c 層　灰黄褐色細砂層
2 層　にぶい黄褐色微砂層　炭化物粒子少量含む。

D－4号土坑
1層　にぶい黄褐色細砂層
2層　灰黄褐色細砂層　灰が10～15%混入。

D－7号土坑
1a 層　にぶい黄褐色細砂層　炭化物少量含む。
1b 層　にぶい黄橙色細砂層　灰多量に含む。
1c 層　にぶい黄褐色細砂層　炭化物少量含む。
2a 層　にぶい黄色粗砂層　礫多量に含む。
2b 層　浅黄色細砂層
2c 層　にぶい黄橙色細砂層　灰層

D－8号土坑
1a 層　にぶい黄褐色細砂層
1b 層　にぶい黄褐色細砂層
2a 層　灰黄色粗砂層
2b 層　浅黄色粗砂層

D－9号土坑
1a 層　にぶい黄褐色細砂層
1b 層　にぶい黄橙色微砂層
2 層　灰黄色粗砂層
3a 層　明黄褐色粗砂・礫層
3b 層　にぶい黄橙色細砂層
3c 層　にぶい黄色粗砂・礫層

D－10号土坑
1a 層　暗褐色細砂層
1b 層　暗褐色細砂層
2 層　黒褐色炭化層

D－12号土坑
1a 層　にぶい黄褐色細砂層
1b 層　にぶい黄褐色細砂層
1c 層　にぶい黄褐色細破層
2 層　にぶい黄橙色細砂層

（土坑）
0　1:80　2m

D－13b 号土坑
1 層　褐色細砂層　総社砂層粒子、炭化物少量含む。
2a 層　黒褐色灰層　灰層
2b 層　明赤褐色焼土層　焼土
2 層　にぶい黄褐色微砂層
3 層　にぶい黄褐色灰層　灰80%含む。
4 層　黒褐色灰層　灰層。
5 層　にぶい黄褐色微砂層

D－14号土坑
1 層　褐色細砂層　総社砂層ブロック、炭化物少量含む。
1a 層　1層＋炭化物ブロック

D－16号土坑
1c 層　にぶい黄褐色細砂層　炭化物少量含む。
1d 層　暗灰黄色細砂層　総社砂層粒子、炭化物少量含む。

D－17号土坑
1層　黄褐色細砂層　総社砂層粒子、炭化物粒子少量含む

D－18号土坑
1 層　黄褐色細砂層　総社砂層粒子、炭化物粒子少量含む。
1a 層　にぶい黄褐色細砂層　1層＋総社砂層ブロック

Fig.31　Zトレンチ　遺構図（4）

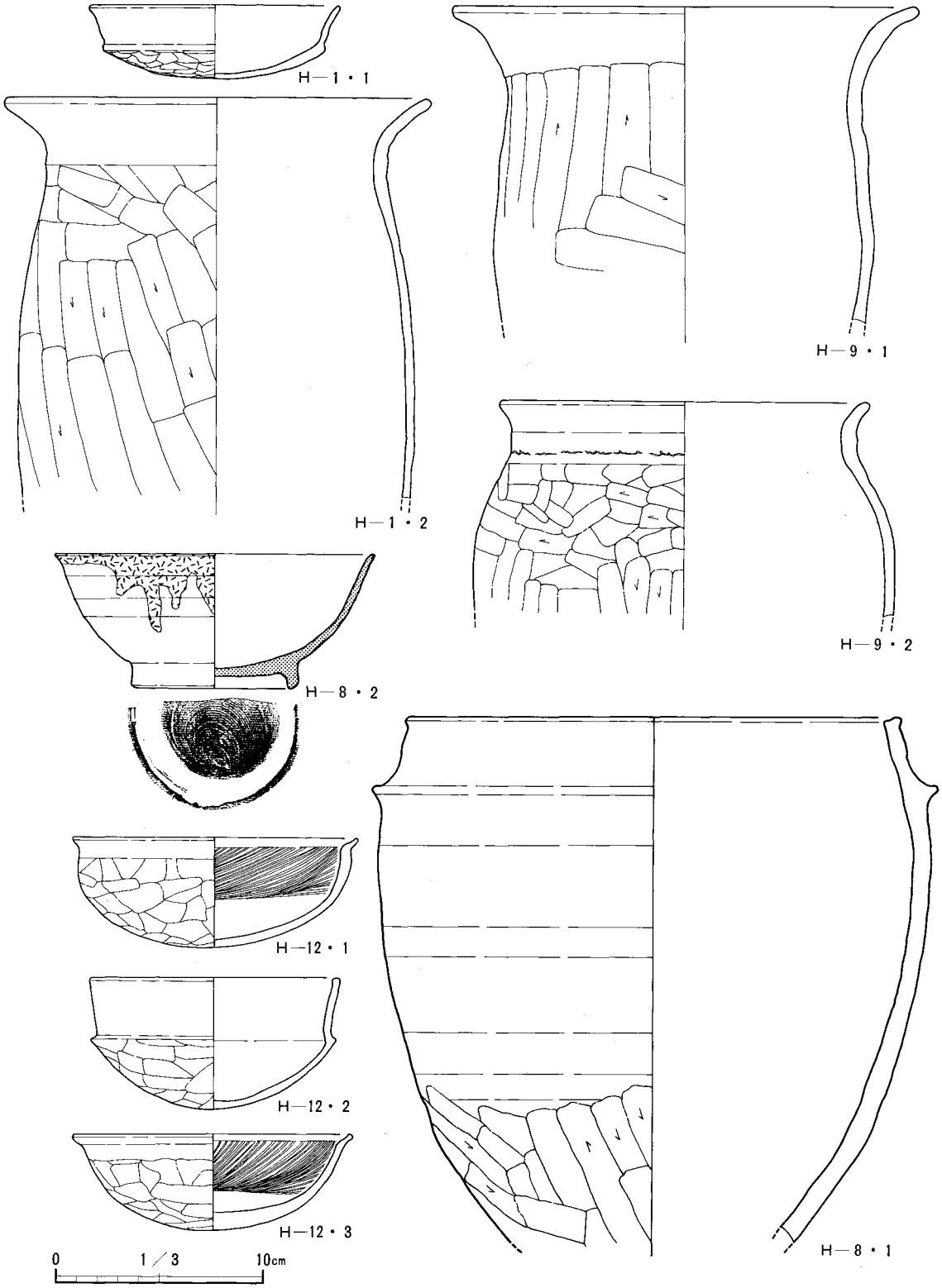


Fig.32　29トレンチ　出土遺物（1）

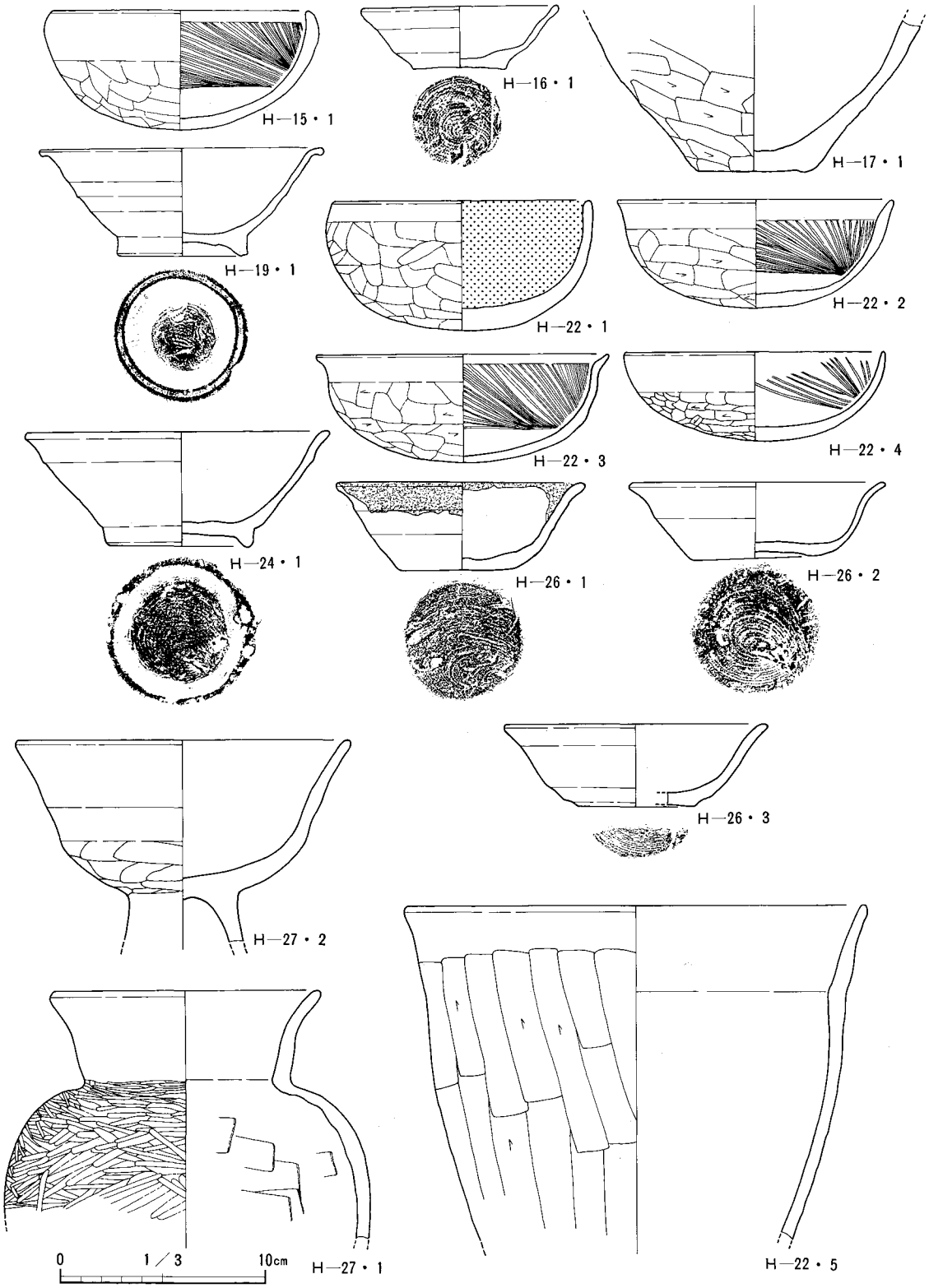


Fig.33　29トレンチ　出土遺物（２）

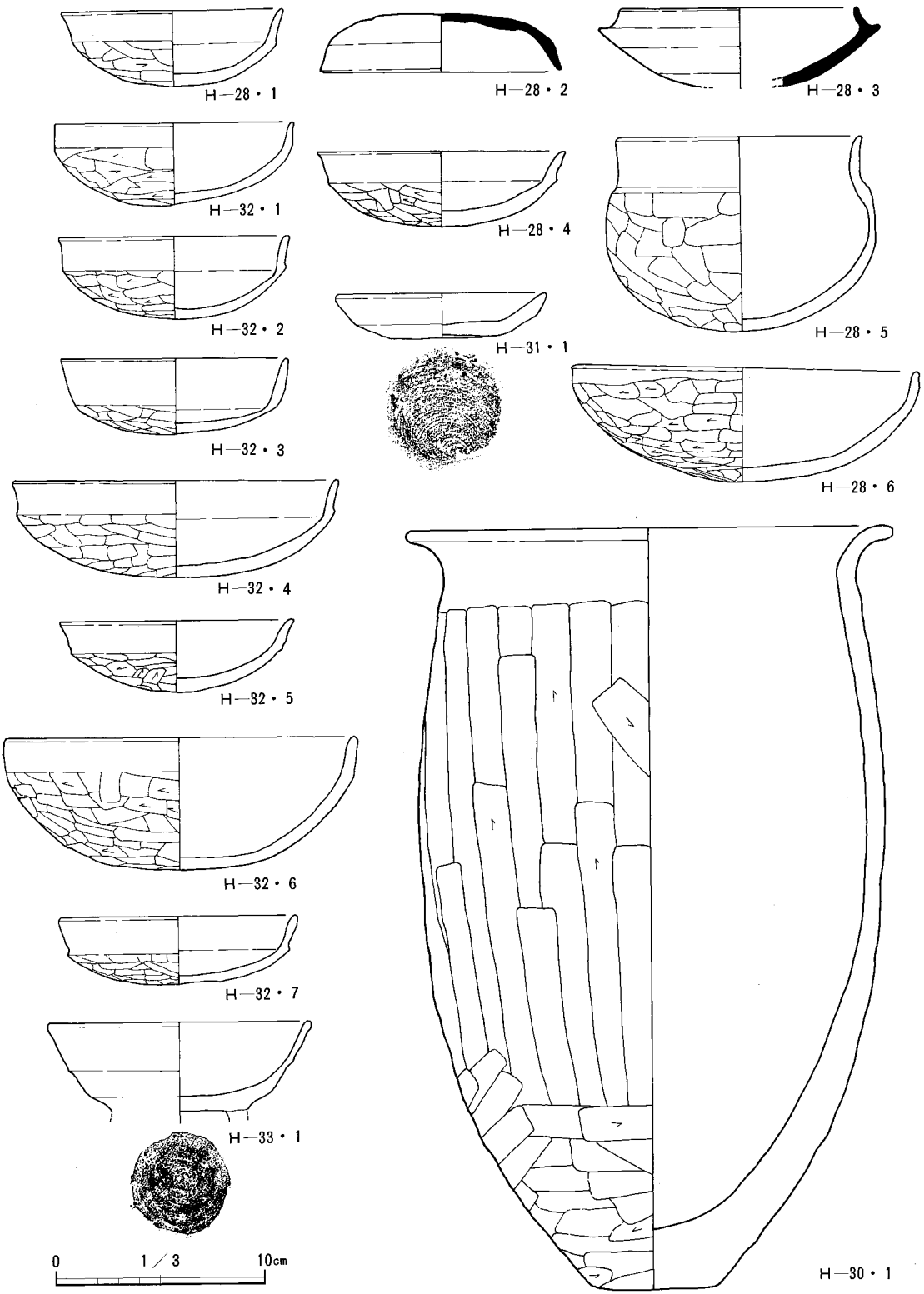


Fig.34　29トレンチ　出土遺物（3）

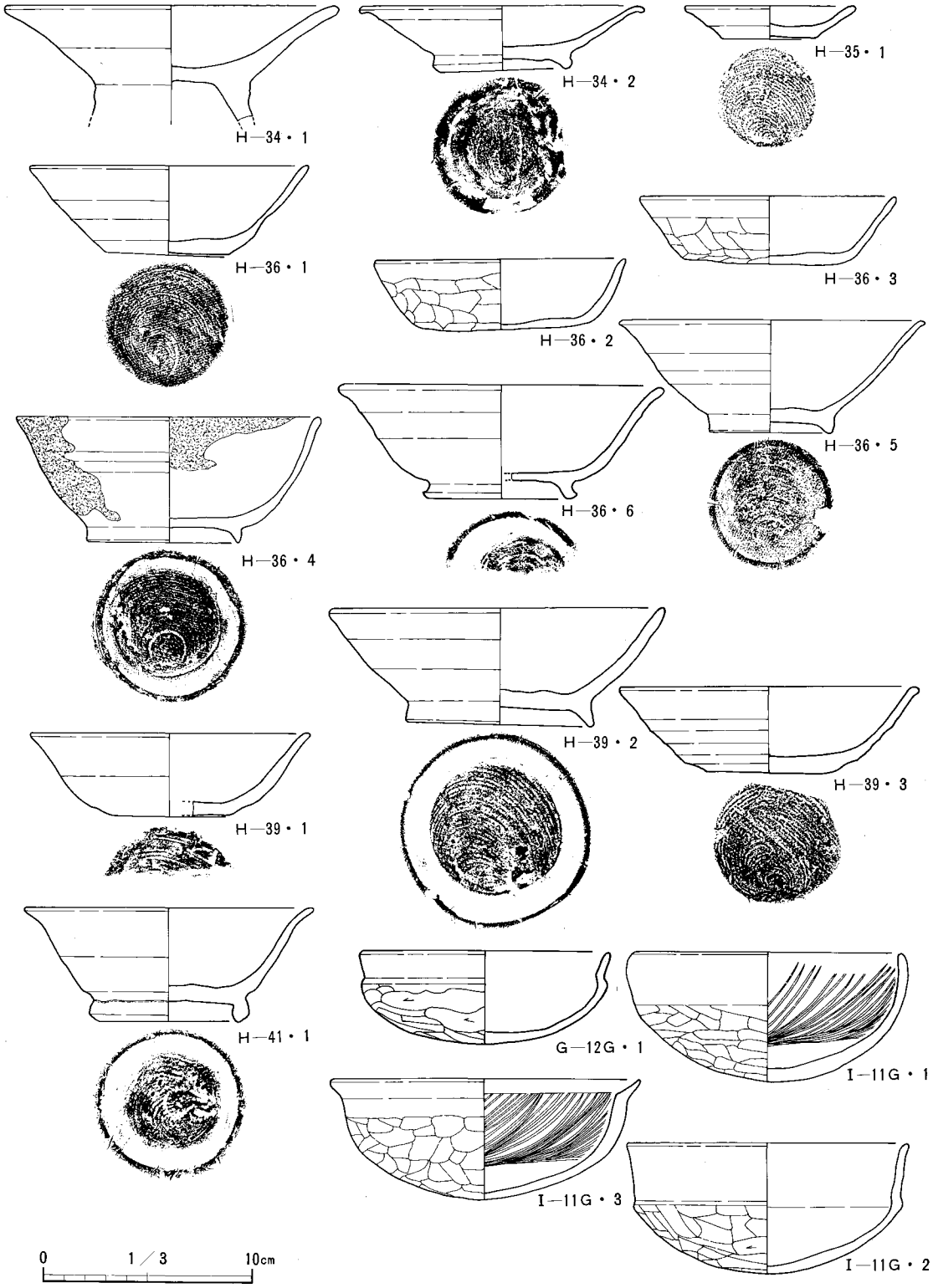


Fig.35　29トレンチ　出土遺物（4）

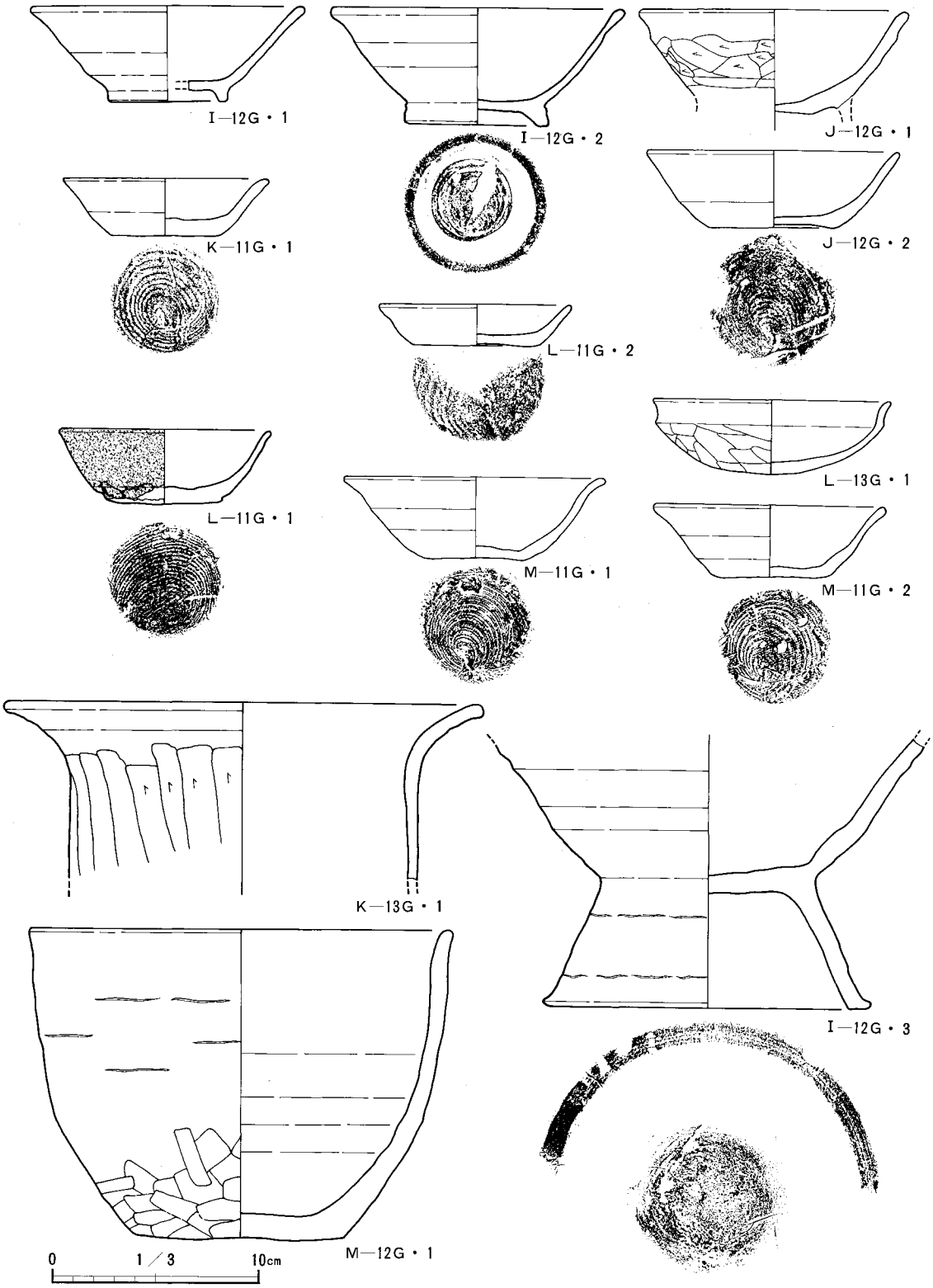


Fig.36　29トレンチ　出土遺物（5）

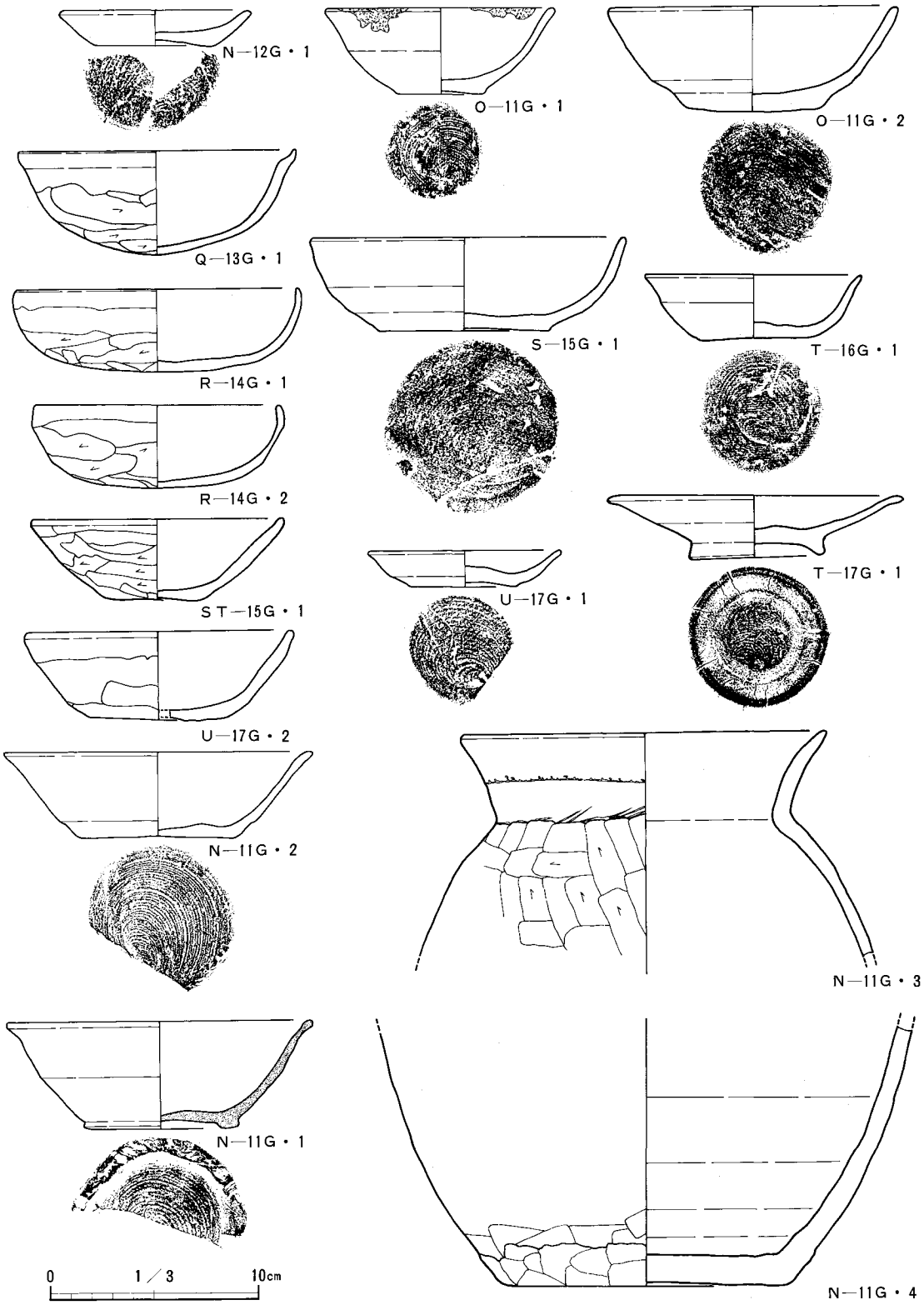


Fig.37　29トレンチ　出土遺物（6）

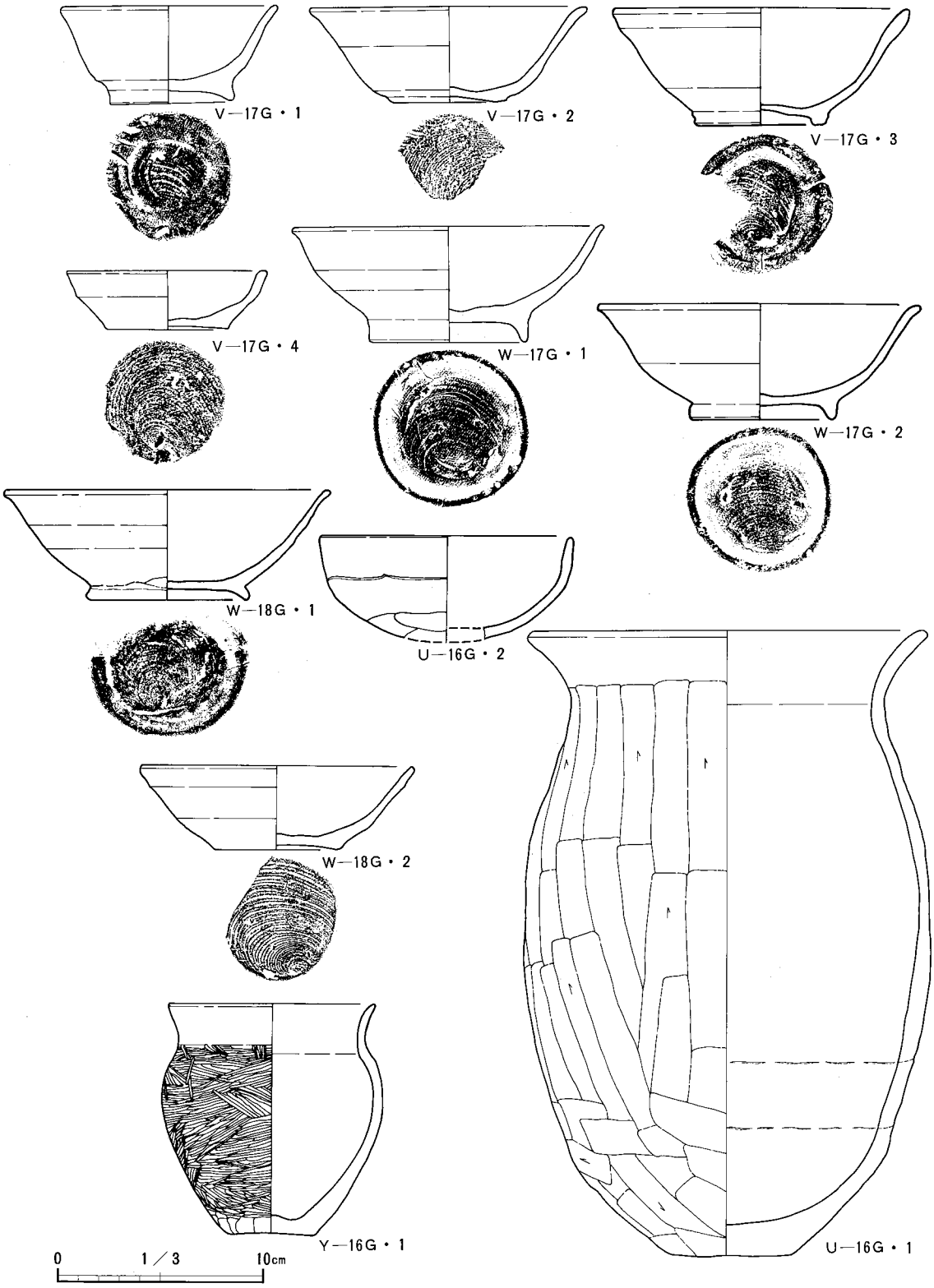


Fig.38　29トレンチ　出土遺物（7）

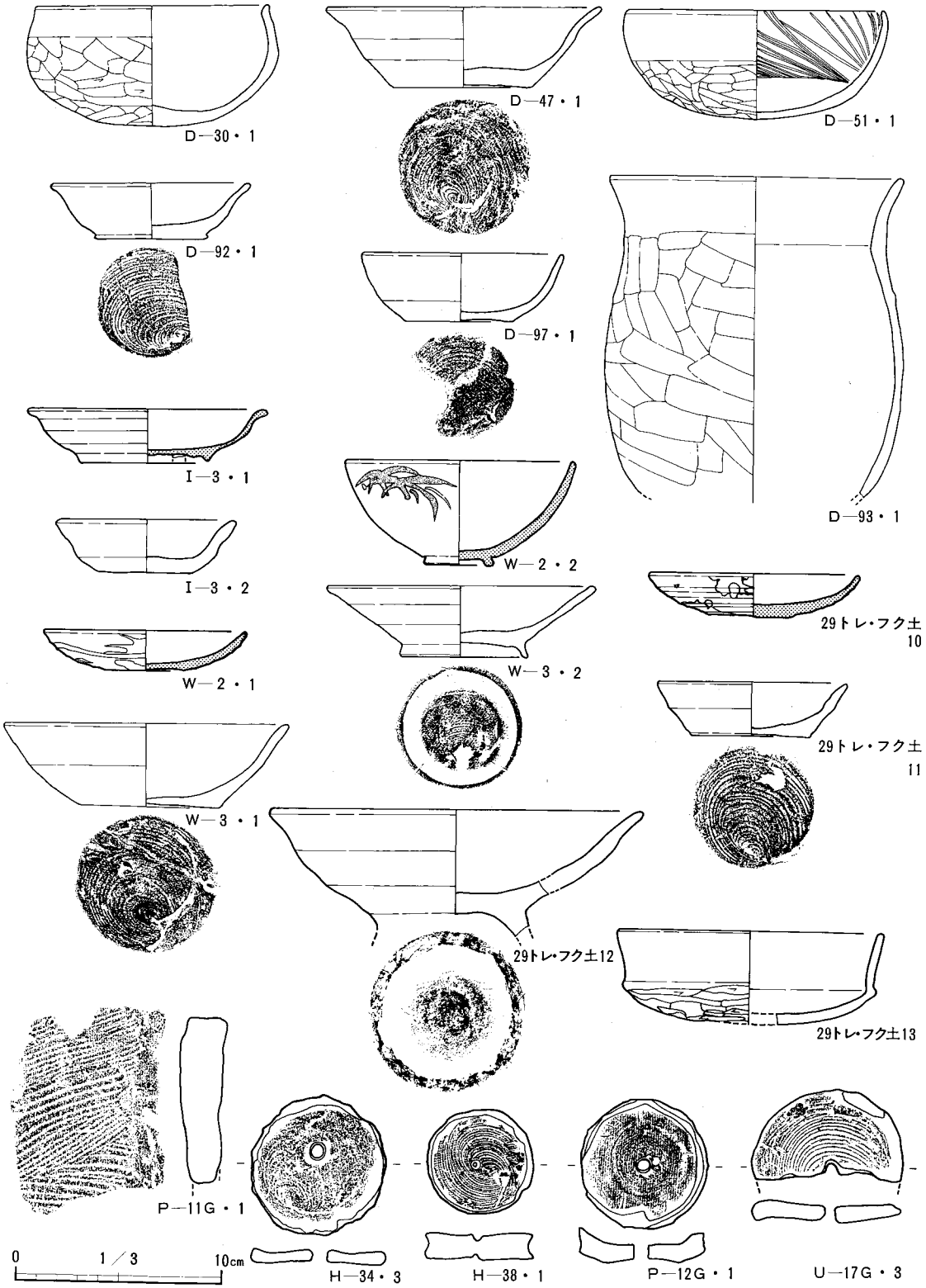


Fig.39　29トレンチ　出土遺物（8）

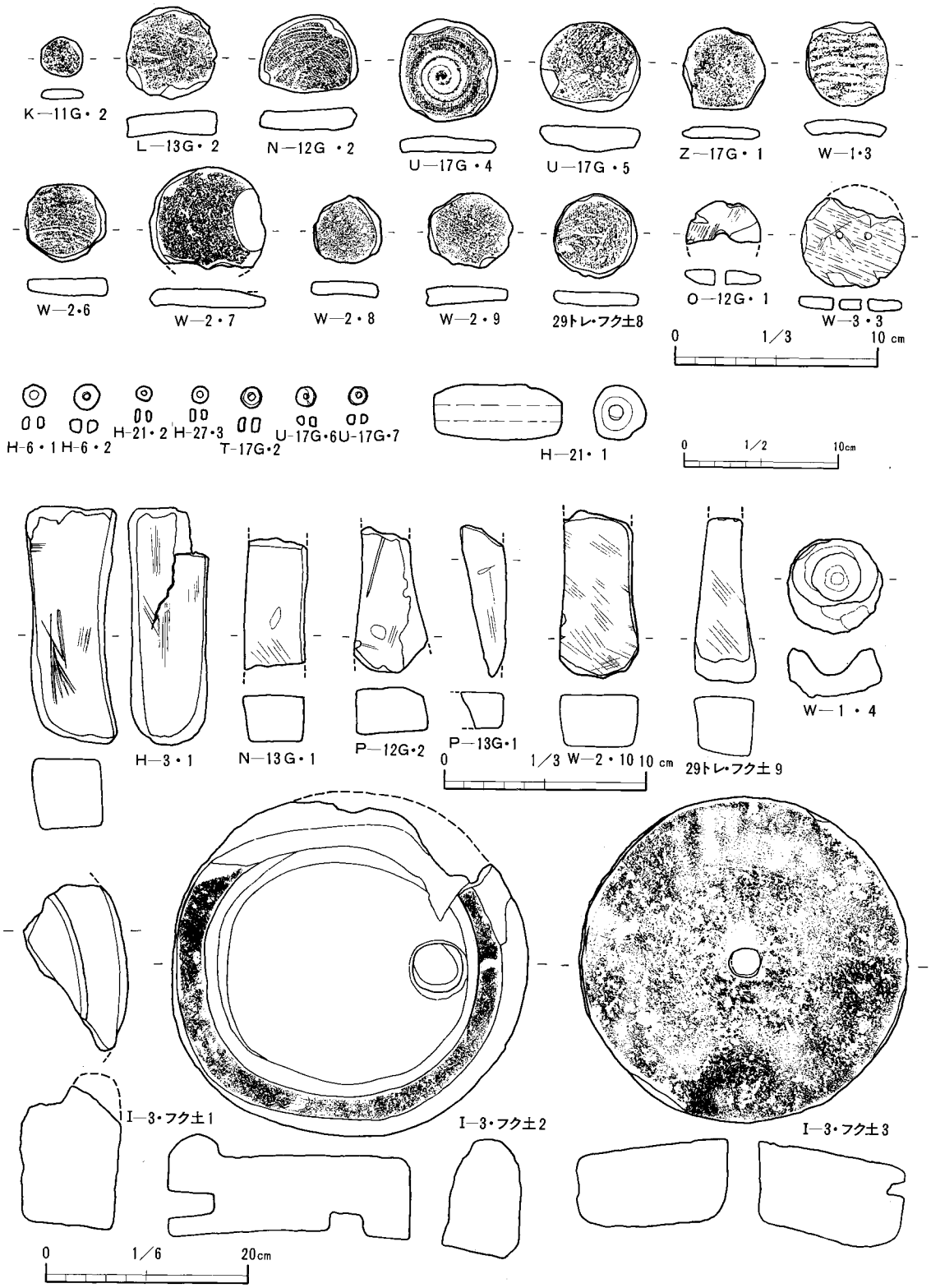


Fig.40　29トレンチ　出土遺物（9）

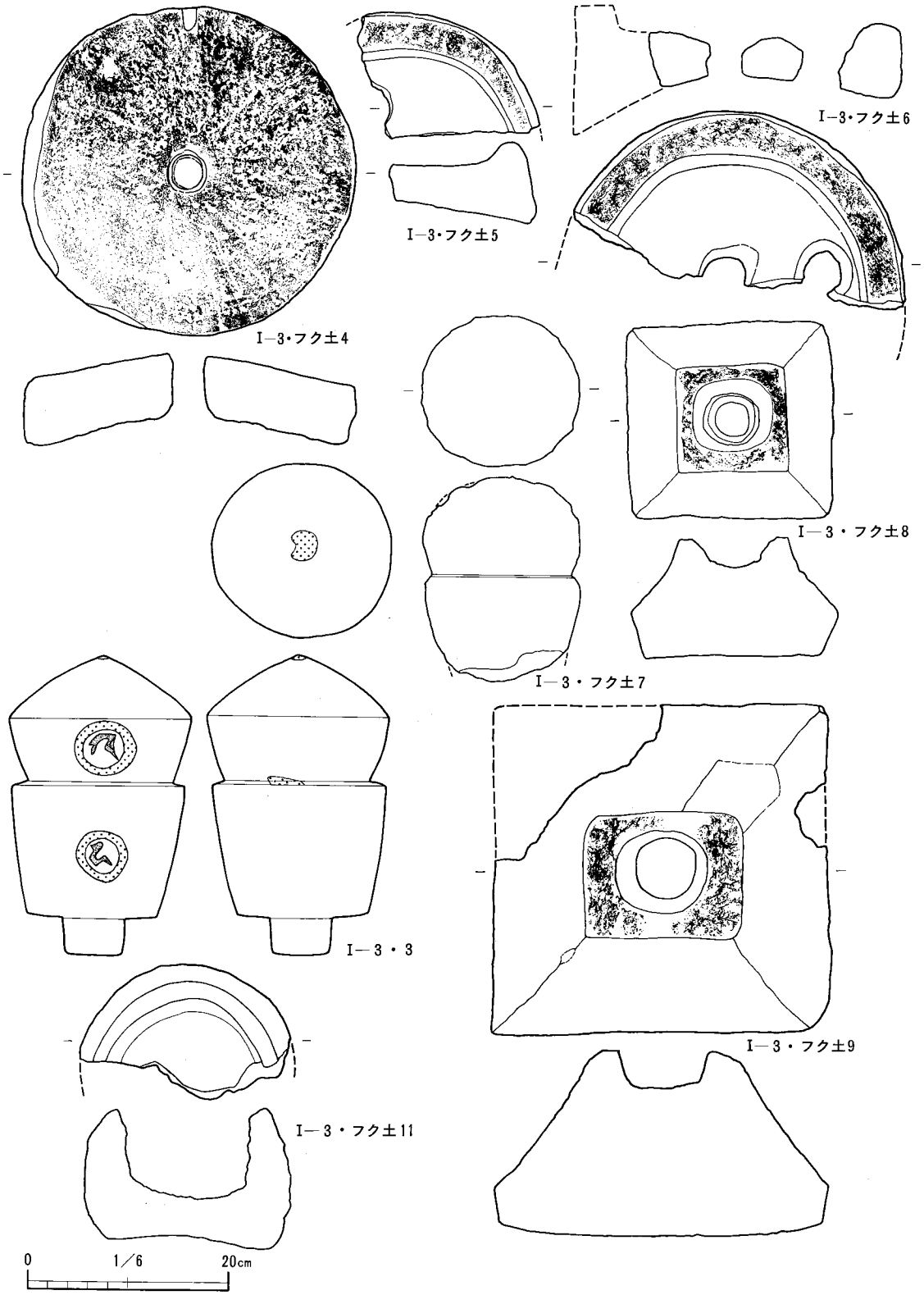


Fig.41　29トレンチ　出土遺物（10）

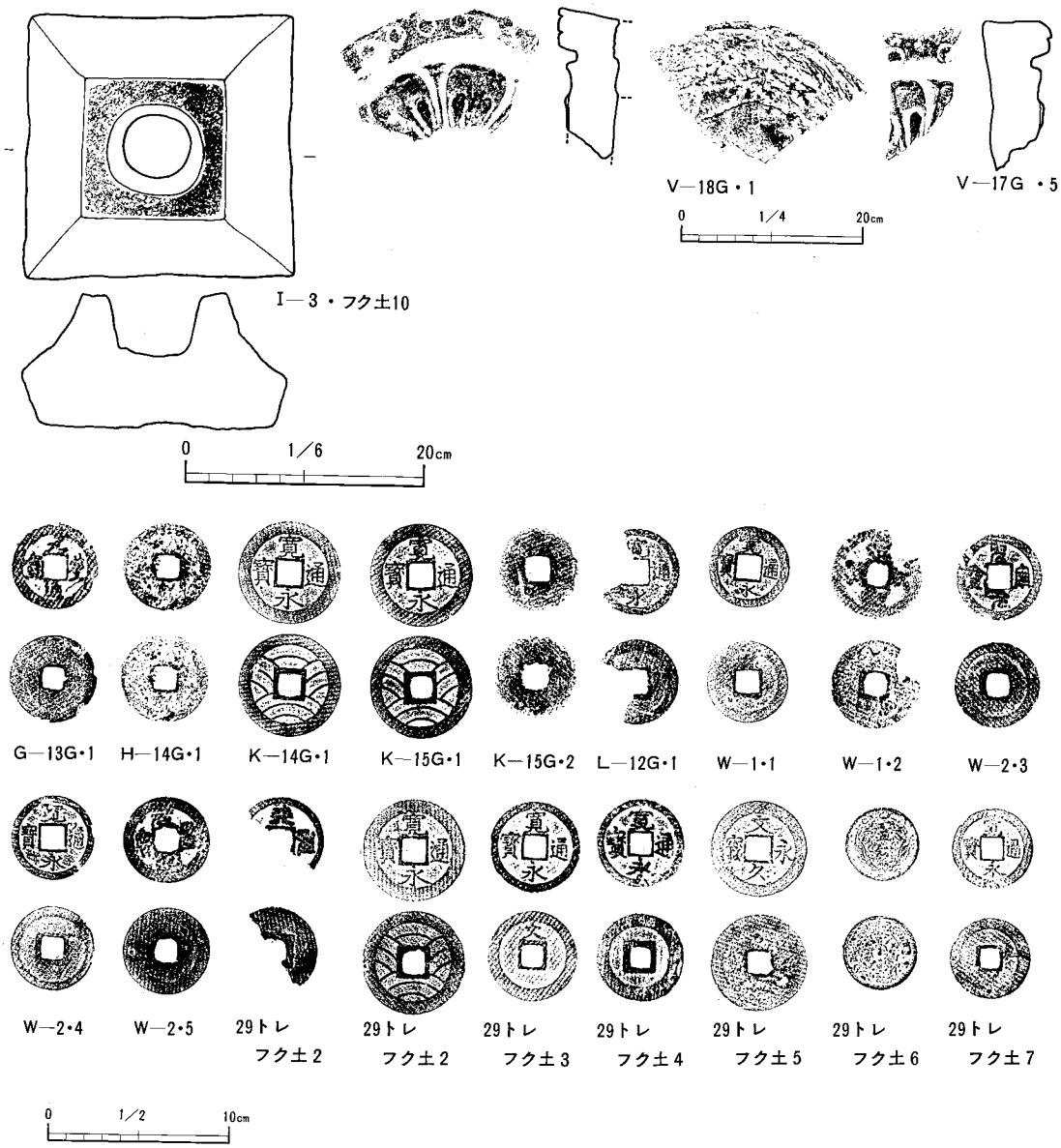


Fig.42　29トレンチ　出土遺物（11）

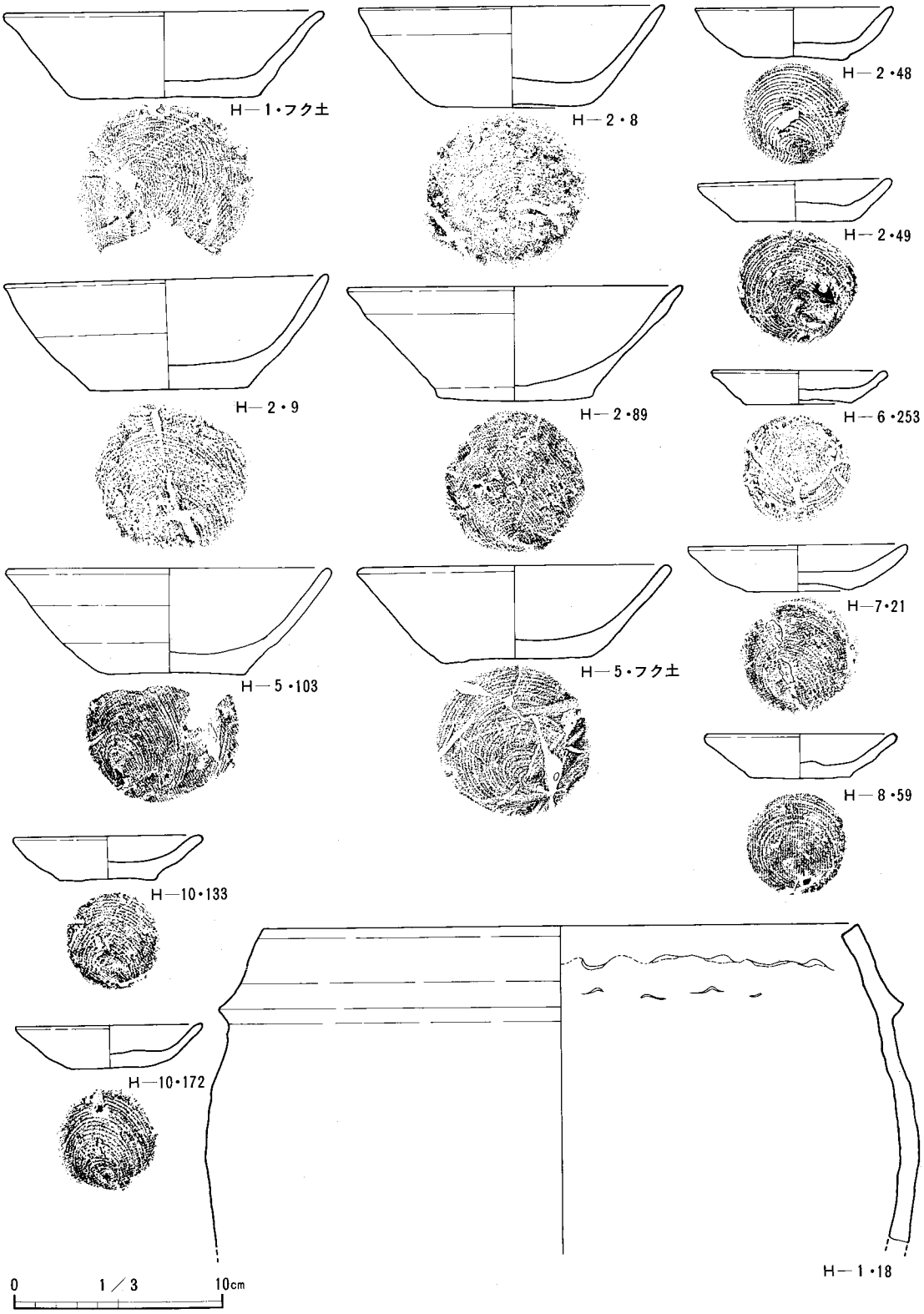


Fig.43　Zトレンチ　出土遺物（1）

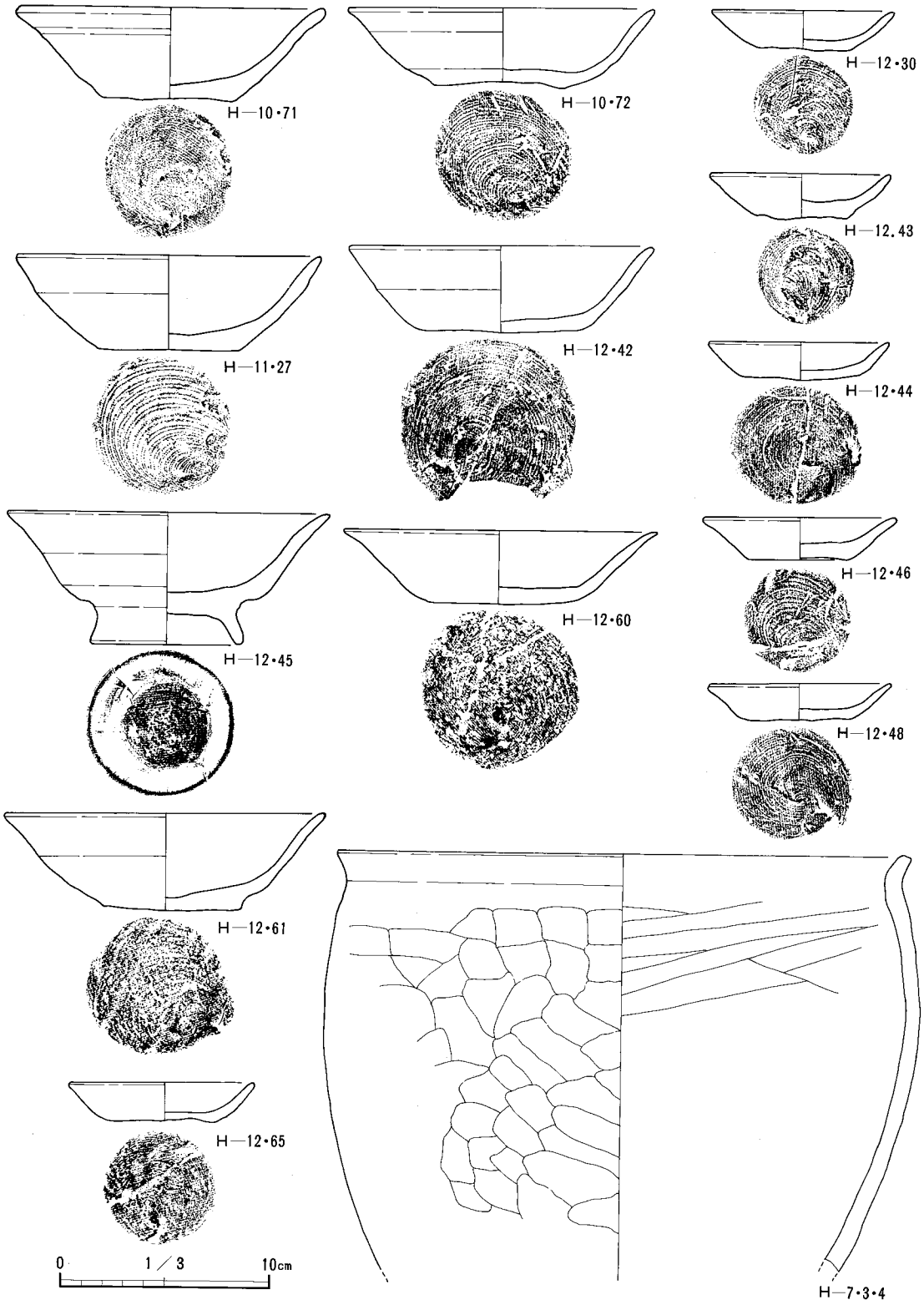


Fig.44　Zトレンチ　出土遺物（2）

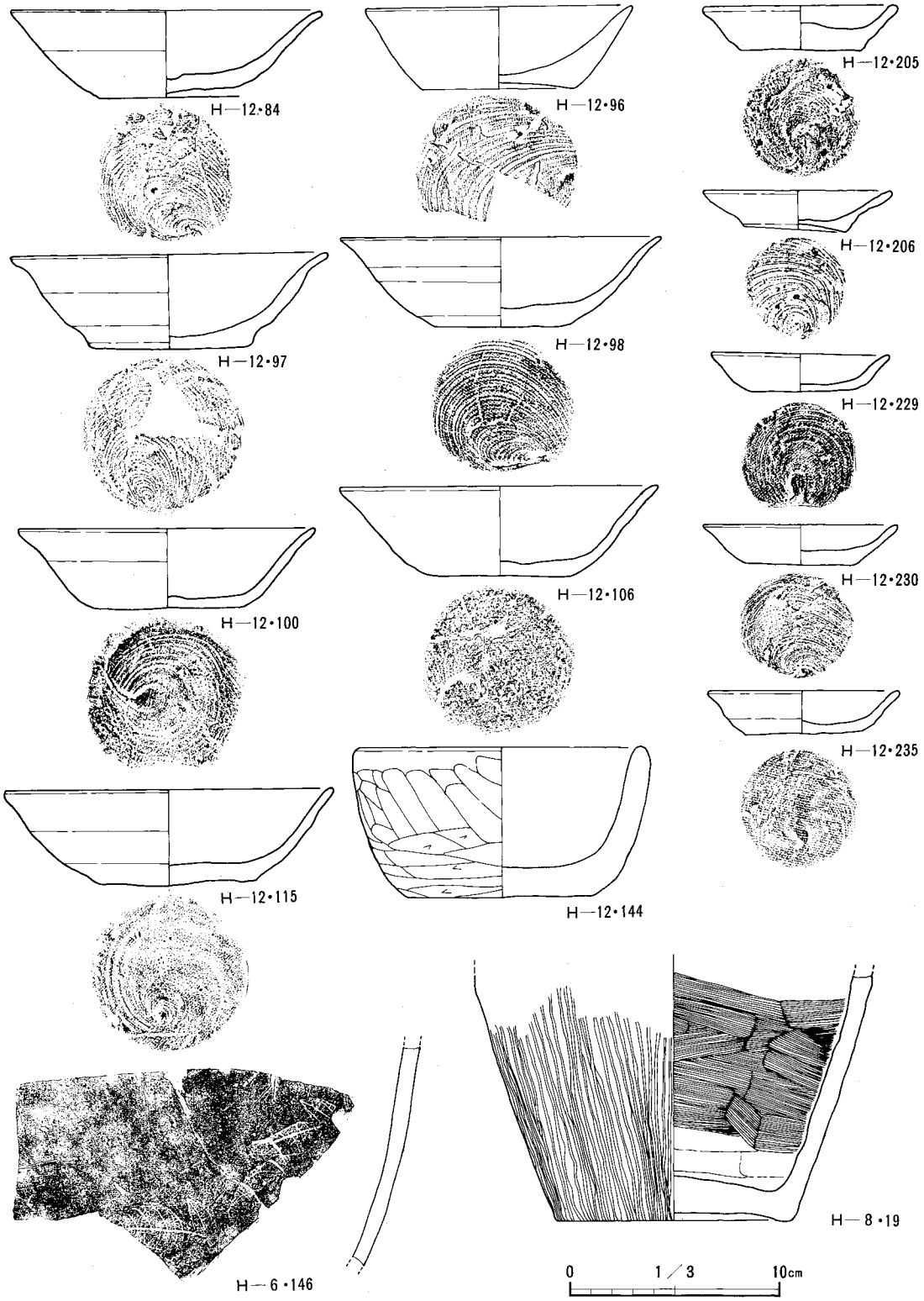


Fig.45　Zトレンチ　出土遺物（3）

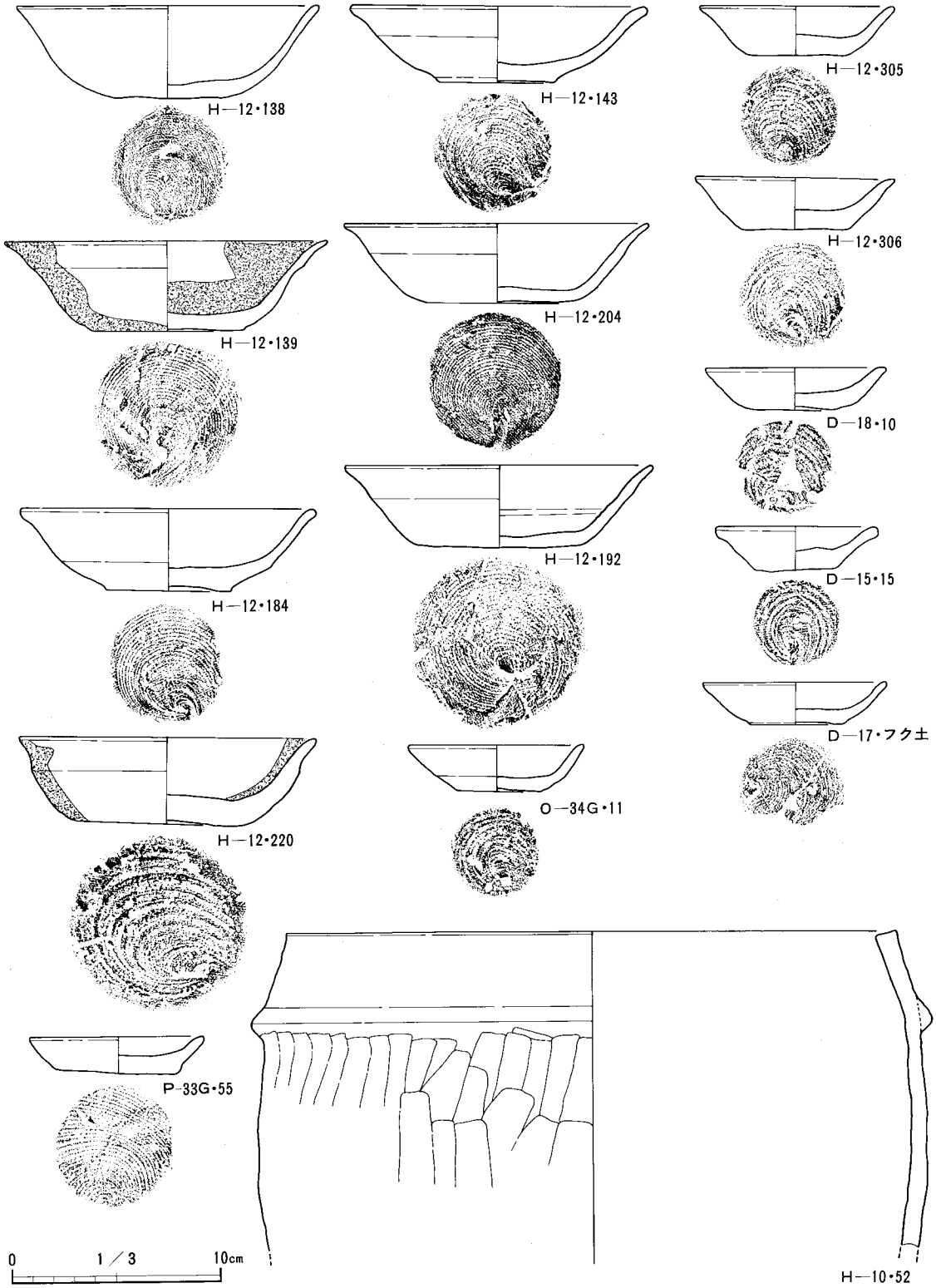


Fig.46　Zトレンチ　出土遺物（4）

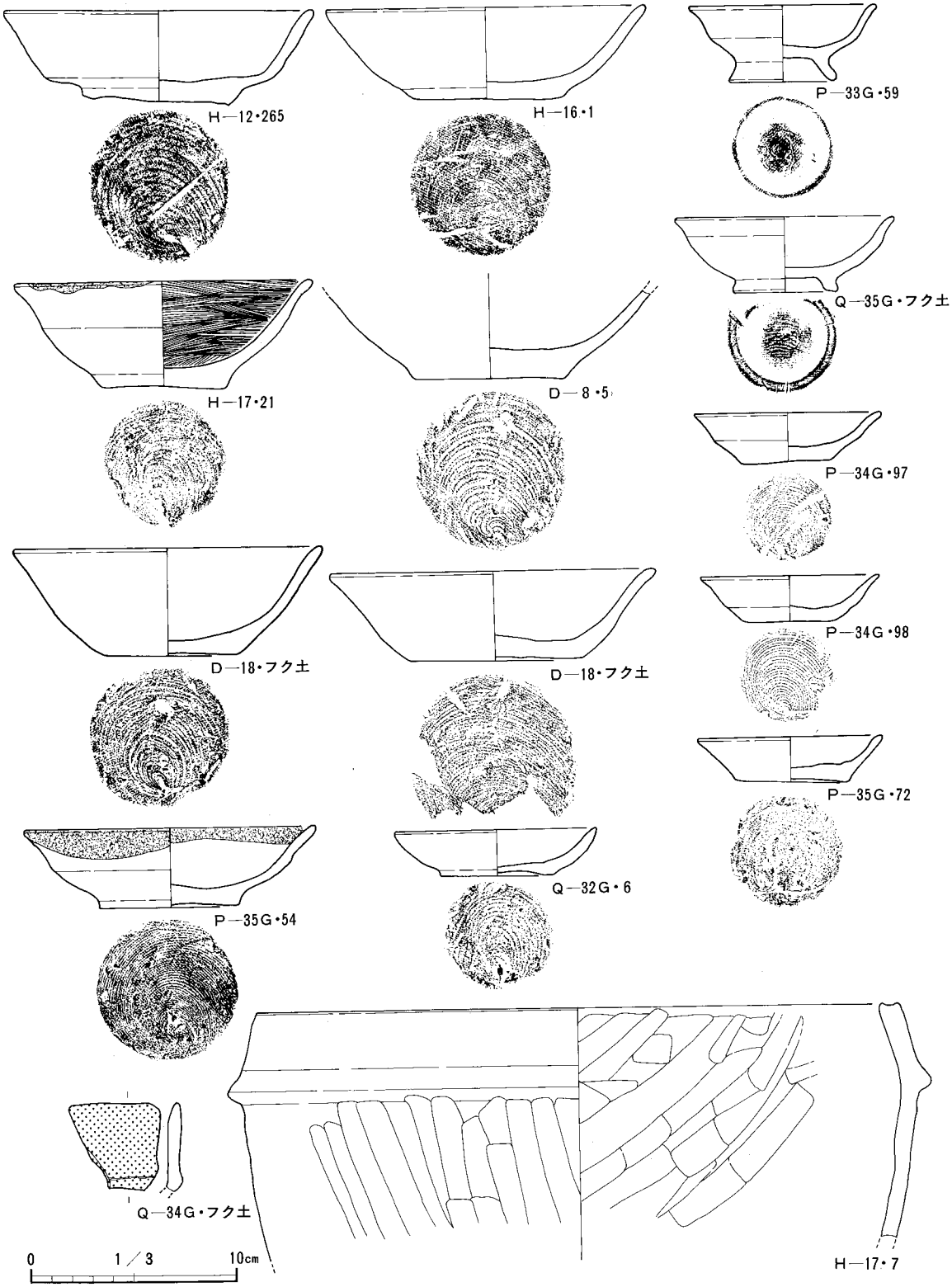


Fig.47　Zトレンチ　出土遺物（5）

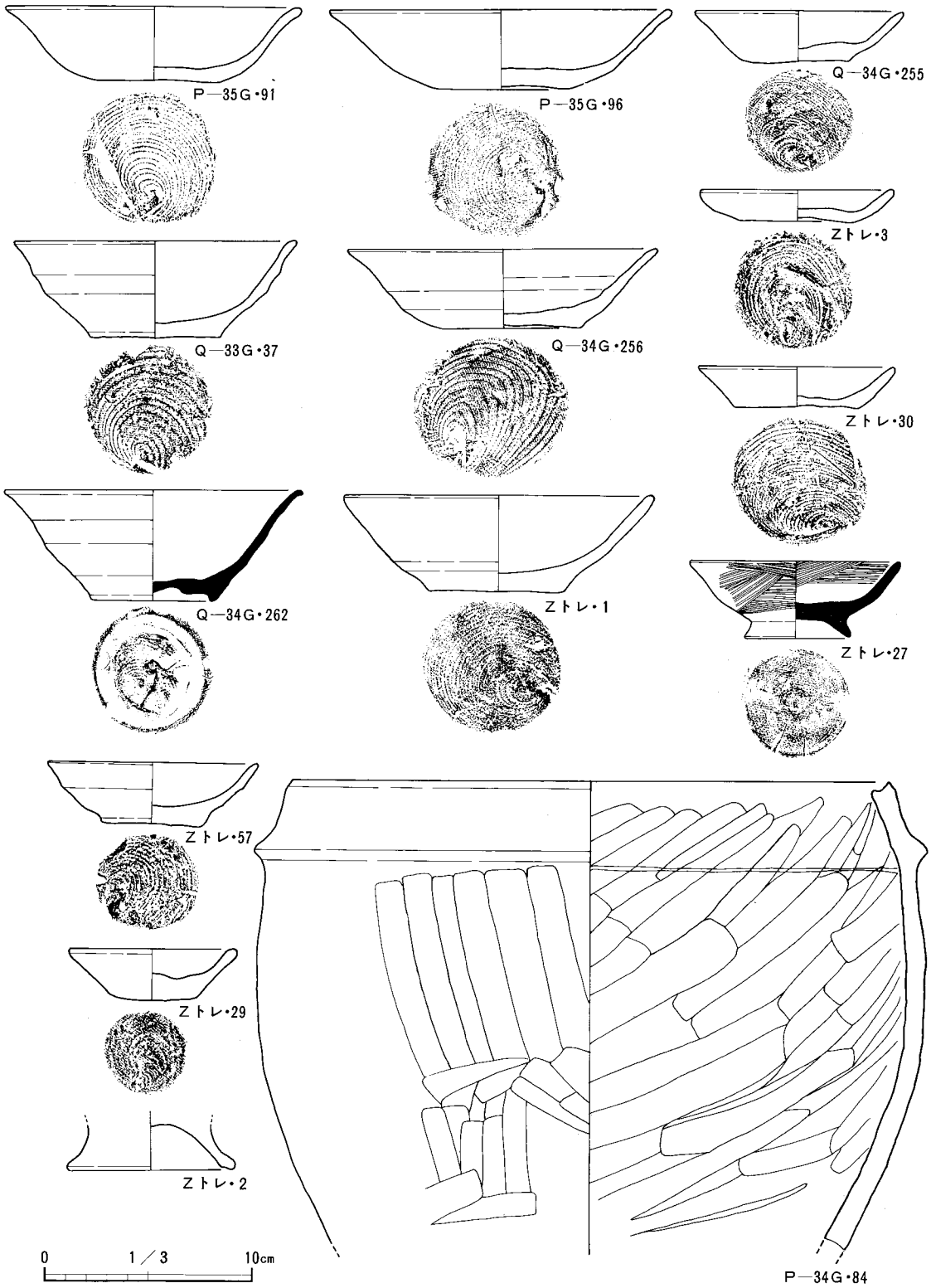


Fig.48　Zトレンチ　出土遺物（6）

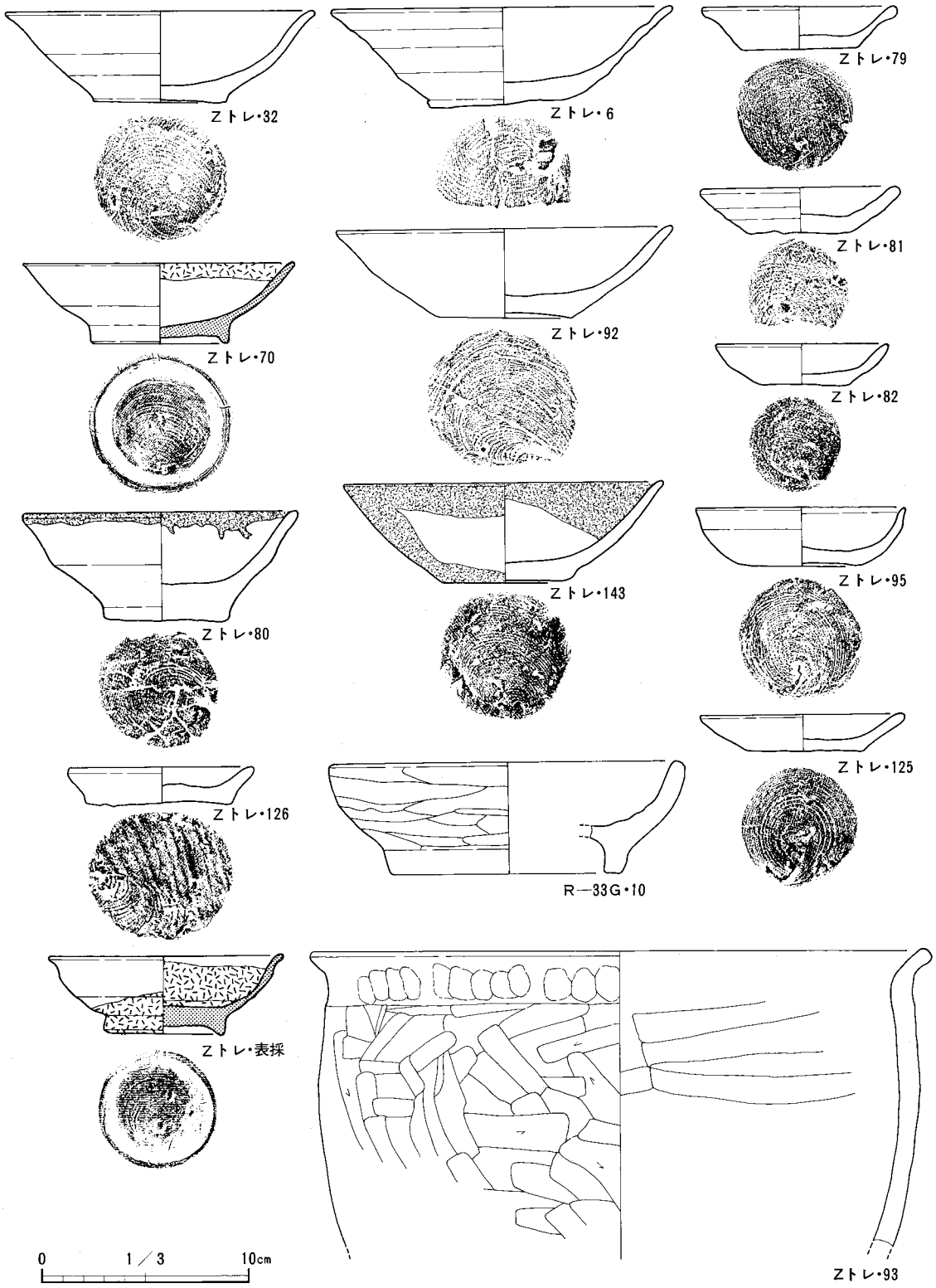


Fig.49　Zトレンチ　出土遺物（7）

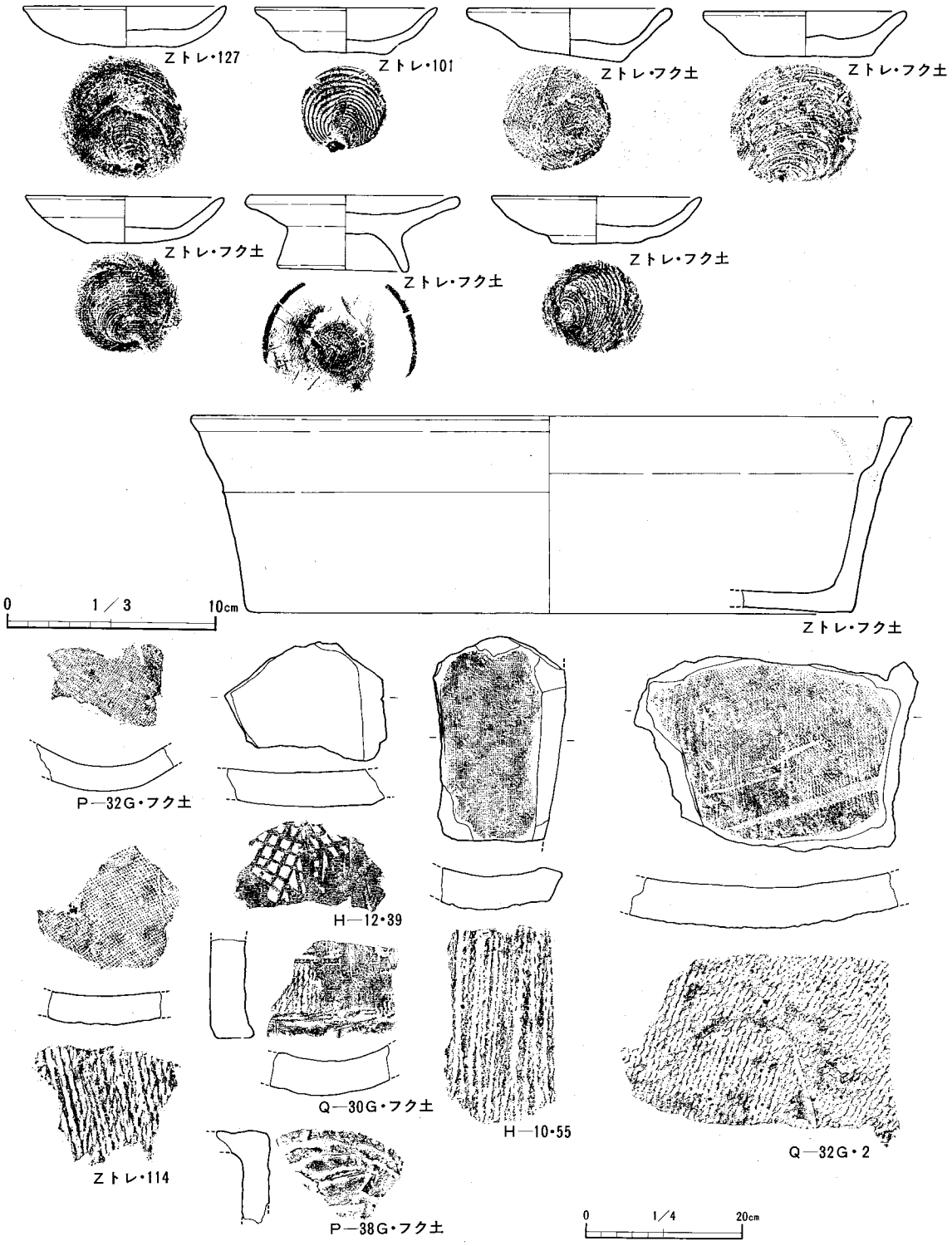


Fig.50　Zトレンチ　出土遺物（8）

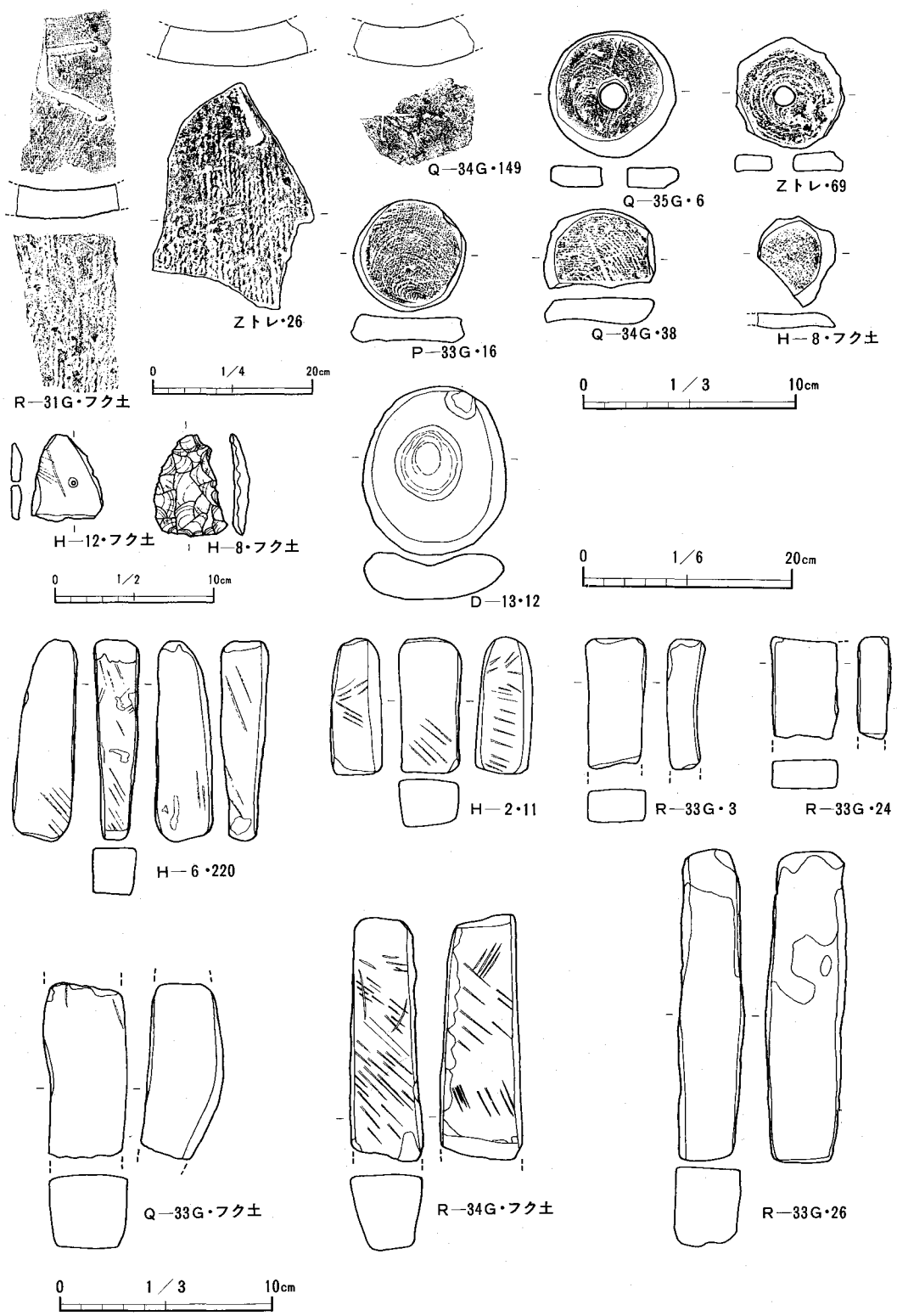


Fig.51　Zトレンチ　出土遺物（9）

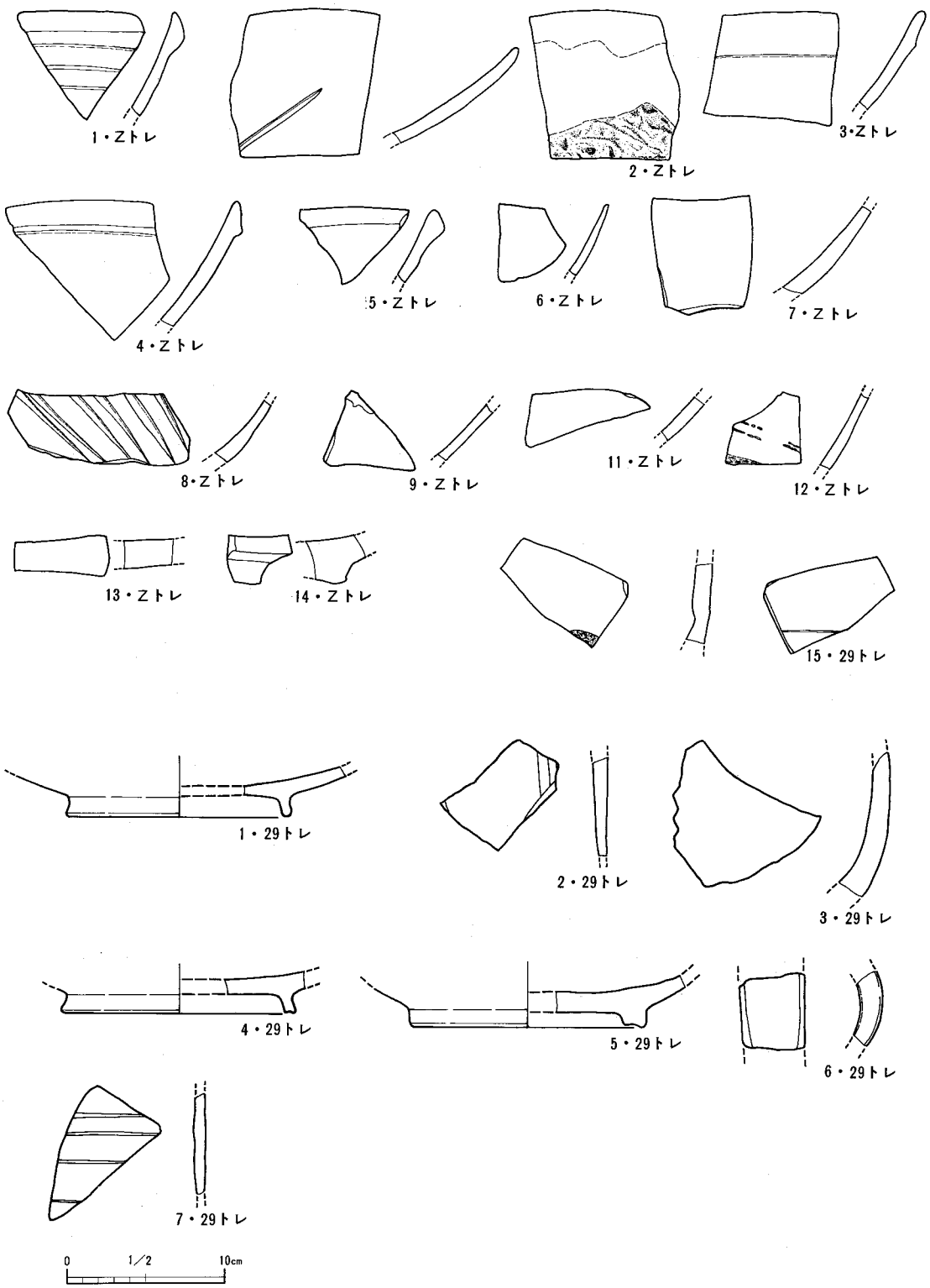


Fig.52　29・Z　トレンチ　白磁・緑袖

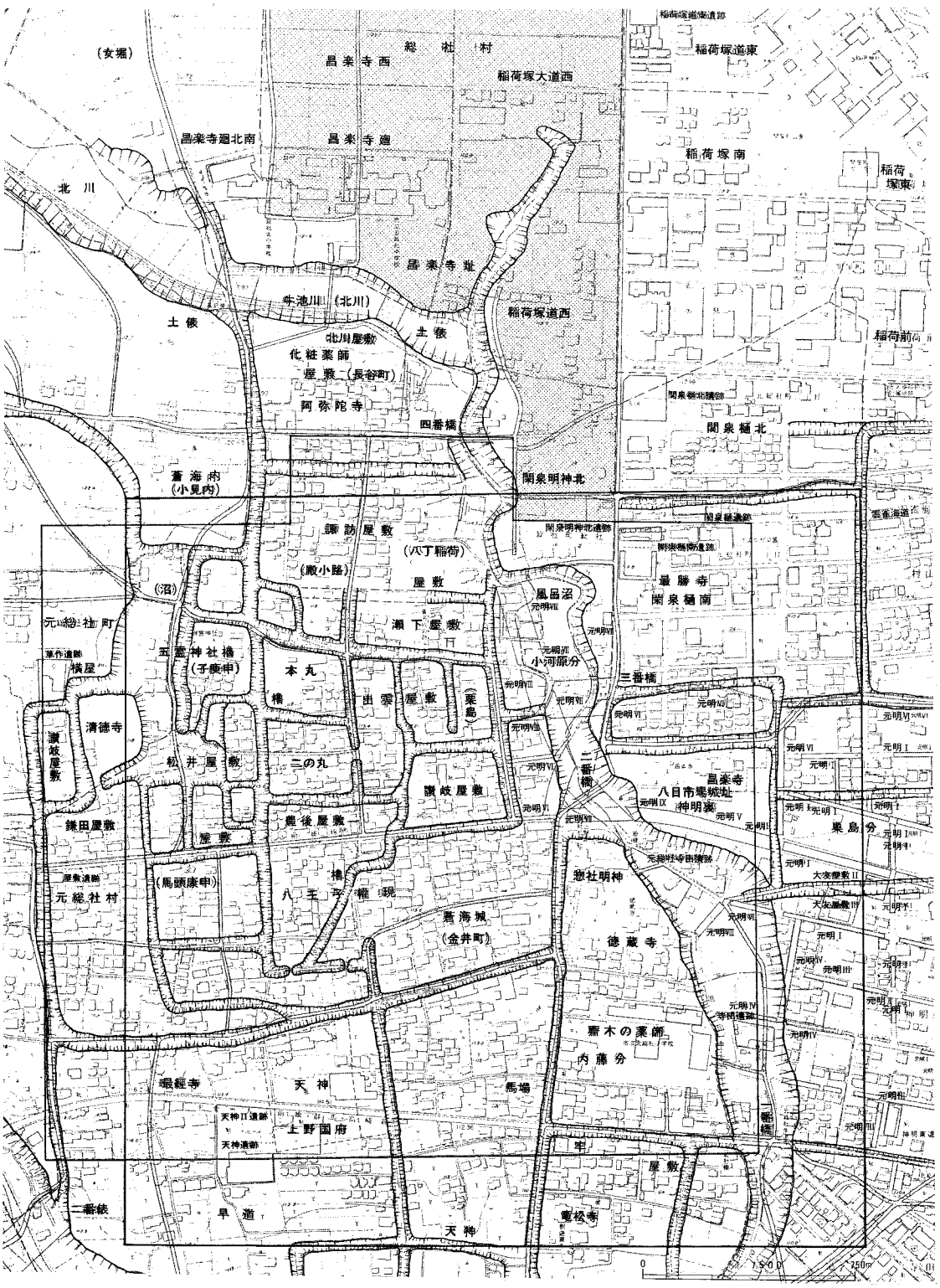


Fig. 53　元総社地区遺跡地周辺旧状想定図（「財団法人　群馬県埋蔵文化財調査事業団」提供　一部加筆修正）

1.　29トレンチ全景（西より）

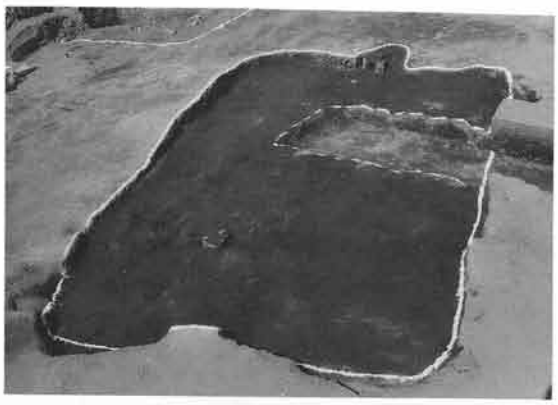
2.　29トレンチ全景（東より）

3.　29トレンチW-2号溝、S-1号防空壕（南より）

4.　29トレンチW-1号溝（南より）

5.　29トレンチW-4号溝（西より）

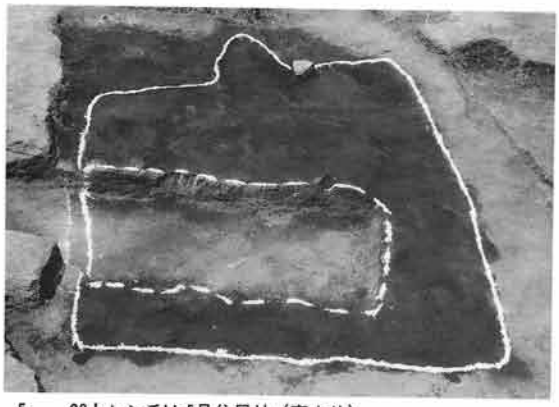
1.　29トレンチH-1号住居址竈（東より）



2.　29トレンチH-2号住居址（西より）

3.　29トレンチH-2、3、4号住居址（南より）

4.　29トレンチH-4号住居址（西より）

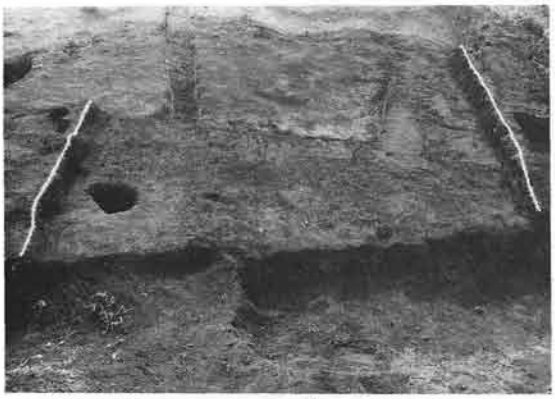


5.　29トレンチH-5号住居址（東より）

6.　29トレンチH-6号住居址（東より）

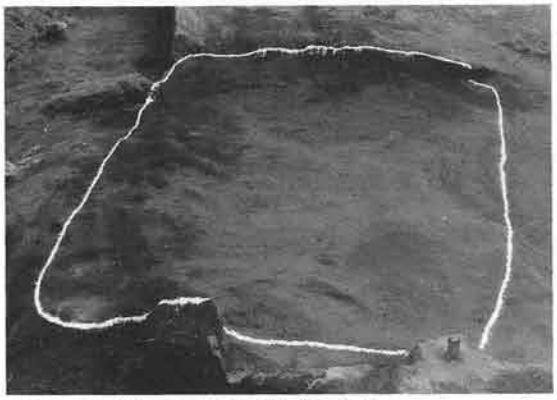
7.　29トレンチH-8号住居址（西より）

8.　29トレンチH-8号住居址遺物出土状態

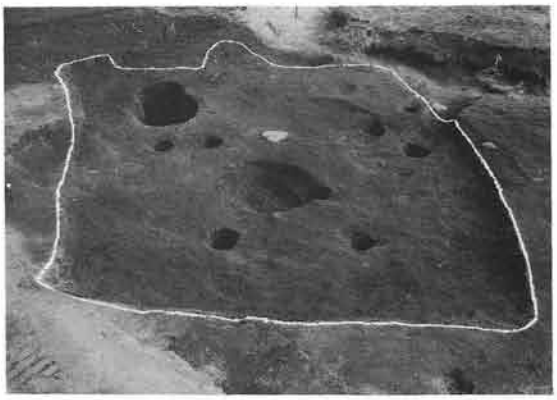


1．　29トレンチH-12号住居址（東より）

2．　29トレンチH-12号住居址遺物出土状態



3．　29トレンチH- 4号住居址（西より）



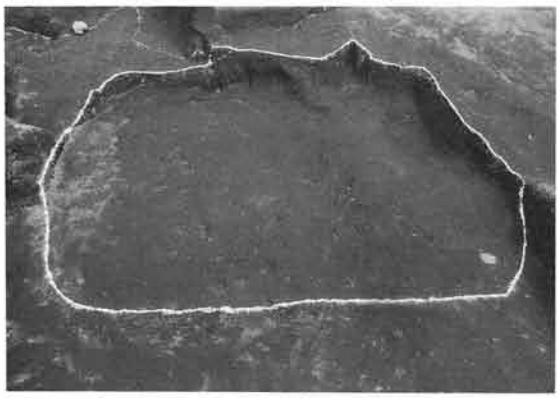
4．　29トレンチH-15号住居址（西より）

5．　29トレンチH-16号住居址（東より）

6．　29トレンチI-3号井戸址（西より）

7．　29トレンチH-19号住居址遺物出土状態(北より)

8．　29トレンチH-20号住居址竈（西より）



1.　29トレンチH-21号住居址（西より）

2.　29トレンチH-21号住居址竈（西より）

3.　29トレンチH-22号住居址（東より）

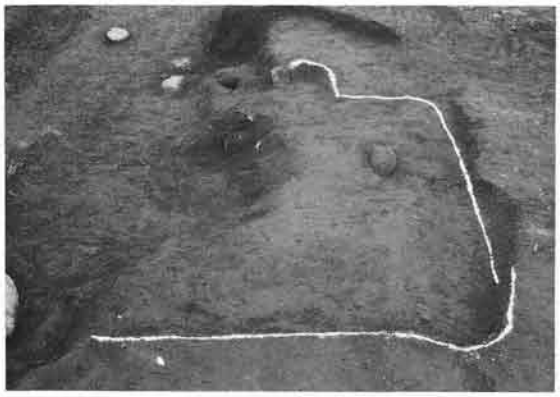
4.　29トレンチH-22号住居址遺物出土状態

5.　29トレンチH-26号住居址（西より）

6.　29トレンチH-26号住居址遺物出土状態

7.　29トレンチH-27号住居址（西より）

8.　29トレンチH-27号住居址遺物出土状態



1.　29トレンチH-28号住居址（西より）

2.　29トレンチH-28号住居址遺物出土状態

3.　29トレンチH-29号住居址（西より）

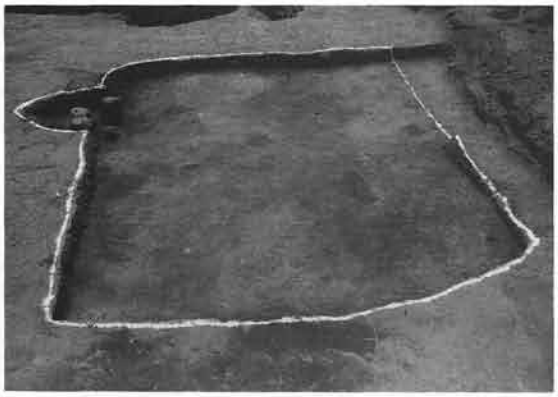
4.　29トレンチH-30号住居址（東より）

5.　29トレンチH-30号住居址遺物出土状態

6.　29トレンチH-31号住居址（東より）

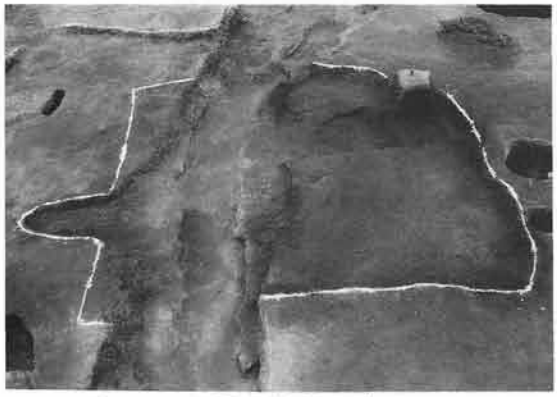
7.　29トレンチH-32号住居址遺物出土状態

8.　29トレンチH-33号住居址（南より）



1．　29トレンチH-34号住居址（北より）

2．　29トレンチH-35号住居址（東より）



3．　29トレンチH-44号住居址（北より）

4．　29トレンチH-45号住居址竈（西より）

5．　29トレンチD-93号土坑遺物出土状態

6．　29トレンチB-1号建物址（西より）

7．　29トレンチB-2号建物址（東より）

8．　29トレンチB-3号建物址（東より）

1.　Zトレンチ全景（北より）

2.　Zトレンチ全景（東より）

3.　Zトレンチ全景（南より）

4.　Zトレンチ全景（南東より）

5.　Zトレンチ作業風景（南より）

1.　Zトレンチ H-1号住居址竈（東より）

2.　Zトレンチ H-2、H-11号住居址（東より）

3.　Zトレンチ H-5号住居址竈（北東より）

4. Zトレンチ H-6号住居址（東より）

5.　Zトレンチ H-10号住居址竈（北東より）

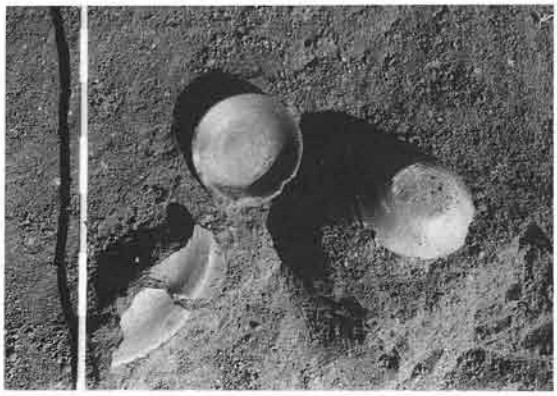
6.　Zトレンチ H-10号住居址遺物出土状態

7.　Zトレンチ H-11号住居址竈A、B（東より）

8.　Zトレンチ H-11号住居址竈B（南東より）

1.　Zトレンチ H 12号住居址竈（南東より）

2.　Zトレンチ H-12号住居址遺物出土状態



3.　Zトレンチ H 12号住居址遺物出土状態

4.　Zトレンチ H-12号住居址遺物出土状態

5.　Zトレンチ H-12号住居址遺物出土状態

6.　Zトレンチ H-12号住居址遺物出土状態

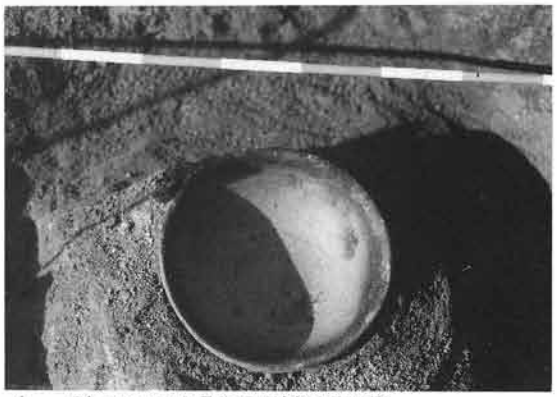
7.　Zトレンチ H-13号住居址竈（南東より）

8.　Zトレンチ H-14号住居址（南東より）

1.　Zトレンチ H-10、14、16号住居址（東より）

2.　Zトレンチ H-17号住居址（東より）

3.　Zトレンチ H-17号住居址竈（東より）



4.　Zトレンチ H-17号住居址遺物出土状態

5.　Zトレンチ P-32G遺物出土状態

6.　Zトレンチ P-34G遺物出土状態

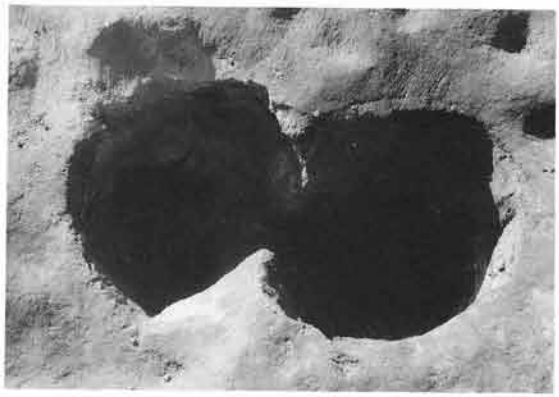
7.　Zトレンチ Q-34G遺物出土状態

8. Zトレンチ遺物出土状態

1.　Zトレンチ D-1、2号土坑（西より）

2.　Zトレンチ D-6号土坑（東より）

3.　Zトレンチ D-3、4、7、8、9、11号土坑（東より）



4.　Zトレンチ D-8、12号土坑（北東より）

5.　Zトレンチ D-14号土坑（東より）

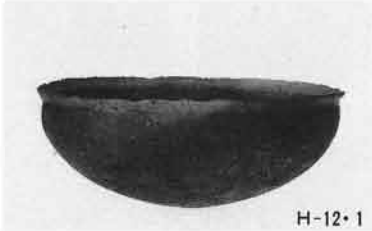
6.　Zトレンチ D-17、18号土坑（北より）

7.　作業風景（東より）

8.　調査を終えて

PL. 12

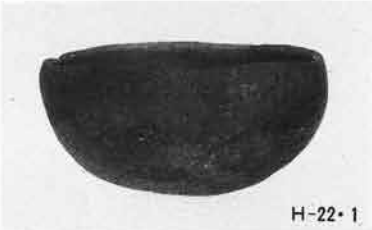
H-1・1

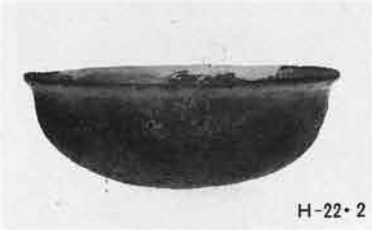

H-12・1

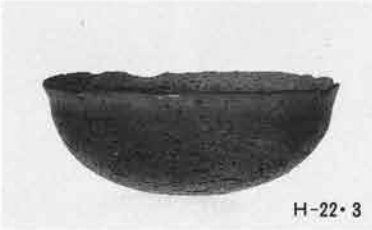
H-12・2

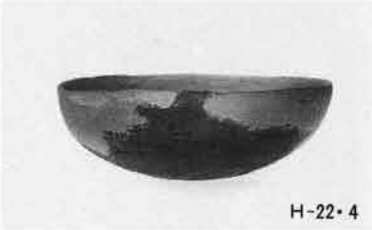
H-12・3

H-15・1


H-22・1


H-22・2


H-22・3


H-22・4

H-16・1 H-31・1 H-35・1

H-1・2

H-9・1

H-8・1

H-8・2

V-17G・1

Y-16G・1

H-19・1

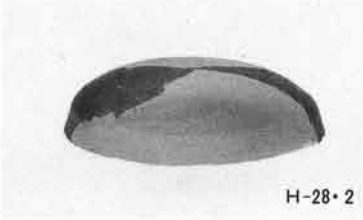
H-24・1

H-26・1

H-26・2

H-26・3

H-28・1


H-28・2

H-28・3

H-28・4

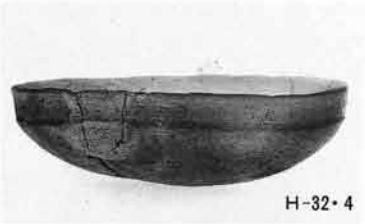
H-28・6

H-32・1

H-32・2

H-32・3

H-22・5


H-32・4

H-32・5

H-32・6

H-32・7

H-33・1

H-34・1

H-34・2

H-36・1

H-36・2

H-27・1

H-28・5

H-36・3

H-36・4

H-36・5

H-36・6

H-39・1

H-39・2

H-39・3

H-41・1

G-12G・1

H-30・1

I-11G・1

I-11G・2

I-11G・3

I-12G・1

PL. 16

I-12G・2

J-12G・1

J-12G・2

I-13G・1

M-11G・2

N-11G・1

V-11G・2

O-11G・1

R-14G・2

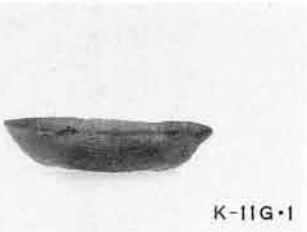
T-16G・1

W-17G・1

D-97・1

L-11G・2

L-11G・1


K-11G・1

H-27・2

K-13G・1

U-16G・1

R-14G・1

T-17G・1

U-16G・2

U-17G・2

V-17G・2

V-17G・3

W-17G・2

W-18G・1

W-18G・2

M-12G・1

PL. 18

D-30・1

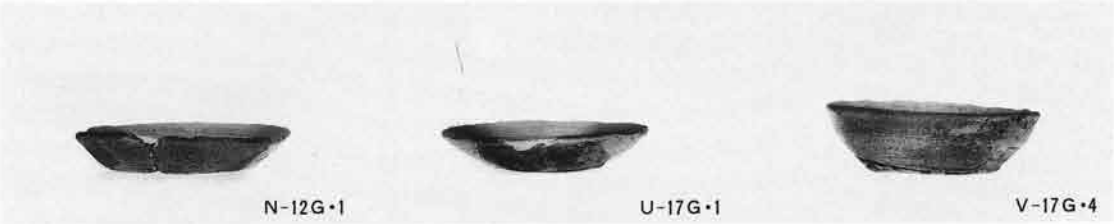
D-47・1

W-3・1

D-93・1

W-3・2

D-51・1


N-12G・1　U-17G・1　V-17G・4

29トレ・フク土11　D-92・1　S-15G・1

29トレ・フク土13

29トレ・フク土

N-11G・3

Z・H-2・48

Z・H-2・49

Z・H-6・253

Z・H-7・21

Z・H-8・59

Z・H-10・133

Z・H-10・172

Z・H-12・30

Z・H-12・43

Z・H-1・フク土

Z・H-2・8

Z・H-2・9

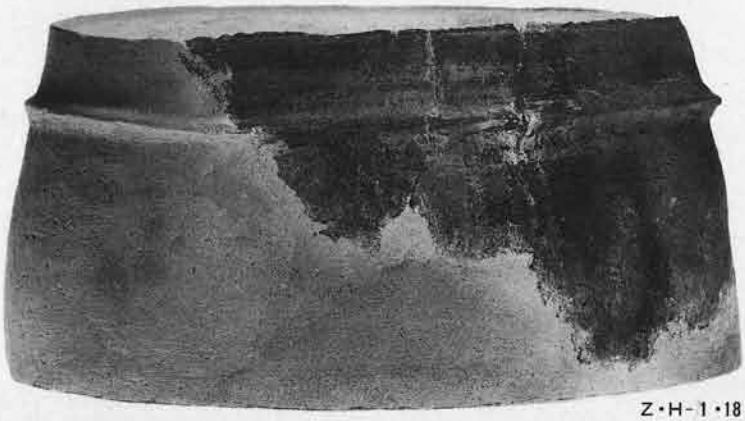
Z・H-2・89

Z・H-5・1

Z・H-5・フク土

Z・H-10・71

Z・H-10・72


Z・H-1・18

PL. 20

Z・H-12・44

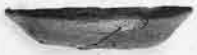
Z・H-12・46

Z・H-12・48

Z・H-12・65

Z・H-12・205

Z・H-12・206


Z・H-12・229

Z・H-12・230

Z・H-12・235

Z・H-11・27

Z・H-12・42

Z・H-12・45

Z・H-12・60

Z・H-12・61

Z・H-12・84

Z・H-12・96

Z・H-12・97

Z・H-12・98

Z・H-12・100

Z・H-12・106

Z・H-12・115

Z・H-12・305

Z・H-12・306

Z・D-15・15

Z・H-12・138

Z・H-12・139

Z・H-12・143

Z・H-8・19

Z・H-12・144

Z・H-12・184

Z・H-12・192

Z・H-12・204

Z・H-12・220

Z・H-12・265

Z・H-16・1

Z・H-10・52

Z・D-8・10　Z・D-17・フク土　Z・O-34G・11

Z・P-33G・55　Z・P-33G・59　Z・P-34G・98

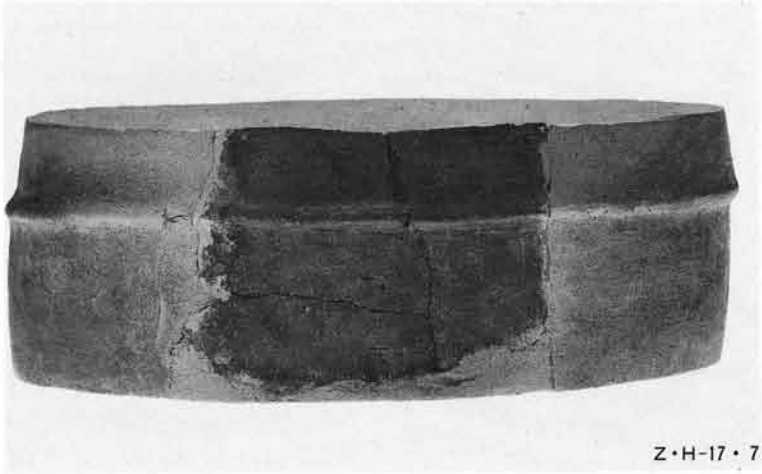
Z・P-35G・72　Z・Q-32G・6　Z・Q-35G・フク土

Z・H-17・21　Z・D-18フク土　Z・P-35G・54

Z・P-35G・91　Z・P-35G・96　Z・Q-34G・256

Z・Q-34G・262

Zトレ・1



Z・H-17・7

Z・Q-34G・255

Zトレ・3

Zトレ・27

Zトレ・29

Zトレ・30

Zトレ・57

Zトレ・79

Zトレ・81

Zトレ・82

Zトレ・95

Zトレ・101

Zトレ・125

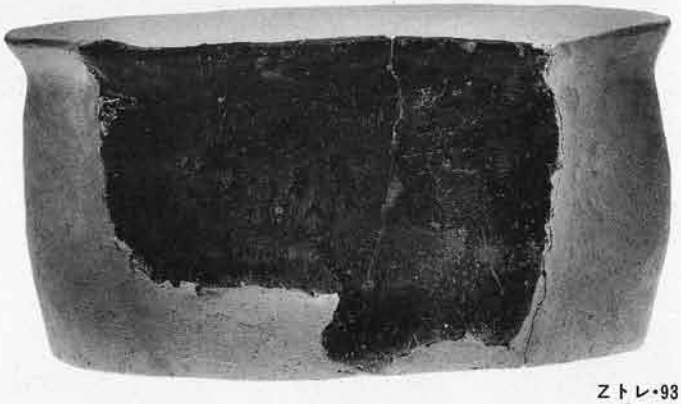
Zトレ・126

Zトレ・127

Zトレ・フク土

Zトレ・6

Zトレ・32


Zトレ・93

Z・フク土4

Z・フク土3

Z・フク土2

Zトレ・2

Z・P-33G・10

Z・P-34G・97

Z・Q-33G・37

Zトレ・70

Zトレ・80

Zトレ・92

Zトレ・143

Zトレ・フク土5

Z・P-34G・84

Z・O-18フク土

Zトレ・表採

29・W-2・2

調　査　要　項

遺跡名称	元総社明神遺跡（もとそうじゃみょうじんいせき）
遺跡記号	１Ａ４１ および ２Ａ４５
遺跡所在地	群馬県前橋市元総社町3,643ほか
調査期間	平成元年10月11日～平成元年12月27日（平成元年度 Ｚトレンチ） 平成２年５月７日～平成２年10月31日（平成２年度）
調査面積	平成元年度（Ｚトレンチ） 調　査　面　積：　793㎡　　試掘対象面積：　992㎡ 平成２年度（29トレンチ） 調　査　面　積：1,220㎡　　試掘対象面積：　2,218㎡
開発面積	275,000㎡
調査原因	土地区画整理事業
調査依頼者	前橋市都市計画事業元総社(西部第三明神)地区土地区画整理事業 施工者 前　橋　市　　代表者 前橋市長　藤嶋 清多
調査主体者	前橋市埋蔵文化財発掘調査団　　団長　遠藤 次也
事　務　局	事務局長　福田　紀雄　　事務局次長　遠藤　和夫　　財政係員　内田由治郎　藤岡　龍弘 庶務担当　佐俣　容子　　須田みずほ　　田野真喜子
調査担当者	井上　敏夫　　鈴木　雅浩
調査参加者	石田　洋子　　岩木　　操　　大田　一郎　　大塚みつゑ　　岸　フクエ　　近藤　俊男 駒形とし子　　佐藤　忠重　　須藤　恒雄　　住谷　文彦　　渡木　秋子　　富澤　清八 堀川千恵子　　宮原　麻吉　　湯浅たま江　　湯浅　道子
調査協力	群馬県教育委員会文化財保護課　　群馬県埋蔵文化財調査事業団　　区画整理１課 秋池　　武　　磯部　淳一　　大西　雅広　　加部　二生　　早田　　勉　　中山　茂樹 巾　　隆之 株式会社測設　　たつみ写真スタジオ　　パリノ・サーヴェイ株式会社

元総社明神遺跡 Ⅸ

平成３年３月20日　印　刷
平成３年３月30日　発　行

編集発行　前橋市埋蔵文化財発掘調査団
前橋市上泉町 664－4
ＴＥＬ　0272-31-9531

印　　刷　株式会社　開文社印刷所